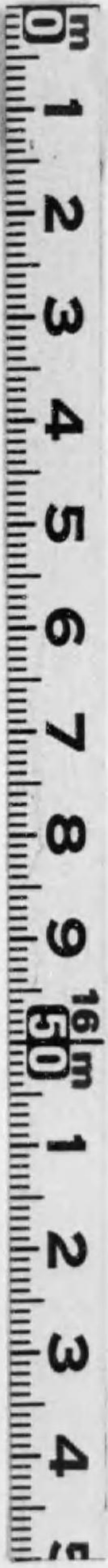


501

60

0
複写



始



35.11.16

50/-60



高須梅溪著

近代文藝史論

東京 日本評論社版

大正
10 5 24
丙午

本書の内容に就て

私が明治、大正年間に於ける文藝發達のあとを史的に論述しようと考えたのは、今から八年前のことです。最初は、原稿紙三千枚以上の物を書かうと考へたのですが、餘りに大き過ぎるので、今度は一千四五百枚のものとするになりました。恰度、友人茅原茂氏が拙著『明治大正五十三年史論』の出版を引受けて、日本評論社から公にした關係から、『近代文藝史論』の撰述を薦めてくれたので、私も年來の志望をはたし得る喜びを感じて、茲に本書の上巻（原稿紙約七百枚）を書きあげて、出版することとなりました。

在來、明治、大正の文學を史的に考察した著書が二三種ないではありませんが、何れも餘りに簡略に過ぎたもの、乃至小説に偏したもので、殊に一般文化及び思潮との關係を輕視した傾きがあります。私は本書に於て、最も精確な、有機的な文學史を書きたいと思つたのですが、紙數の都合上、各作家の性格、趣味、生活などを精叙し得ないので、此の點は、一つのエボツクを作つた代表作家のみとしました。而して（第一）特に力を入た

て一般文化、思潮との影響交渉を論じ、(第二)小説のみならず、評論、雜文詩歌其の他のものにも、相當の注意を拂つて、其の方面の人々の事業をも、力めて紹介することにしめた。(第三)文體の變遷、文體打破の徑路その他にも、相應の研究をして在來の文學史の足らぬところを補充しました。而して私の力の及ぶだけは盡し得たと信じます。

次に本書の下巻は、自然主義勃興前後から大正十年までの文藝發達史を論述する筈で目下執筆中で、大半出来て居りますから、近く發行し得ることと思ひます。以上の上下二冊を通じて、一般の御教示を賜りたく思ひます。

尙ほ本書著述について、茅原茂氏が種々の便宜を與へられたことを感謝いたします。

大正十年初夏

高須梅溪

例言

(一) 本書のうちで、演劇、繪畫のことを少しばかり記述したのは、文學と密接の関係があるため、彼是其の發達の推移を参照する必要があるからです。だが、これは、専門的に詳しく取扱つたのでありませぬから、其の簡略に失したのは止むを得ないことです。

(二) 他の文學史で、比較的を紹介されない文人で、特に紹介すべき必要ある人物は、本書に於て力を入れて、其の真相を明かにしようと思ひました。河竹默阿彌、齋藤綠雨、大西操山などは、其の一例です。

(三) 著者は、明治、大正年間の文士詩人は、大抵一二度以上、逢つた人が多いのですから、其の人物の印象をも詳しく詳しく豫定してしたが、紙數の都合で、此の點を斷念したのは、止むを得ないわけですから、他日、増補したいと思ひます。

(四) 文藝評論の發達は、他の文學史で、全く開却した點ですが、本書は、此の點には、力を注いで、

大體の發達を明かにするようにして置きました。

(五) 本書は、今迄出た現代文學史のうちでは、一番優れたものだとは言ひかねますけれども、大體に於て、圖まりよく出来て居ることを信じます。後に偉大な現代文學史が出る迄の補ひとなることを得れば。著者の本懐です。

近代文藝史論目次

總 說 現代文藝の大勢及び進歩……………	(一)
(一) 明治大正時代に於ける文藝發達の由來……………	(一)
(二) 明治文學に對する西鶴の影響……………	(三)
(三) 明治文學に對する芭蕉近松の影響……………	(六)
(四) 文藝的進歩の五原因と歐米文化……………	(八)
(五) 日本國民の文化的飛躍……………	(二一)
(六) 頻出せる文壇の人材……………	(二三)
(七) 文藝的進歩の五期……………	(二五)
(八) 第一期の後半に於ける文學……………	(二八)
(九) 第二期時代の文藝……………	(二九)

- (一〇) 第三期時代の文藝……………(三)
- (一一) 第四期時代の文藝……………(二九)
- (一二) 劇界の新運動……………(三四)
- (一三) 第五期の文藝……………(三六)
- (一四) 文壇と社會の接觸……………(四〇)
- (一五) 第五期時代に於ける劇壇と詩壇……………(四二)
- (一六) 結 論……………(四四)

第一期 舊套撲守時代……………(四七)

第一章 英米功利思想の流入と啓蒙運動……………(四九)

- (一) 大變革の時代……………(四九)
- (二) 英米功利思想の流入……………(五三)
- (三) 福澤諭吉の文明觀……………(五四)

- (四) 福澤の啓蒙的、改造的運動……………(五八)
- (五) 福澤の文學方面に於ける功績……………(六一)
- (六) 中村敬宇の『自助論』……………(六五)
- (七) 當時の教育と新學術……………(六七)
- (八) 新聞雜誌の啓蒙的勢力……………(六九)
- (九) 新文化開拓に貢献した『明六雜誌』……………(七二)

第二章 舊套を離れざる文學……………(七五)

- (一) 假名垣魯文の戲作と新聞小説……………(七五)
- (二) 劇壇に於ける河竹默阿彌……………(七九)
- (三) 惡の詩人としての默阿彌……………(八一)
- (四) 默阿彌の劇的技巧と其の強味……………(八四)
- (五) 默阿彌の短所……………(八九)

(六) 默阿彌の代表的作品……………(九二)

(七) 「東京繁昌記」其他……………(九三)

第三章 翻譯文學と政治小説の流行……………(九六)

(一) 政治思想の勃興と英佛獨の思想……………(九六)

(二) 翻譯文學の種類及び文體……………(九九)

(三) 翻譯文學の功果……………(一〇三)

(四) 政治小説の作者と技巧……………(一〇五)

(五) 當時の青年と文學……………(一〇九)

(六) 劇界革新の微光……………(一一三)

(七) 美術界と歐化的風潮……………(一二五)

第二期 新文學發生時代……………(一二)

第一章 當時の思想及び文學の概勢……………(一三)

(一) 歐米文學思潮と國粹的思潮……………(一三)

(二) 當時の社會思潮と文化……………(二六)

(三) 歐米文學とキリスト教思潮の勢力……………(二九)

(四) 新島襄のキリスト教宣傳……………(三一)

第二章 新文學の黎明……………(三五)

(一) 坪内逍遙の『小説神髓』……………(三五)

(二) 新文學の模型としての『書生氣質』と寫實主義……………(三六)

(三) ロシヤ文學と『浮雲』を書いた二葉亭……………(四三)

(四) 『浮雲』を書くに就ての苦心……………(四五)

(五) 『浮雲』の着想と新描寫……………(四九)

(六) 「浮雲」の缺點と特長……………(一五六)

第三章 徳富蘇峯を中心とした民友社……………(一五八)

- (一) 「國民之友」の文學的勢力……………(一五八)
- (二) 評論家として先驅者櫻痴と兆民……………(一六〇)
- (三) 當時續出した雑誌……………(一六四)
- (四) 文學評論の創始時代……………(一六六)
- (五) 蘇峰が創始した人物評論と政治記事の文學化……………(一六九)
- (六) 民友社中の文學的秀才……………(一七三)

第四章 尾崎紅葉を中心とした硯友社……………(一七五)

- (一) 言文一致の創唱者山田美妙……………(一七五)
- (二) 美妙の「夏木立」と「胡蝶」……………(一七八)

- (三) 紅葉の出世作「色懺悔」……………(一八二)
- (四) 紅葉の人物と優れた藝術的氣稟……………(一八六)
- (五) 紅葉の「新色懺悔」と「二人女房」……………(一九〇)
- (六) 紅葉の文學に於ける一進歩……………(一九三)
- (七) 「三人妻」の文章及内容……………(一九五)
- (八) 硯友社同人の文壇的活動……………(一九八)

第五章 紅葉に對峙した幸田露伴……………(二〇一)

- (一) 詩人としての露伴と其の作品の特質……………(二〇一)
- (二) 出世作「風流佛」の思想、文章……………(二〇四)
- (三) 藝術家氣質を描いた「一口劍」……………(二〇六)
- (四) 代表作としての「五重塔」と佳作「血紅星」……………(二〇九)
- (五) 「五重塔」の名文章……………(二二二)

(六) 「五重塔」の缺點及其他の作品……………(二六)

第六章 評論壇に於ける逍遙と鷗外……………(二八)

(一) 二人評論家……………(二八)

(二) 談理を好んだ鷗外……………(三〇)

(三) 「沒理想論」についての論戦……………(三三)

(四) 鷗外の逍遙の說に對する論難……………(三七)

(五) 談理と記實との問題……………(三〇)

(六) 評論界に於ける綠雨、不知庵、思軒……………(三三)

(七) 評論家としての北村透谷……………(三五)

第七章 硯友社以外の作家及作品……………(三八)

(一) 逍遙の「細君」及び「一圓紙幣の話」……………(三八)

(二) 鷗外の處女作「舞姫」……………(三九)

(三) 鷗外の「文づかひ」……………(四三)

(四) 小説家として綠雨と篁村……………(四四)

(五) 關西文壇の人々……………(四八)

第八章 傳奇小説、探偵小説及び歴史小説……………(五一)

(一) 行語つた寫實小説と文壇の新要求……………(五一)

(二) 傳奇小説の代表的作品……………(五四)

(三) 探偵小説の流行……………(五九)

(四) 探偵小説に對する非難……………(六一)

(五) 文壇に於ける歴史熱……………(六四)

(六) 文學と史傳の調和……………(六五)

(七) 歴史文學と傳記文學の價値……………(六八)

(八) 歴史小説の出現と其の作家……………(二七一)

(九) 當時の文藝批評と作家に對する要望……………(二七五)

第九章 翻譯文學の曙光……………(二七七)

(一) 最初に出た藝術的翻譯……………(二七七)

(二) 二葉亭の「あひびき」と「めぐりあひ」……………(二八〇)

(三) 思軒の漢文調と鷗外の國文調……………(二八二)

(四) 鷗外の「水沫集」と翻譯小説……………(二八四)

(五) 内田不知庵の「罪と罰」……………(二八七)

(六) 逍遙の「マクベス」評註……………(二九〇)

第十章 新體詩、戯曲及新國文……………(二九四)

(一) 「新體詩抄」と初期の詩壇……………(二九四)

(二) 哀世詩人としての北村透谷……………(二九六)

(三) 劇文學開拓と學海、櫻痴……………(二九九)

(四) 新しい意義の演劇論……………(三〇一)

(五) 逍遙の新史劇についての意見……………(三〇四)

第十一章 文化思潮の特相と美術及び演劇……………(三〇六)

(一) 文明批評の先驅者大西操山……………(三〇六)

(二) 哲學の民衆化的傾向……………(三一〇)

(三) キリスト教の發展と佛教の復活……………(三一三)

(四) 此の期の劇界と新舊勢力……………(三一五)

(五) 日本畫の勃興と雅邦、芳崖……………(三一八)

(六) 青年繪畫協會と明治美術會……………(三二一)

第三期 ロマンチズムの時代……………(三三三)

第一章 思想界の大勢……………(三三五)

- (一) 日清戦争に對する文化的考察……………(三三五)
- (二) 日本主義の提唱と其の意義……………(三三九)
- (三) 日本主義の長所及び缺點……………(三三三)
- (四) 世界主義及び帝國主義の提唱……………(三三五)
- (五) 現實的傾向と道德論理の研究……………(三三八)
- (六) 樗牛の個人主義、天才主義、本能満足説……………(三四〇)
- (七) 哲學宗教熱の沸騰……………(三四二)
- (八) 網島梁川の宗教思想……………(三四六)
- (九) 社會主義思潮の發生……………(三四九)

第二章 文壇の新機運が生んだ觀念小説深刻小説……………(三五三)

- (一) 戦勝と文學……………(三五三)
- (二) 文壇に於ける黨閥と新人……………(三五六)
- (三) 觀念小説の先驅者泉鏡花の藝術的資質……………(三六一)
- (四) 川上眉山の新傾向……………(三六四)
- (五) 廣津柳浪の深刻小説、悲慘小説……………(三六六)
- (六) 柳浪の代表作と心理描寫……………(三六九)

第三章 群起した文壇の新人……………(三七二)

- (一) 人としての桶口一葉……………(三七二)
- (二) 生活を藝術化した一葉……………(三七五)
- (三) 一葉の文學的進路と描寫の特長……………(三七七)
- (四) 一葉の代表作「たけくらべ」の藝術味……………(三七九)

(五) 新進作家としての宙外、抱月、天外、風葉……………(三八一)

(六) 風葉の出世作「戀慕流し」……………(三八五)

第四章 社會小説家庭小説の出現……………(三八七)

(一) 文壇に於ける社會的風潮……………(三八七)

(二) 内田魯庵の社會小説……………(三九〇)

(三) 最初に家庭小説「不如歸」を書出した蘆花……………(三九三)

(四) 田山花袋の新進作家時代……………(三九五)

第五章 新進作家に對峙した紅葉、露伴……………(三九九)

(一) 紅葉に對する非難と嘲罵……………(三九七)

(二) 「小説の米の飯」と自稱した「多情多恨」……………(四〇〇)

(三) 「多情多恨」に於ける巧妙な描寫……………(四〇三)

(四) 藝術上の時代的要求を轉合化した「金色夜叉」……………(四〇七)

(五) 露伴の大作「風流微盡藏」……………(四一一)

(六) 「新浦島」の思想及び技巧……………(四一三)

(七) クラシックの味が深い「二日物語」……………(四一六)

(八) 水蔭、美妙、小波の文學的收穫……………(四一七)

第六章 後半期の小説と少壯作家……………(四一九)

(一) 鏡花の作品に現はれた神秘的傾向……………(四一九)

(二) 此の期に於ける蘆花、春雨、秋聲、春葉……………(四二三)

(三) 天外のゾライズムの功過……………(四二六)

(四) 風葉の藝術的得失……………(四二九)

(五) 小説の新傾向に志した人々……………(四三一)

(六) 「水彩畫家」を書いた島崎藤村……………(四三三)

(七) 「地獄の花」を書いた荷……………(四三五)

第七章 此の期に於ける戯曲 翻譯雜筆……………(四三七)

- (一) 新史劇の先驅となつた「桐一葉」……………(四三七)
- (二) 逍遙の三部曲の最初に出た「牧の方」……………(四四一)
- (三) 鷗外の「兩浦島」と「日蓮上人辻説法」……………(四四三)
- (四) 劇壇と文壇の接觸……………(四四五)
- (五) 二葉亭の名譯「片戀」と「うき草」……………(四四七)
- (六) 鷗外の「即興詩人」と上田柳村の南歐文學の紹介……………(四四九)
- (七) 寫生文、美文、紀行文、隨筆……………(四五三)

第八章 此の間に於ける新體詩……………(四五六)

- (一) 擬古派の少壯詩人……………(四五六)
- (二) 鐵幹と子規……………(四五八)

- (三) 新體詩界の黎明……………(四五九)
- (四) 藤村が開拓した詩境……………(四六一)
- (五) 冥想詩人としての晚翠……………(四六四)
- (六) 泣菫と有明の詩人的特質……………(四六七)
- (七) 史詩の流行……………(四七一)

第九章 短歌及び俳句……………(四七三)

- (一) 直文、鐵幹の短歌革新運動……………(四七三)
- (二) 「亂れ髪」の女詩人……………(四七五)
- (三) 竹の里人の一派……………(四七八)
- (四) 正岡子規の俳句革新運動……………(五八一)
- (五) 子規及び其の周圍の人々……………(四八四)

第十章 文藝評論の勃興及び演劇美術……………(四八八)

(一) 新進評論家の輩出……………(四八八)

(二) 文壇に於ける美學研究の傾向……………(四九〇)

(三) ニーチェについての論争……………(四九四)

(四) 樗牛の美的生活説……………(四九七)

(五) 文壇に於ける現實生活の問題……………(四九八)

(六) 梁川の思想と文壇的交渉……………(五〇〇)

(七) 文藝評論の勢力……………(五〇三)

(八) 劇界の新現象……………(五〇三)

(九) 美術界の新現象……………(五〇五)

— 目次畢 —

近代文藝史論

高須梅溪著



總說

現代文藝の大勢及び進歩

(一) 明治大正時代に於ける文藝發達の由來

明治、大正の時代を通じて、最も進歩したのは、何であるかと云へば、私は第一に文學だと答へるに躊躇しない。政治や、經濟や、學術なども、勿論、相應な進歩を承したにちがひないけれどもこれを文學の進歩に比較すると、大分、劣つて居ると云はねばならぬ。現時の文學は、歐米の文學に比較しても、決して劣つて居ない。其の優秀な部分は、慥かに獨創的な内容と形式とを備へて居

總說 現代文藝の大勢及進歩

る。少くとも、一面に於て、歐米文學の摸倣状態から脱出して居る。斯うした現象は、眞に空前である。平安朝時代、元祿時代、文化文政時代の文學とても、明治大正時代の文學的進歩に遙かに及ばないやうに思はれる。後世の史家は屹度、明治大正の文學時代を日本に於ける偉大な文藝復興期として、正に元祿期の文學と相對比して論ずるであらう。

明治大正に於ける偉大な文藝復興は、國史の上に於けるそれが對比を元祿期に求めるよりほかはない。元祿期は、日本に於ける最もブリアントな時代の一つである。今まで抑へ付けられて居た民衆が、ある程度に於て解放されて、生の飛躍、生の歡喜を味ふことが出来るやうになつて、そこに始めて民衆文藝の花が一時に開いた。近松巢林子、松尾芭蕉、井原西鶴、尾形光琳、菱川師宣らの巨匠は、何れも、元祿に於ける民衆の新興精神の中から出た人々であつた。殊に巢林子、芭蕉、西鶴の藝術は、今日も尙ほ偉大な生命を保つて居て、日本文學史上に於ける尊い收穫を示して居るのである。

けれども元祿期の偉大さも、これを明治大正の偉大に比較すると、遙かに劣つたものになる。少くとも、文藝の上に於て、左様である。日本人には、一種の尙古癖、過去嘆美癖があつて、すべて現在よりも、過去を美しく見る傾向がある。近松や、芭蕉や、西鶴を産出した元祿期を以て、明治

大正に優つて居ると見るものがないとも限らない。けれども冷靜に考へると、恐らく、左様でないことを發見するにちがひない。假りに、明治、大正の文壇に於ける故人を數へて見ても、尾崎紅葉、高山樗牛、國木田獨步、長谷川二葉亭、正岡子規、樋口一葉、岩野泡鳴、上田敏、網島梁川、大西祝、川上眉山、河竹默阿彌らの人々がある。紅葉の小説は、決して西鶴に劣つて居ない、默阿彌の戯曲は、巢林子に追隨し得る丈の光彩を以て居る、子規の俳句は、芭蕉に肉迫するに足りる内容を持つて居る。その他、ロシヤ文學に於ける二葉亭、短篇小説に於ける獨歩及び一葉、評論に於ける樗牛、祝、梁川の如きは、何れも不朽の光りを放ちつゝある。斯うして、彼是對照すると、明治大正の時代は、文學的に最も偉大なブリアントな收穫を示したものと云はねばならぬ。殊に現存の第一流大家のうちにも、不朽を以て目すべき人々が、少くとも、十名に上つて居る以上は、私が、現代文化の中に於て、文學が一番、進歩して居ると云つたことは、決して不當ではない。

(二) 明治文學に對する西鶴の影響

明治、大正の文學が、それ程、目ざましい進歩を示した由來、原因は、何であらうかと云ふことを一考するのは、此の際、順序として、必要である。其の由來は、傳統的に進んで來た江戸時代の

文學を繼承すると共に、其の長所を吸収したことにある。近松、西鶴、馬琴、京傳、一九、三馬、春水、芭蕉、蕪村、眞淵、景樹らの文學は、明治文學に相應の影響を及ぼした。殊に芭蕉と西鶴とは、日本の現代文學に著大な深い影響を與へた。例せば、幸田露伴、樋口一葉らは、簡勁な西鶴の文章に傾倒したことがあつた。尾崎紅葉は、嘗に西鶴の文致に共鳴したのみならず、其の好色本から來た感化をも明かに受けた。ひとり以上の三人ばかりでなく、自然主義の主唱者田山花袋の如きも、西鶴を研究して、得るところが、極めて多かつたことを『西鶴小論』のうちに述べて居る。勿論、花袋は、好色本よりも、寧ろ他の作品に共鳴したので、それについての感想を記して「西鶴物と言へば、人はすぐ好色物を聯想する。好色物即ちかれの藝術のすべてだとさへ思はれてゐる。しかし私はさうは思はない。私は好色物以外に、かれの眞面目な、本當な、人に知れない理解を發見して、いつも驚愕の眼を睜つた。」と云つて居る。花袋が共鳴したのは『胸算用』や『永代藏』などで、それは、大阪町人の金銭生活を描いたものである。

花袋は、西鶴の『胸算用』について「あの中にはどんなに深いかれの悲痛がかくされてあるか。智慧あり且つ聰明なる大阪人の苦痛がかくされてあるか。かれはその中に『金』を取扱つた。むづかし『金』の悲劇を取扱つた。私達作者の願ひとしては、『女』と『金』とを十分に理解したい。『金』を唯

物質と思つてゐるやうな心の簡単な境から離れて、金即心、金即女といふ境、更に進んで、物質即ち心と言つたやうな境、さういふ境に入つて行きたい。かう思つてゐても中々其處には行けない。『女』はまア書けても『金』は容易に描けない。何故なら『女』には『詩』があるが『金』には『詩』がないからである。『詩』のない『金』を描いて、それが『眞』に達するといふことは容易なことではない。それを西鶴は『胸算用』『永代藏』でモウバツサンや、チェホフが書いたもの以上に本當の『金』を書いた。近松の藝術には、『金』はあつても、要するに芝居で見る『金』だ。梅川忠兵衛の『金』などは、決して心に喰ひ入つた『金』ではない。女即金と言つた『金』ではない。それから比べると『永代藏』にある『拾つた金』の悲劇などは、深く心理に觸れて行つてゐた。私の考では、日本の文壇で、『金』を本當に取扱つた作者は、かれを除いては他にない。『胸算用』のうちにある大晦日の苦痛、あれは今では我々の心に響いて來る。我々の生活を動かして來る。あらゆる善きもの、美しきもの、あらゆる思想、あらゆる理想、それが到る處で幻滅してゐる。」と云つて居る。これで見ると、花袋は、紅葉、露伴などは、別の意義で西鶴に傾倒して居ることが知れる。

島村抱月も亦西鶴に共鳴して居た。勿論、彼れの小説は、近松の戯曲から深い影響を受けたことを示して居るけれども、自然主義運動に参加した頃から、西鶴の藝術に對して、深く共鳴した。五人

女に見えたる思想』のうちで「西鶴の人生は個人性、快楽性、感情性の一圖の向上より生ずる寂寞不満の感を見せたものではないか。此の意味よりいふときは、西鶴の思想は多くの點に於いて、却つて近代の歐洲文藝に見えたる思想と接應する。」と云つた。

西鶴の作品は、今日、研究しても、いろ／＼の事を考へさせる。それだけに深い永遠性をもつて居る。だから、今日の作家にも、勿論、新しい印銘と感化とを與へるであらうけれども、在來の作家では、紅葉、露伴、一葉などが、西鶴から感化されたことを、其の作品の上に現はした。大正時代の文壇は兎も角、明治の文壇は、可なり、傳統的に西鶴に負ふところが少くなかつたことを證明して居るのである。

(三) 明治文學に對する芭蕉、近松の影響

西鶴の次ぎに明治文壇に深い影響を與へたのは芭蕉である。それに續いては、近松巢林子である。芭蕉は、蕪村と共に、正岡子規を動かして、明治の俳壇を革新させたばかりではなかつた。芭蕉の藝術は、北村透谷、島崎藤村らの如き『文學界』の一派をも深く動かした。透谷の哀世思想、藤村の放浪時代に於ける思想と表現とは、芭蕉から來た感化のあとが明かに印象せられてある。藤村の新

體詩と小説とは、明治、大正の文壇を通じて、不變の生命力を有して居る以上、芭蕉が、明治文學に與へた影響を見逃がすわけに行かないと同時に、今日の文學にも、隱然、新しい印銘を附與すべき可能性を有することを肯定して、差支へないやうな氣がするのである。

近松巢林子も亦明治文壇に相當な感化を及ぼした時代があつた。坪内逍遙が先頭に起つて、明治二十三年『日本評論』に『評釋天の網島』を發表して、新しい解剖を試みて以來其の聲みに倣ふものが出た。高山樗牛は明治二十八年『近松巢林子』『巢林子の女性』『近松巢林子の人生觀』などを『太陽』『帝國文學』などに發表した。續いて、二十九年には『早稲田文學』に於ける『近松研究』が連載されて、一般に相當な影響を與へた。抱月は巢林子の作品に就て『近松の藝術及人生』『近松と東西心中劇の比較』などの論文を書いた。のみならず、彼れの小説『しろあらし』『玉かづら』『めをと波』などは、近松の構圖に學ぶところがあつた。花袋は『明治小説内容發達史』のうちで「抱月の作は、布置の整然たるを以て特色とされ、一般に近松の感化を受けたものと認められた。」と云つて居る。明治文壇が、近松の戯曲から相當の感化を受け入れたことは、以上の敘述によつても明白である。思ふに、大正の文壇も、幾分か近松の影響を受けるかも知れないけれども、それは、西鶴や、芭蕉に比較すると、遙かに淺いものにちがひない。

要するに、明治文學の發達は、其の由來の上に於て、江戸時代文學の巨人であるところの芭蕉、西鶴、巢林子に負ふところが、少くなかつたことは、以上の通りであるが、其の他馬琴、春水、三馬、一九、眞淵、景樹らの影響を幾分づゝ受け入れたことも見逃がすわけに行かない。高山樗牛は『明治の小説』のうちに於て「明治十年以前の小説は、徳川時代の殘肴冷杯を嘗啜して僅に其餘脈を繋ぎたるの有様なりき。……其文體より見れば、馬琴、春水、三馬、一九の糟粕を嘗むるのみ。」と云つて居るが、それは、正確な事實であつた。また明治初期の文壇に於けるユーモリストとして知られて居た饗庭篁村の如きは、其積、三馬、一九の影響を最も多く受けた。さうした色合は、明治二十五年頃までは、仄かに一部の作家の上に残つて居たのである。それ等は、西鶴、近松、芭蕉のやうに、明治文壇に宜い意味の影響を與へたことが、極めて少かつた。

(四) 文藝的進歩の五原因と歐米文化

更らに、明治、大正の文學が發達した原因を考へると、凡そそれを五つに分けることが出来る。第一は時勢の變革、第二は歐米文化の流入、第三は民衆生活の進歩、第四は日清戦争、日露戦争の勝利第五は人材の輩出などである。在來出た明治文學史などには明治文學發達の原因を究明して居

ない。偶まあれば、歐米文化流入の一事を數へて居るに過ぎないのである。だが、歐米文化流入の一事だけでは、どうにもならないのである。それに對して、民衆の自覺、努力がなければならぬ。生の發展、飛躍がなければならぬ。日本の富強を増進せしめたところの戦争と勝利がなければならぬ。さうした環境、雰圍氣のうちにあつて、それに適應して腕を伸ばすところの詩人、文士がなければならぬ。即ち私が數へあげた五種の原因が、彼是相俟ち、相依つて、綜合され、融化されたところに、明治、大正の文學が發達したのである。

明治、大正の文學は、維新革命が產出したものである。江戸末期の廢頽文學は、既に行き着くべきところ迄、行きつくしてしまつたのであるから、どうしても、新生面を開拓せねばならぬ必然的な勢になつて居た。そこへ勃發したのが、明治維新の革命であつた。勿論、それは、十九世紀初頭に於けるフランス革命のやうな烈しい性質のものではなかつたけれども、日本史上に於ては、空前のものであつた。此の革命によつて、封建制度は全く顛覆して、在來の文化は、半ば以上、破壊されて了つた。而して舊文化に代るべき新文化の建造に着手する時代に入つた。それで、舊文化の佛は、尙ほ社會の一部に残存しては居たけれども、大抵のものは、新しい地盤の上に築かれることとなつた。政治も、經濟も、教育も、學術も、すべて新しい色彩を帯びて現はれて來た。此の際、ひ

とり文學のみ新しくならぬわけはなかつた。明治文學の萌芽は、維新革命が齎らした新文化の一部だつた。

明治維新の日本が、新文化を作り出すに當つて、唯一の目標としたのは、歐米文化であつた。歐洲の文化は、既に戰國時代から、徐ろに日本に流れ入つて居たが、それは、素より微々たるものであつた。幕末頃に一部の知識階級が、オランダ語を透ぼして、歐洲文化に接觸して居たが、これとて、素より云ふに足らなかつた。眞に歐米文化が、急潮のやうな勢を以て、日本に流入し始めたのは、明治維新の始めからで、其の後も、引續いて、流入して居ることは云ふ迄もない。明治大正文學の進歩を促すべき絶大な勢力となつたのは、實に歐米文化である。

最初は、主として、英米文化が、わが國に流入したが、其の後、フランス、ドイツの文化も亦流入して、歐米各國の文學や、思潮がわが文壇の人々に強い感銘を與へた。明治文學の黎明は、イギリス文學に親んだ坪内逍遙によつて促進されたのみならず、ドイツ文學の造詣が深かつた森鷗外によつて、一層、向上の機縁を作り出された。フランス思潮に共鳴した中江兆民、ロシア文學に傾倒した長谷川二葉亭、内田魯庵らによつて、わが文學思想は、比較的早く進んだ。それ等は、主として、明治文壇の黎明前後の現象であるが、其の後、ゾラに私淑した小杉天外、永井荷風の寫實主

義、歐洲大陸文學に親んだ田山花袋、島崎藤村らの自然主義を始め、大正の今日に至る迄の文壇の新運動は、大抵、歐洲文學から得た新しい印銘が原動力となつて起つて居る。ひとり、それは、小説の上のみ限定されて居る現象ではない。戯曲も、長詩——會て新體詩と稱した——も、すべて歐洲文學の影響と刺戟とによつて、發達したのである。今後の日本文學は、或は半ば以上、独自の發達を續けてゆくかも知れないけれども、これ迄の文學は、悉く歐米文學の影響の下に進んで來たのである。

(五) 日本國民の文化的飛躍

だが、それに就て考へねばならぬのは、日本國民の生活が、時代に適應して、漸次に向上したところである。其の文化的能力に於ても、政治、商業、軍事の上に於ても、世界の新風潮に遅れまいとして努力した。これが、何よりも重要な一契點である。たとひ、維新の革命が勃發しても、歐米文化が急潮のやうに流入して來ても、日本國民の文化的能力が、それに適應してゆくことが出來なければ、一切駄目である。ところが、日本國民は、三百年間の平和によつて、日本獨有の文化を完成し得たのみならず、外から來る文化的刺戟を巧みに受け入れて、それを十分、咀嚼し、融化してゆ

く力を持つて居た。それで、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツなどの新文化が一時に流れ寄つても、左程、狼狽しなかつた。快活に敏捷にそれを受け入れた。而も其の取捨や、選擇についても、大體の方針を誤らなかつた。歐米の物質文明の長所を一切、採り入れて、日本を富強にすることに力めた。それと共に、歐米の精神文明をも吸収して、學術、教育等の刷新を行つた。斯うして明治文壇の黎明が始めて見えるまで、日本國民のすべては、日本の新文化を築きあげることには忙しなかつた。斯うした空氣の中から、坪内逍遙の『書生氣質』や、長谷川二葉亨の『浮雲』などが出たのである。

文學は、貧弱な國には、決して勃興しない。何となれば、文學の發達を助長すべき機縁に乏しいからである。日本は、既に上下を擧げて、富強に力めた上、日清戦争に勝ち、日露戦争に勝つて、更に其の富強の度を加へた。更に其の富強に加へたばかりではなかつた。國民的自負心を増進させた。この事が、文學の進歩の上にとの位有力な影響を與へたかと云ふことは、日清戦後、日露戦後の文學が自ら證明して居るところである。

戦勝が、必然的に文學の進歩を促すかどうかは、一概に断定し得ないところであるけれども、古來、戦勝後、文學が旺盛となつた國が可なりに多い。ドイツが、七年戦争の勝利後、レツシング、

クロプストツクなどの文豪を出したことや、フランスが、ルイ十四世の時代に全歐に覇たるべき武威を示した際、ラシーヌ、モリエール、コルネーユなどの偉大な文人を出したことなどを考へると戦勝は、概して文學の進歩を促す原動力となるやうに思はれる。それは、確かに國民的自負心を喚起させるからだと云ふばかりではなく、戦勝から来る經濟上の巨利が、國民の富を増進せしめ、生活を向上させて、社會の好景氣を煽り立てるからである。即ち生活上の進歩と餘裕、精神上の飛躍と自覺とが、相依り、相俟つて、文學上に於ける目ざましい進歩を實現すべき雰圍氣を作り出すために、戦勝後の文學が非常に振ふのである。明治の文學が、著しく進歩したのは、日清戦後と日露戦後との勝利の榮光に輝いた時代であつたことを思ふと、戦勝と文學との關係が、一層、明白に解かれるのである。

(六) 頻出せる文壇の人材

斯うして、明治の文學は、種々の機縁が錯綜して、進歩したのであるが、それについて、進歩の中心となるべき人物がまた空前に輩出したことを見逃してはならぬ。小説に於ても、長詩に於ても短歌、俳句に於ても、將た戯曲や評論に於ても、いろ／＼の有力な人材が一時に輩出した。評論文

北村寿賀子

の如きは、明治に入つて、始めて進歩したのであつた。それは福澤諭吉によつて始められて、其の後、多くの文人によつて、大成されたのである。單に文藝評論の如き範圍に限定して考へて見ても、逍遙、鷗外、忍月、透谷、樗牛、綠雨、嶺雲、梁川、筑水、敏、桂月、操山、抱月と云つたやうな人によつて、略ぼ大成されたのである。科學的批評を試みた文藝評論家が、出たのは、明治文壇の一特色で、逍遙、鷗外の二人は、文藝評論の最初の模型を示した人であつた。而して其の後に續いて、大小の文藝評論家が出たのである。

明治文壇に於て、小説家として輝いた人々は、可なりに多かつた。紅葉、露伴、一葉、風葉、鏡花、柳浪、天外、眉山、春葉、宙外、水陰、蘆花、美妙、獨歩、藤村、白鳥、泡鳴、鷗外、荷風、漱石、虛子、秋聲、花袋らを始め、他にも相應な作家が居た。長詩に於ては、藤村、晚翠、泣菫、有明、白秋、露風らが居た。短歌に於ては、直文、信綱、晶子、寛、薰園、牧水、柴舟、空穂、啄木、哀果、左千夫らが居た。俳句に於ては、子規、鳴雪、虛子、碧梧桐、井泉水などが居た。戯曲に於ては、逍遙、櫻痴、默阿彌などを初め、吉藏、雨雀、破笠、綺堂らが居た。評論方面では、長江、伸、御風、臨川、王堂なども居た。

以上は、明治時代の人々で、其のうちには、大正時代にかけて活動して居る人々も少くない。だ

が、大正時代に入ると、作家としての中心人物は、新人によつて、占められるやうになり、評論も、戯曲も、新人の色彩が濃厚になつて居る。谷崎潤一郎、上司小劍の如きは、大正時代に入つて、寧ろ特色を發揮した。だが、それは暫く措いて、明治文壇に輩出した人材が如何に多かつたかと云ふことは、以上、列挙した人名によつて見るも明かである。

要するに、右に挙げた五種の原因と江戸文學の傳統的影響との下に、明治文學の著大な發達を促がして、其の餘波が、更に大正文學の發展を促がしたのである。其の作用、關係は、極めて複雑で尙ほ他に小さいいろいろの原因があるにちがひないけれども、大體、以上の通りである。若し小原因の一二を附加するならば、普通教育、中等教育の進歩と普及から來た讀書力の増進や、自然主義勃興前後から、新人が文壇に出る機會と道とが自ら開かれて、政治界、實業界のやうに、老人が跋扈しない事なども數へて差支へないであらう。此の點に於て、文壇は比較的自由な、清新な空氣が、絶えず流動して居るので、これも、文學的進歩を促がす上に相當の功果があるにちがひないのである。

(七) 文藝的進歩の五期

明治、大正に於ける文學の進歩は、前後連続して、有機的關係を保つて居るが、其の進歩の徑路を明かにするには、勢ひ或る區劃を假定せねばならぬ。それで、私は明治初年から大正十年に至る迄の文學的進歩を五期に分つて説明しようと思ふのである。其の第一期は、明治初年から十八九年迄である。第二期は十八、九年から日清戦争前後迄である。第三期は日清戦争前後から日露戦争前後迄である。第四期は、日露戦争前後から明治末年頃迄である。第五期は、大正元年から今日迄である。此の區劃が當を得て居るかどうか、勿論、見る人によつて、多少の相違がないとは云へないけれども小説、評論を中心として、文壇に於ける主潮の變化に力點を附するとすると、此の區劃が、比較的妥當を得て居るやうに思はれる。

それで、右のうち、第一期は舊套^{モウソウ}保守時代である。第二期は新文學發生の時代である。第三期は寫實主義的過渡時代若くはロマンチズムの時代である。第四は自然主義の時代である。第五期は、各流派分立の時代である。此の區劃は、文學のすべてに亘つて、當てはめ得ないかも知れないけれども、大體、評論でも、小説でも、戯曲でも、長詩、短歌、俳句でも、略ぼ文學界の思潮と相觸れる關係から脱出しない以上は、大抵、當てはまらう。私は、評論と小説とに重きを置いて、右のやうな區劃を立てたのであるから、時には、俳句、短歌などの方に、當てはまらないともあるだらう

それは、複雑な現代文學の進歩的徑路を明かにする上から、自然、止むを得ないのである。

第一期の前半は、明治文學の闇黒時代、後半は、準備時代とも云ふべき有様にあつた。前半は、明治初年から十年頃迄である。後半は十一年から十八年頃迄である。前半の時代は、大改革、大動搖の最中で、思想、生活の兩方面に激しい變化と動搖とを續起したから、文學、美術などは、全然、顧みられなかつた。社會では舊分子と新分子、保守派と進歩派との烈しい争ひから、神風連の亂、萩の亂、佐賀の亂などを始め、征韓論を起點として爆發した西南戦争などがあつて、こつた返した。それと同時に新政府の要路に起つた人々は、政治、財政、司法、軍事、教育、産業等の上に大改革を加へて、有名な廢藩置縣をも斷行した。斯うした有様だから、誰も彼れも騒亂と改革とに忙殺されて、有爲の人材は皆其の當面の必要な仕事に奔走し、熱中した。それで、文學方面に居たものは舊套を襲ふに過ぎない保守的な人々に過ぎなかつた。其の小説も一九、三馬、春水、馬琴の作風を模倣したもので、何等の新意を認めることが出来なかつた。其の中で、稍目に附いたのは、假名垣魯文位のものであつた。脚本の方では、僅かに河竹默阿彌が居た。彼れは江戸演劇の最後の殿將として、最も光りを放つた。魯文の代表作は『西洋道中膝栗毛』で、一九の『膝栗毛』を模倣したのである。默阿彌の代表作は『三人吉三』『村井長庵』などで所謂白浪物の長所を巧みに發揮したものであつ

た。

更に廣義に於ける文學の埒内にあつては、成島柳北の『花月新誌』や、福澤諭吉の『世界國畫』及び『學問の勸め』や、中村正直の『西國立志篇』などが出た。また明治五、六年頃に續生した新聞雜誌が通俗的な文學趣味を普及したことも注目しに價した現象の一つであつた。要するに、第一期の前半に於ける文學的進歩は、殆ど云ふに足りなかつた。

(八) 第一期の後半に於ける文學

後半に入ると、西南戦争によつて、多くの不平士族を除き去つて、平民階級の勢力が増したのみならず、一先づ騒亂を打切つてしまつて、平和な時代に入り始めたところから、文學方面の仕事も幾分か新しい光りの下に蘇生の色を帯び始めて來た。此の時代には、自由民權の思想が中江兆民、板垣退助らによつて輸入されて、それが天下を風靡した。而して新たに政治運動によつて、自己の地歩を占めようとした士族、地主などが驟起して、到るところに烈しい政治熱を起させた。政治の改革！それが時代の中心興味だつた。此の時勢の傾向に應じて、當時の文壇に流行したのは、勿論政治小説であつた。それに雁行したのは、科學小説であつた。科學小説は、當時、何事にも『文

明開化』と云つた人々に對して、歐米の科學思想を傳へようとする一種の啓蒙的意義から相當に流行した。

政治小説には、翻譯と創作とがあつたが、最初、其の先驅となつたのは、明治十二年に出た織田純一郎の『花柳春話』で、それはリットンの作物を譯したものだつた。當時、最も目新しかつた此の種の政治小説も、畢竟、歐洲文學の刺戟から出たのであつて、藤田鳴鶴の名で出した尾崎庸夫の『繁思談』も亦リットンの小説 "Kenelm Chillingly: his adventures and opinions" を譯したのであつた。

此の流行の潮合に乗り、藤田鳴鶴は『文明東漸史』を出し、矢野龍溪は『經國美談』を出し、始めて日本に於ける政治小説の序幕を開いた。明治文學の開山である坪内逍遙も、此の時代にシエークスピアの『シーザー』を譯して出した。

科學小説は、井上勉が譯した『月世界旅行』『海底旅行』と云つたやうなものが出た。其の外山山、井上巽軒の『新體詩抄』が明治十五年に出たのは、後の新體詩を興起させる種を蒔いたものであつた。それ等の現象を前半の時代に比較すると、大分、文學界が生氣附いて來たことを示して居た。

(九) 第二期時代の文藝

第二期(十八年前後から日清戦争前後迄)に入ると、明治文學は、始めて其の出發點を見出し得た時代となるのである。それは、坪内逍遙が、明治十八年四月に『小説神髓』を出して、馬琴以來行はれて來た勸懲主義を小説界から一掃して、寫實主義を唱へたのに始まるのである。當時歐化思想が日本の上下を風靡して、何事も舶來を尊重した時勢であつたところから、文學も亦歐化的風潮の中に巻き込まれ始めた。而して何等か新しい文學を要求しつゝあつた世間、何等か新工夫を出さうとしつゝあつた若い文學志望者の群は『小説神髓』を読んで、始めて小説の原理、意義及び創作の方針を知つた。それに續いて逍遙が『書生氣質』を出して、新しい小説の模型を示したので、若き人々は始めて文學上の自覺を喚び醒まされた。爾來、小説作家は何れも『小説神髓』と『書生氣質』の影響の下に、乃至は歐化的風尚の下に創作することになつた。其の第一に出たのは、長谷川二葉亭の『浮雲』であつた。この『浮雲』こそ、逍遙の小説に對する理論を略ぼ具體化した傑作であつた。それに讀いて文學雜誌『我樂多文庫』や、女學雜誌『以良都女』などが出た。『我樂多文庫』は、硯友社同人の機關で『以良都女』は山田美妙が主宰して居たのであつた。

此の期に入つて、小説界の新興氣運に乗り出したのは、硯友社の人々で、それに對立したのは、早稲田派、文學界一派、民友社の人々らであつた。個人としては幸田露伴、内田不知庵、齋藤綠雨、

長谷川二葉亭、森鷗外、森田思軒、山田美妙らが一方に雄視して居た。だが、小説界の一半は、殆ど硯友社同人の手に歸した觀があつた。硯友社の首領は、尾崎紅葉で、彼れは、最初、山田美妙と提携したのだが、途中で手を分つて、ひとり、同人の牛耳を執つた。其の同人中には、川上眉山、廣津柳浪、巖谷小波、江見水蔭、石橋思案らが居た。

○紅葉は、最初、山田美妙と對立し、後、幸田露伴と對立して、小説界の覇を争つた。紅葉の出世作は『新著百種』に出した『色懺悔』であつた。美妙は、紅葉に先立つて短篇集『夏木立』を出し、續いて『國民之友』に『胡蝶』を出した。露伴は、紅葉と前後して『都の花』に『露團々』を出した。此の三人が文壇の新人として、新しい小説界の饜鐘に促がされて現はれたのは、當時の鉅觀だつた。紅葉は、艶麗な著想と文致とを以て、美妙は嶄新な結構と文體とを以て、露伴は高邁な思想と熱氣ある文章とを以て、相對峙した。

ところが、美妙は、途中、落伍してしまつて、結局、紅葉對露伴の時代が來た。二人は、自然、競争の形となつたが、彼我共に西鶴の文致に共鳴して、新しい雅俗折衷の文體を始めたのは同じだつたが、思想、傾向は、全くちがつて居た。紅葉は其の小主觀から出た色慾の世界戀愛の世界を描くに力めたが、露伴は佛教思想から流れ出た意志の世界、狂熱の世界を描くに力めた。紅葉が『伽

羅枕『二人女房』などを出すと、露伴は『五重塔』『風流佛』などを出して、一步も譲らなかつた。紅葉、露伴以外に於ては、鷗外の『舞姫』逍遙の『細君』柳浪の『殘菊』眉山の『墨染櫻』室村の『むら竹』緑雨の『かくれんぼ』浪六の『三日月』樗牛の『瀧口入道』などが、有力な小説として知られた。翻譯では内田不知庵(今の魯庵)の『罪と罰』二葉亭の『あひどき』『めぐりあひ』鷗外の『埋木』『悪因縁』『地震』思軒の『探偵ユーベル』などが宜かつた。殊に『あひどき』は、ツルゲーネフの『獵人日記』の一節を巧みに譯したものととして『埋木』は、オシツブ・シユピンの作を親切に譯したものととして、當時文壇の若い、目ざめた人々に深甚な印象と感化とを與へたのであつた。他に澁柿園の歴史小説、涙香の探偵小説などが、一般的な讀物として、認められたが、文學的價値は少かつた。

文藝批評が旺んになり始めたのは、此の時代であつた。『早稻田文學』『國民之友』『柵草紙』『文學界』などが、前後して出て、何れも文學評論を掲げた。創作と評論とは相俟ち、相依つて、文壇の進歩を實現すべき二個の支柱である。大正の文壇では、評論が不振で、頗る權威のないものになつてしまつて居るけれども、當時は、寧ろ評論が旺んだつた。それは、文壇第一流の大家逍遙と鷗外の如き人が、評論壇に陣を張つた爲めでもあつた。此の二家が、漫理想論について、互ひに論戰を始め、其の學殖、見識を示したことは、當時の鉅觀であつた。逍遙はあく迄も、イギリス風で科學的

批評を尊び、鷗外はあく迄も、ドイツ風で哲學的批評を好んで其の對照に深い興味を惹いた。其の他、透谷、不知庵、忍月、緑雨などの人々も評論壇に新しい活氣を加へた。それから倂系としての現象には、史傳が二十七、八年頃に流行した事や、歐化思想極盛に對する反動の現はれとしての國漢文の新研究、東洋哲學の推究及び美學に關する新説の發表と云つたやうなことも行はれた。

斯うして居るうちに、日清戦争となつた。それは、當時にあつては、空前な大きな出來事で、國家の運命を賭すると云ふ上に人心が緊張した。而して國家思想が、それと共に濃度を加へて來た。愈よ日本が見事に支那に勝つと、國民的自尊心が頭を擡げて、世界に於ける日本の地位、東亞に於ける日本の使命と云つたやうなことが考へられて來た。また財界は好況を示して、人氣が引き立つた。其の影響は、自然、文學の上にも及んで、こゝに一轉機を劃すべき時が來た。第二期の文學的進歩は、大要、斯うした具合であつた。

(一〇) 第三期時代の文藝

第三期(日清戦争前後から日露戦争前後迄)に入ると、文壇の面目は、半ば以上、一新されて、若い人々が、續々出て來た。蓋し前期の文壇に行はれた小説を一貫して居た寫實主義は、皮相な狭小

なもので、其の題材も人生と没交渉なものが多かつた。大抵、作家の小主観や、嗜好を土壌として作りあげられた内容を持つたのが多かつた。斯うして、殆ど千篇一律に流れつゝあつたところから、評論家のうちには、それを非難する聲が高くなつて来た。勿論、撥擧小説の名を得た浪六物や、探偵小説は、左様した缺陷を埋めるために出たのだが、低級で藝術的色彩に缺けて居たので、云ふに足りなかつた。而して文藝評論家は當時、思想界に起りつゝあつた日本主義の運動、世界主義の提唱と云つたやうな實際的な思想問題を考慮のうちに入れると共に、當時の作家に向つて、より深刻な小説、哲學的背景を有する深遠味ある小説乃至國民的小説と言つたやうな物を要求して止まなかつた。斯うした要求に應じて、先づ現はれたのが、観念小説や、深刻小説であつた。

観念小説、深刻小説の先驅者は、廣津柳浪、泉鏡花、川上眉山などであつた。柳浪は明治二十八年に出世作『黒蜥蜴』を出して以來、流行兒の一人となつて『河内屋』『今戸心中』『畜生腹』『青大将』などを出して、殆ど紅葉を壓倒しようとする勢を示した。

泉鏡花は、紅葉の門人で、硯友社に於ける第二期の出身であるが、其の奇才は、早くも顯脱して、二十八年に『外科室』『夜行巡查』の二篇を出して、観念小説の模型を示した。彼れは、これに依つて、文壇に認められたので、愈々力を其の方に傾倒して『化銀杏』『海城發電』などを出したが、三十年に

公にした『照葉狂言』三十一年に書いた『辰巳巻談』などに至つて、其の長所を遺憾なく發揮して、流行兒の一人に數へられて来た。

川上眉山は、二十八年に『うらおもて』を出して、観念小説中の優秀作と認められた。彼れは、それに次いで『賤機』や『白藤』や『暗潮』などを書いた。斯うして、柳浪、鏡花、眉山の三人は、観念小説の先驅たる觀があつた。ところが、同じ硯友社同人でも、江見水蔭は、また別な軌道を歩いて居た。彼れは『炭焼の烟』や『女房殺し』などを書いて、清新な空想的な作品を見せた。だが、すべてに互つて好奇心を動かし易かつた彼れは、既に此の頃から、邪徑に陥らうとする傾向がほの見えて居た。

以上の諸家の他に文壇に出て、新人として活動したのは、樋口一葉、小栗風葉、小杉天外、後藤宙外、島村抱月、田山花袋などであつた。樋口一葉の作風は、極めて眞面目な態度の下に、人生を觀照して書いたところがあつた。在來の硯友社派らしいところもなければ、観念派らしいところもなかつた。其の代表作『たけくらべ』『十三夜』などは、人生の不如意な一面が、さながらに出て居た。小栗風葉の作風は、紅葉に似たところがあつて、一體に濃艶で、才氣が溢れて居た。其の出世作は、三十一年に出た『戀慕流し』で、其の作を通じて流れて居るロマンチックな情熱は、當時の若い人々を動かした。『十七八』『臺下地』なども、濃艶を極めて居た。小杉天外は、ソラに私淑して三十三年

に出世作『初姿』を出した。彼れが主唱したリアリズムは、一時、文壇を動かした。後藤宙外は、心理描寫を以て優れて居ると見られた。『思ひさめ』『ありのすさび』『闇のうつつ』などは、彼れの特色を示したもので、何れも、二十八、九年頃に出た。島村抱月は『めをと浪』『墨繪草紙』などを出して作家としても、確かな手腕を有することを認められた。田山花袋は當時、文壇の一隅に介在して、戀愛小説に於て一特長を有した作家として稍認められたに過ぎなかつた。

觀念小説が行詰ると、時代精神論や、社會小説、家庭小説の呼び聲が起つた。それは當時の社會に於ける強い現實的傾向と一脈相通じたものであつた。新進作家の群は此の呼び聲に應じて社會小説に筆を染めた。風葉の『政鷲』宙外の『腐肉團』などが、それだつた。また文壇の先輩だつた内田不知庵も、魯庵と號を改めて『片鶉』『新くづれ』『暮の二十八日』などを公にした。次ぎに家庭小説は、今日の通俗小説と同じ味の物で、藝術味の乏しいものであつたけれども、一時、流行を來たしたところから、徳富蘆花の『不如歸』菊池幽芳の『己が罪』中村春雨(吉藏)の『無花果』などが出た。それ等は、畢竟、時代の現實的傾向が求むるところに應じて出たのであるが、概して、皮相に流れて、生きた人生に觸れたところが見出されなかつた。時代は、もつと深く、鋭く現實の人生に觸れたものを要求して止まなかつた。けれども作家のうちに、それに適應し得るものは、一人も居なかつた。

以上のやうな形勢であつたから在來の有力な作家は、何れも行詰つた形で煩悶しつゝあつた。紅葉は、頻りに批評家から嘲罵されたのを憤つて、二十九年に『多情多恨』を公にした。其の文體、内容も、彼れの在來のものに比較して、遙かに優れて居た。平淡で周匝な文致、平凡な些末事にひとしい事件と云つたやうなところが、殆ど作爲のあとを除くようにして老巧に書かれてあつた。彼れは更に三十年に入つて『金色夜叉』の長篇に筆を著けたが、これは、當時の批評家の要求や、社會の傾向や、時代精神などを一つに融化させようとして失敗した作だつた。けれども彼れが努力は、慥かに尊重された。露伴は、紅葉よりも一層行詰つた形で『新浦島』や『二日物語』を書いたが、時代思潮と觸れないやうなものだつた。最後に『天うつ浪』で復活しようとしたが、未完の儘、筆を捨てた。斯うした間にあつて長谷川二葉亭は、ツルゲーネフの傑作『浮草』を出して、悔り難い、獨立的な翻譯の筆を見せた。坪内逍遙は、劇文學の方面に向つて、『桐一葉』『牧の方』『沓手鳥孤城落月』などの新史劇を發表して、脚本革新の先聲を爲した。鷗外は『即興詩人』の翻譯乃至『玉手匣兩浦島』の劇作などに於て、彼れの存在を明かにした。

斯うして、當時の文壇は、第二期に比較すると、餘程、進歩して、色彩が多様になつて來て居た。勃興の氣勢にあるものは、ひとり小説ばかりではなかつた。劇界に於ける新運動は、既に二十八年

頃から、有力な芽を吹きかけて居た。俳句革新、長詩革新、短歌革新の新運動も亦強い氣勢を示して来た。文藝批評も抱月、樗牛、嶺雲、桂月らによつて、非常に勃興した。思想界に於ては、日本主義や、世界主義の新提唱を聞くと共に、一面、現実的で、一面、ロマンチックな傾向が鮮かに流れて居たことも認めねばならなかつた。それ等の現象を分析し、湊合することは、極めてむづかし

だが、強ひて系統的に一つに纏めて見ると、社會に於ける強い現實的傾向に根ざした倫理研究、道德研究が行詰つて、懷疑的な風潮が旺んになると、個人主義、天才主義を背景としたロマンチズムの潮流が、時人の不満と苦悶とを除かうとして、第三期の後半即ち明治三十三年頃から横流し始めて日露戦争前まで續いた。在來の劃一的教育の下に行はれた凡才主義、國家主義の名の下に抑へ附けられた個性、それ等の弊害を一掃し去るために、天才主義、個人主義が力説された。其の唱歌者は、高山樗牛で、彼れの言説を有効に裏づけるべく、ニイチエ思想を鼓吹した。美的生活、本能満足説なども、樗牛が眞先に唱へたのであつた。

此のロマンチズムの時代は、やがて詩歌の時代であつた。短歌革新運動が先づ鐵幹、晶子、蕪園、柴舟、信綱らによつて行はれた。長詩の革新運動は、藤村、晩翠、泣菫、有明、羽衣らによつ

て行はれた。俳句革新運動は子規、鳴雪、虛子、碧梧桐らによつて行はれた。劇界革新運動の烽火は、逍遙、鷗外、月郊、春曙らによつてあげられ初めた。

ところが、樗牛の死と共に、それに代つて一時、網島梁川の『見神の實驗』などに於ける詩的宗教思想が勢力を得たが、間もなく、日露戦争が起つて、今までロマンチックな、美しい空想を喜んだのを一掃して、直ぐに現實の中に突入して、其の眞を掴み來らうとする自然主義運動が漸く行はれ初めようとしつゝあつた。斯うした有様が、第三期に於ける文學的進歩の行程であつた。

(一一) 第四期時代の文藝

第四期(日露戦争前後から大正末年迄)は、明治文學史に於ても、最も重要視すべき文學革新の時代である。即ち自然主義の文學が、在來の文學に取つて代つた時代である。高山樗牛の言説其の他によつてロマンチズムの時代、スツルム・ウンダード・ドラングの時代が現出した後に自然主義が起つた行程は、歐洲に於ても、フランスの文學が、ユーゴーのロマンチズムから、進んで、ゴックール兄弟、フローベルらの自然主義に赴いたのと同じ趣が見える。

日露戦争は、一面、國民の自尊心を高調したけれども、他面、悲痛な現實の姿をまさしくと國民

の前にさらけ出した。徳富蘆花が唱説した『勝利の悲哀』と云ふことが、内面的な考へを或る一部の知識階級の人々に起させた。さうした眼で、此の現實を凝視すると、いろいろの不滿や、不平が湧いてくる。其の不滿不平を取り除いて、充實した新しい生活に入るには、在來行はれて居た虚偽の道徳、形式に囚はれた風習を一掃して、赤裸々な眞實に面する必要が起つてくる。これは、ひとり、當時の社會や、生活や、思想の上感ぜられたばかりでなく、文學上に於ても、同様に感ぜられた。そこに自然主義が勃興すべき可能性があつた。

だが、他にも、自然主義が発生せねばならぬところのいろいろの原因があつた。それは拙著『明治大正五十二年史論』のうちに於て説述した通り、思想的方面では(一)科學尊重の精神が擴充された爲め(二)プラグマチズムや、ヒューマニズムの影響を受けた爲め(三)在來、行はれた詩的宗教思想や、唯心的哲學や、形式道徳に満足しないで、直ぐに個人的自覺の徹底境に入つて、人生の眞を把握せんがためであつた。更に文學的方面では(一)歐洲大陸文學の影響を受けた爲め(二)在來の遊戯的、空想的の弊に囚はれたり、小主觀に偏したり、作爲のあとが著しかつたりした文學を破却して、眞面目に赤裸々の人生と現實とを虚飾なく表現しようとした爲めであつた。

以上のことについて註脚を加ふれば、思想的方面では、十九世紀から二十世紀にかけて、科學が

最も尊重された結果、精密な窮理的方法から出發した機械的、唯物的な人生觀が強い勢力を持つて來た』それで人生現象を研究するにも、一定の方式を以て、科學的に見ようとする風が旺んになつて、善よりも、美よりも、第一に眞を把握せねばならぬと云ふ歸結に到達した。自然主義の根柢は主としてこゝにあつた。それに一脈の生氣を加へたのは、イギリス、アメリカなどで起つたヒューマニズム、プラグマチズムであつた。此の學派は、實際生活や、現實生活を何よりも尊重せねばならぬことを力説して、根本から、現實生活に突き入らねばならぬ精神を高調したのである。

文學的方面について云へば、明治の文壇はいつも、歐洲文學の輸入によつて、新しい刺戟を得て居たのであるが、日露戦争前後の時代に、フランスのゾラ、バルザック、フローベル、モーパッサン、ゴンクール兄弟を始め、ドイツのゾーデルマン、ハウプトマンなどの作品が、旺んに紹介されたことが、日本の少壯な文學者の一部を刺戟して、自然主義思潮に感染させたのである。明治文壇に於ける自然主義の主唱者とも云ふべき田山花袋は、夙に歐洲文學を熱讀して、新しい文學的風潮に接觸して居たところから、明治三十五年頃『アカツキ叢書』へ『重右衛門の最後』を書く前に文學、雑誌『新聲』へ、歐洲に於ける自然主義の文學を紹介すると共に、露骨な描寫の必要をも説いたのであつた。

けれども當時は、未だ花袋の説に耳を假さうとしなかつた。自然主義が眞に勢力を得るやうになつたのは、日露戦後のことで、三十九年頃だつた。最初は、單に文學上に於ける新運動に過ぎなかつたけれども、其の舊套打破、個性發揮の精神は、思想界、教育界などにも、大きい波動を及ぼした。窮屈な範疇に倣つた教育や、超越的に窮屈になつた哲學や、舊生命の殘骸に過ぎない宗教などを破却して、もつと、新時代に適應した自由な、自然な生氣あるものとしようとした。それは、自然主義の長所であつたが、一面に於て、其の無理想、無解決を標榜した機械的的人生觀が、自棄的、虛無的な思想を誘致しようとしたのは、一つの弊害であつた。

自然主義を基調とした文學が文壇を占領し始めたのは、明治三十九年頃から四十年にかけてであつた。三十八年には、先づ自然主義の先聲を爲した國木田獨歩の『獨歩集』が出た。其の翌年には、藤村の『破戒』が出た。續いて、花袋の『蒲團』白鳥の『紅塵』青果の『青果集』などが出た。次いで四十年には、文壇の一大廻轉が行はれた。自然主義是非の論が、到所に起つた。島村抱月、長谷川天溪、岩野泡鳴などは、自然主義に味方した。後藤宙外らは、非自然主義を主張して、自然主義の上に烈しい論難を加へた。けれども時代精神の歸嚮するところは、自然主義の勝利に歸して、二十年來、文壇を固持して居た硯友社派は、大抵、文壇の外廓へ押し出されて、新しい作家が、續々、頭角を

擡げ出して來た。

此の文壇の廻轉期に於て、最も目ざましく働いた人々には、藤村、花袋、白鳥、青果を始め、風葉、秋聲などが居た。風葉は『青春』『戀さめ』に於て、秋聲は『出産』などに於て、自然主義運動に力を添へた。次ぎに評論に於ては、抱月の『囚はれたる文藝』天溪の『幻滅時代の藝術』泡鳴の『神祕的半滅主義』などが、自然主義を高調した。殊に抱月は、其の後も、續々、此の方面に於ける有力な論文を發表して、自然主義確立のために健闘した。斯うして、自然主義は、文壇を風靡して、一期を劃するに至つた。

長詩(新體詩)の如きも、矢張、自然主義の影響の下に起つた。相馬御風、三木露風らは、現實に即した詩を作つた。國語詩の提唱なども、矢張、自然主義運動と一脈、相通じた點があつた。北原白秋らが、都會情調を歌ふやうになつたのも、上田敏が民謡詩のことを唱へ出したのも、矢張、歸するところは、自然主義的風潮に共鳴した爲めだつた。短歌、俳句なども、勿論、長詩と同じやうな影響を蒙らざるを得なかつた。

斯うして、自然主義の勢は、愈々旺んになつて、第四期の後半期には、藤村の『春』と『家』花袋の『田舎教師』や『生』『妻』『縁』などの三部作、獨歩の『濤聲』第二獨歩集『秋聲』の『微』『足痕』泡鳴の『耽

福『虚子の『俳諧師』二葉亭の『平凡』などが出た。それと同時に、自然主義の脈を繼承した新しい作家が續々出て、文壇は、激濁たる生氣に満たされた。

當時、自然主義運動と全く離れて、別な道を歩いて居た人々に夏目漱石、森鷗外、高濱虚子、永井荷風などが居た。漱石は『吾輩は猫である』の一作によつて、大名を文壇に馳せて以來、『虞美人草』『三四郎』『門』などを出して、低徊派の首領となつた。虚子は『俳諧師』を書いて、作家としての力量の優れたことを示した。鷗外は『ボタ・セクスアリス』『あそび』『青年』などで、其の老練な技巧を見せた。荷風は都會人の、享樂的傾向を示した作品『あめりか物語』『歡樂』『冷笑』などを出した。

評論では、此の後半期に相馬御風、片上伸などが、抱月の麾下にあつて健闘した。生田長江も亦氣の利いた批評を書いた。だが、抱月が此の時代に於ける覇者であり、リーダーであつた。詩歌の方面は、一體に稍沈靜して、蒲原有明、三木露風、北原白秋、石川啄木、吉井勇、前田夕暮、若山牧水、金子薫園、土岐哀果などが、最も活動して、詩壇を賑はした。

(二) 劇界の新運動

小説界に於ける自然主義運動の花々しかつたに對して、少しも譲るところがなかつたのは、此の

期に於ける劇界革新運動であつた。其の先驅となつたのは、坪内逍遙が實際上の指導者をした文藝協會であつた。當時、逍遙は、三十七年に『新樂劇論』や『新曲浦島』を發表して、劇壇の注目を惹いたが、更に三十八年は『新曲赫哉姫』を出し、續いて、三十九年に文藝協會の發會式を舉行した。其の主なる演技は雅劇『妹背山』史劇『孤城落月』などであつた。同じ年の十一月には、歌舞伎座で、第一回公演を催して『桐一葉』や『エニスの商人』などを上演した。此の風潮に刺戟されて『東京毎日』の文士劇が第一回公演を開いた。

それ等と併行して、新しい脚本も續々出て來た。中村吉藏の『牧師の家』佐野天聲の『意志』『大農』山崎紫紅の『七つ桔梗』青果の『第一人者』などが其の主要なものであつた。それらの人々に續いて、新しい劇作家の群も、頭角を擡げ出した。秋田雨雀、長田秀雄、木下杢太郎、楠山正雄、吉井勇などは、何れも清新な内容と技巧とを示した。

それと前後して、文藝協會の新運動は、著々、成功して、イブセンの『人形の家』や、ズーデルマンの『故郷』などを上演すると共に、東儀鐵笛、松井須磨子、土肥春曙などの新しい優人を育てあげた。文藝協會に對して稍別な方向を執つて、新劇革新を企てたのは、市川左團次、小山内薫の自由劇場であつた。其の第一回公演には、イブセンの『ボルクマン』を演じ、第二回には、エデキンドの

『出發前半時間』鷗外の『生田川』チエホフの『犬』などを演じて、若い人々に強い共鳴を起させた。其の他、新時代劇協會、新社會劇團、土曜劇場、東京俳優學校の試演などが、新劇發達に身方して、相當の効果を収めた。さうした新運動に刺戟された尾上菊五郎、中村吉右衛門らは、近松劇の新演出などを試み、川上貞奴や、帝國劇場の當事者などは、女優の養成に力を入れて來た。

以上は、第四期に於ける文學的進歩の概要である。小説も、長詩も、脚本も、劇壇も、評論壇も、多事を極めて、其の現象が極めて複雑である。明治文學史上に於て、これほど緊張した時代は前後にないと言つて宜い程だ。すべてが眞劍になり、眞面目になり、内部生命の充實を尊重して來たことが、際立つて見えて來たのである。

(一三) 第五期の文藝

第五期(大正末年前後から大正十年迄)は、第四期に比較すると、稍緊張を缺いた趣がある。けれども文學的進歩の上に於て、相當に重視しなければならぬ新しい現象をも生んだ。此の期には、自然主義が行けるところ迄行つてしまつて、文學も、社會もある程度迄、自然主義の洗禮を受け終ると、いろ／＼の餘弊が、醸されて來て、自らいろ／＼の分派が出来るやうになつた。殊に思想界に

於ては、早くも、ネオ・アイデアリズムが、明治末年から根ざし始めて、此の期に入つて、一時流行した。

蓋し自然主義が齎らした舊套打破や、自我擴充や、幻滅的、無解決的、物質的な思想は、行きつくすところまで行きつくすと、暗さ、淋しさに堪られない感じを興へた。あるものは、自己の力をみをもとうとしたが、それ丈では、たよりないと云ふ感じを興へた。あるものは、強ひて一種の宿命觀に落著かうとしたが、それも、矢張、暗いものに過ぎなかつた。あるものは、虚無思想に安住しようとしたが、矢張、長い間、堪へられなかつた。一部の文學者や、知識階級は、それでも尙ほ自然主義脈を固持して、懷疑的な、虚無的な態度を渝けて行かうとしたが、大多數の人々は、それに満足し切れなくて、明るい希望のある方へ、何等かの新解決乃至新理想のある方へ出てゆかうとした。換言すれば、無理想に對する有理想、無解決に對する有解決、物質的的人生觀に對する精神的的人生觀、幻滅的な考へに對する非幻滅的な考へを要求するやうになつた。此の要求に應じたのが、ネオ・アイデアリズムである。

ネオ・アイデアリズムの意義、内容は、在來のやうに超越的な、空漠な理想主義を指すのではなかつた。それは、一度、自然主義の洗禮を受けて、更にそれを超越した新理想主義であることを意味

した。そこに新しい生命があり、積極的な力があつた。少くとも、ネオアイデアリズムの主張者は、斯く信じた。此の思想の源流となつたのは、ドイツのオイケン、フランスのベルグソンであつた。オイケンの思想は、比較的に理解され易かつた。其の哲學は、外面的、物質的、皮相的に人を導く方向へ傾き過ぎて居た自然主義の弊を一掃して、内的生命、内的統一の必要を力説した。即ち外への自我發展よりは、内への自我發展のより有用なことを肯定して、そこから精神生活の新しい世界を作り出さうとして、小我を排して眞我につき、本能生活を排して、道德生活に進み、廣い、明るい、自由な精神界へ出てゆかうとした。而してこれによつて新しい内的生活を創造し、建設して日に／＼新しく、日に／＼充實して働けと教へた。

ベルグソンの思想は、オイケンに比較すると、稍理解し難かつた。彼等は『創造的進化』のうちに於て、物心兩界の現象は、一定の時と形とに捕へられて、唯單純に働き、移りゆくやうに見えるけれども、深く推考すると、そこに絶へざる進化の流れがあつて、どれも、これも、一時一刻でも、同じ形、同じ有様のうちに流轉しないで、過去の形や、有様を存すると共に、絶えず、新しい形や、有様を創造して進歩しつゝある。そこから、新しい動的な生命が湧いて出ると説いた。

斯うして、オイケンとベルグソンの思想は説き方及び内容を異にするけれども、新人生の創造、

新生命の開展を高調する上に於ては、同じ傾向を示して、懷疑と沈悶とに悩む自然主義の弊を一掃する上に強い力となつた、暗さと淋しさと包まれて居た人々に、希望と活動との光りを與へた。

斯うして、ネオアイデアリズムが、思想界を風靡すると共に、大正の文學も亦其の影響を受けて、在來の自愛に對する博愛、他愛を標榜するところの人道主義や、唯美主義乃至、享樂を主とする都會情調を帯びた傾向や、在來の無技巧に對する新技巧を唱ふる一派や、社會主義的作品を提供する群や、書齋に籠つて懷疑に沈んで居るよりも巷へ出て、社會改造、政治改造をやらうとする一派が起つて來た。もう彼等は、自然主義の繫縛から離れて、各自、自由な道を歩かうとしたのである。

以上のやうな、いろいろの流派が出来たが、此の期の前半を支配したのは、人道主義、享樂主義、唯美主義の作品であつた。人道主義は『白樺』一派の人々が主張して、其の主要な役目を働いたのは、武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎などであつた。享樂主義の作品を提供したのは、永井荷風、吉井勇、長田幹彦、近松秋江などで、彼等は、新しい花柳文學を書いて、一時文壇を明るくした。唯美主義の作品に於て、成功したのは、谷崎潤一郎、北原白秋などで、殊に潤一郎が書いた初期の小説中には、嘆美的傾向が『刺青』などに於て、最も鮮かに示されて居た。

後半期に入ると、文壇の潮流は、目まぐるしく動いて、殆ど混戦状態に陥つた。勿論、人道主義、

唯美主義の傾向を帯びた作品も綴りて出たが、それと共に『人間』一派の新技巧説、批評家、作家の一部が主張したネオ・ロマンチズム乃至社會主義的色彩を背景としたものなども、それ／＼文壇に迎へられた。けれども第四期の全般が、自然主義下に支配されたのとは、ちがつて、流派が、いろいろに分かれ、底止するところがないと云つたやうな有様になつて來た。強ひて後半期の文壇を一貫する主流を探るならば、矢張社會的民衆的色彩若くは社會主義的な傾向が、餘程、深く出て來たと云つて宜いかも知れない。島田清次郎、加藤一夫、小川未明、江口渙らの一派は、社會主義的な作品を提供する上に於て、文壇に新しい色彩を加へた。だが、此の兩三年來、文壇の一部に残存し若くは寄生して自然主義の餘脈を追ふ末流の徒や、駄洒落、輕口に似た風の冗漫な小説を書く手合などが文壇の潮流を濁らせて、似非寫實主義の非難を喚起したのは、やがて大正十年前後に於ける文壇の停滞とそれを打破るべき何等かの新しい流れを必要とすることを示すやうに思はれる。

(一四) 文壇と社會の接觸

此の期に於ける文壇の人々が、社會改造の上に何等かの貢獻をしようとしたことは、在來に見ない現象であつた。日本に於ける社會改造の機運は、大正六年の頃から、正に成熟し始めて居た。其

の改造の聲に逸早く、目ざめたのは、社會的色彩を有した一部の文人であつた。拙著『明治大正五十二年史論』の附録『大正時代の文化』のうちで、私は、それに言及して『彼等は敏感で、反撥し易い神經と感情とを持つてゐる。其の心と眼とが、政治及び社會に向けられると、其處にいろいろの缺陷を見出した。それで、大隈内閣の時代に、文士の中から、三、四人が立候補を宣して、選挙場裡へ打つて出た。それは、大抵失敗に歸して、一部の嘲笑を買つたけれども、其の政治革新の意氣と熱誠とを有して居たことは、決して嘲笑すべきものではなかつた。彼等にも、種々平生からの用意が足りない缺點があつとしても、書齋から街頭へ出ようとした意氣は、多としなければならなかつた。』と述べた。此の文學者の政治運動と共に、評論壇は、在來のやうな文藝のみの言議に没頭しないで、政治問題、社會問題にも筆を著けて、其の改造的意見が、田中王堂、内田魯庵、大杉榮、生田長江らの人々によつて發表された。

少し、順序が前後するが、大正年間に於ける後半期の思想界を一瞥すると、今迄ネオ・アイディアリズムに固著して居た思想界は、デモクラシーの思想乃至社會主義的思想に感染し始めた。文壇でも人道主義、唯美主義の思想に取つて代らうとしたのは、社會主義的思想やデモクラシーの思想であつた。大正時代の後半は、その研究と論議とによつて、思想界を賑はした形であつた。最近、そ

れらに對して、新國民主義乃至文化主義が唱へられて、一は國家的に、一は内在的に思想界に改造の新生命を吹き込もうとしつゝある。畢竟、人道主義や、民本主義や、唯美主義の思想だけでは、社會を改造するわけに行かないところから、文化主義や、社會主義や、新國民主義の思想が、入り亂れて、先づ思想的、社會的に改造の實をあげようとするに至つた。

社會主義思潮は、堺利彦、賀川豊彦其他いろいろの新人が、それを宣傳しつゝある。文化主義思潮は、金子筑水らが、早稲田派の人々と共に宣傳しつゝある。新國家主義思潮は、岩野泡鳴が前にそれを唱へ、今は吉江孤雁らが主張しつゝある。社會主義一派の思想は概して外形的、物質的改造を主眼とし、文化主義一派の思想は、内部的、精神的改造を主眼とし、新國家主義一派の思想は國家を中心として、それに新しい解釋を下して、新しい生命を吹き込むことを主眼としつゝあるやうに思はれる。此の三つの流れが、どう云ふ風に融化するか、或は反撥し合ふか、それは、今後の形勢に徴するよりほかはない。

(一五) 第五期時代に於ける劇壇と詩壇

此の期に於ける劇壇及び詩壇の收穫は、どうであつたか。劇壇は、勿論、一進一退があつたけれ

ども、新劇開拓の歩みを續けて、相當の進歩を實現した。それは前半期に新しい劇團が續々、生れたのでもわかる。近代劇協會、公衆劇團、舞臺協會、藝術座、狂言座、黒猫座(文藝座の前身)無名會、新時代劇協會、吾聲會などは、各自、新劇開拓の上に盡した。

其のうちで、前半期に最も活動したのは、藝術座と無名會とであつた。藝術座は、抱月の指導の下に松井須磨子一派が、新劇趣味を普及する上に大きい功績を残した。無名會は、逍遙の指導の下に、東儀鐵笛一派が、新しい脚本と共に新しい藝風を創始して、どこ迄も紳士的な氣品を見せた。尾上菊五郎、守田勘彌、市川猿之助らは、それに刺戟されて、新劇方面に努力し始めたが、其の熱心は、寧ろ後半期に入つて現はれて來た。勘彌の文藝座、猿之助の春秋座などが、それである。東儀鐵笛が、伊井一座を脱して、新文藝協會を組織して、逍遙の『法難』を上演したことも、鐵笛が終始一貫して渝らない努力を思はせた。要するに、一時、新劇は、沈滞しかけたが、此の一兩年來頓に生氣を吹き返して來たのである。作家側も、劇作家協會を創設すると共に、中村吉蔵、山本有三、長田秀雄、秋田雨雀、菊池寛らの新しい活動を見るに至つた。

詩壇は、散文的な時代のために萎靡してしまつて居るけれども、最近、稍生氣を帯びて來た。其の前半期は、北原白秋、三木露風の時代であつた。後半期は、民衆詩の時代に入つて、ホイットマ

ンやトラウベルの詩などが歓迎されて、詩が民衆化して来た。歌壇も亦同様に民衆化した。矢張り長詩や、短歌は、純な藝術味を中心とする上から、其の民衆化は、長詩や、短歌を墮落させたやうな傾きが一部に見えないではなかつた。此の期の民衆詩人としては、福田正夫、室生犀星、千家元麿などが、認められて来た。だが、詩壇の流派も、いろ／＼にわかれて、西條八十、日夏耿之助などが出て、其の主流と云ふやうなものがなくなつて、各自、自由に其の個性に従つて、新しい藝術味を創造してゆく傾きになつたやうに思はれる。

以上は、第五期に於ける文藝的進歩の大要である。此の期に於ける現象も、第四期と同様、可なり複雑で、而も變化が著しく多くなつて来たので、簡約に全内容を包括し得ないところがある。單に文壇に於ける有力な個人の上にも、いろ／＼の變動があつて、一々、述べつくされない。細説は、すべて本書の下巻に於ける第五期のうちに於てしたい。

(一六) 結論

明治、大正の文學は、五期に分つて、大體の印象を説いたが、其の進歩が、他の事業に比して一番、目ざましいと云ふとは、誰の眼にもわかるであらう。全體として、歐洲文學や哲學の影響が、

どの期にも見出されると云ふことが、際立つた特色である。それがため大正の日本は、未だ眞にわが國独自の文學を創造するところ迄至つて居ないけれども、其の要素は、既に醗酵しつゝあるから、遠からず、日本独自の文學を生産する時代が来るであらう。

第壹期 舊套撲守時代

第壹章 英米功利思想の流入と啓蒙運動

(一) 大變革の時代

明治維新の夜は略ぼ明けはなれて、日の出前が近附いたが、文學の日の出前は未だ來ないと云ふのが、第一期に於ける前半(明治元年から十年迄)の光景であつた。維新革命によつて、舊制度舊文物の大半が、破壊されて、新文物、新制度を打建てなければならぬ時代には、先づ政治、經濟其他、實生活に必要な新知識の需要が切に感ぜられる。一口に云へば、日本を富強ならしむるため、文明開化の新時代を造る必要に迫られた。

明治の新政府は、今まで行惱んで居た對外關係を解決して、全然開港主義を執ると共に、有名な五事の詔勅を奉戴して、政治的、法制的、物質的の大改革を始めた。勿論廢藩知縣が斷行される迄は、新政府も、安心して、新しい仕事が出来なかつたが、それが斷行された後は、どしどし改革の歩を進めた。それは、實に急激なものだつた。

新政府の要路に起つた人々は、先づ政府を維持してゆく基礎とも云ふべき財政上の紊亂を整理し

て、大きい改革を加へた。次ぎに軍事上の革新を企てた、徴兵制度を確立すると共に、海軍條例を制定した。教育上に於ては、小學校の創設や、義務教育の方針を定めた。法制上に於ては、改定律令を公布して、新しい民法、刑法、商法などを作つた。

改革と創設とは、尙ほ續々出て來た。新政府は、在來の階級制度を打破つて、四民平等を宣すると共に、穢多非人の稱號を撤廢して、普通の平民に伍せしめた。また平民と華族及び士民と外人との結婚を許可した、百姓町人にも、苗字を呼ぶことを許した、人民の土地賣買を許して、其の所有權を認めた。斷髮令と前後して、士族の脱刀隨意をも布告した。

更に物質文化を象徴した電信の基礎が確立した、京濱間に鐵道を布設して、汽車が其の間を走り始めた。比較的精密で便利な太陽曆が採用された。新聞雜誌が次第に發行される、留學生が歐米へ出かける、元老院や大審院が設けられると云つた風で、改革と創設とが、どの方面にも併行して續いた。

以上の改革、創設は、大抵、歐米文化のうちに、其の範を求めたのであつた。陸軍は、フランス式で、海軍は、イギリス式であつたやうに、教育は、アメリカ式を學んだ。文藝が、歐米の感化を絶えず、受けたやうに、政治、經濟、教育、學術も、矢張、歐米の感化を受けざるを得なかつた。

而していろいろの改革のうちで、特に重要視せねばならなかつたのは、四民平等を布告した事と徴兵制度を確立した事であつた。士族の特權は、それがために大半を失つて、平民階級の權利が一層、伸暢されるやうになつた。軍隊が士族のみによつて組織された時代は、これと共に過去の夢となり始めた、百姓でも、町人でも軍隊の一員として、護國の任務に當るべき新しい時代が來た。此の新しい時代に適應してゆくために、どの人々も忙はしかつた。文明開化と富國強兵と云ふことの前には、誰も彼れも夢中だつた。さうした中に、士族階級の大半が、改革の氣勢に反抗しようとする景色も見えて、新舊思想の衝突が、到るところに行はれて居た。だが、保守主義による舊勢力は、時代の潮に逆行するものであるから、彼等の大半は、西南戦争と前後して亡びてしまふか、屏息してしまつた。進歩主義による新勢力は、急潮のやうな勢で全國に漲つた。文明開化の聲は、到るところに響き渡つた。富國強兵の叫びは、至るところに聞えた。

斯うした多忙な變革時代に當つて、文藝が閑却されたのは、止むを得ないことであつた。實利思想の前には、文學も、美術も、何等の價值を認められなかつた。政府は、新道德や、新倫理や、新藝術を得るよりは、主として、實利を眼目とする學問を要求した。物質上に於ける文明の利器のみを要求した。一般の民衆も亦それに共鳴して、電信や、汽車や、汽船や、石版刷の洋畫や、ブリキ

製、ガラス製の日用品を嘆稱すると云つた風だつた。洋服と帽子と牛肉とは、當時の新人が、最も誇りとしたものであつた。今日から考へると、不可解のやうであるけれども、新しい文化を象徴したいろ／＼の器具や、服装が、好奇と珍重との念を以て、歓迎されたのは進歩的な異國情調を愛して來た日本國民としては、當然のことであつた。彼等は、争うて、外來の新刺戟に適應したのみならず、それをわが物として、消化しようと思つたのだ。

(二) 英米功利思想の流入

當時、性急に文明開化を實現しようとするところの時代精神の要求に應じて、澎湃とした大波のやうに入り來つたのは、實利を主眼としたイギリス思想、アメリカ思想である。蓋し江戸幕府時代に於ける歐洲文化は、主としてオランダ人の手によつて、日本に傳へられたけれども、幕末時代に入つて、アメリカの水師提督ペリが、日本へ來てから、アメリカの文化が、自然、わが國に流入した。それと共に、東西兩洋を通じて、一番廣大な版圖を擁して、世界第一の海上王と稱せられて居たイギリスの國語が、最も廣く用ゐられて居た關係からと、伊藤、井上らの維新元勳の人々が、イギリスへ早く留學した關係からとによつて、イギリスの文化が、アメリカ文化と前後して、わが

國に流入した。而してオランダの勢力は、全く一掃されてしまつて、アメリカとイギリスとが、文化的に日本に深く影響すると云つたやうな有様になつて來た。

それに明治初期の日本が、眞先に求めて居たのは、實利的文化で、アメリカ、イギリスから流入したのも亦それに適應するところの實利思想、實利的文化であつたところから、双方、びたりと一致した趣があつたのだ。斯うした時代の潮勢に乗つて、アメリカ文化、イギリス文化を鼓吹したのは、慶應義塾の創設者である福澤諭吉及び同人社を立てた中村敬宇の二人であつた。

福澤諭吉は、天保五年十二月十二日、豊前中津奥平藩に生れた。彼れの父百助は士族中の下級に居たが、人物、學問は、相當に優れて居た。『福澤自傳』のうちに「其書道したものなどを見れば、眞實正銘の漢儒で、殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心、屋漏に愧ぢずといふこと許り心掛たものと思はれるから、其遺風は自から私の家には存して居なければならぬ。」とあるのを見ても、略ぼ其の人物がわかる。福澤は、安政元年二月、二十一歳の時に、オランダの書物を讀まなければ、西洋の文物が一向わからぬと痛感して、大阪に出て、緒方洪庵の塾に入つて、オランダ語を學習した。其の後、安政五年、二十五歳の時、江戸へ出て、苦心して、イギリス語を學んだ。斯うした素養を積んで、翌年、幕府の使節に隨つて、アメリカに行き、後、歐洲を巡遊して歸朝したが、慶應三年、またアメリカへ赴いて、歸つてから、慶應義塾を立てた。

福澤諭吉は、明治時代に於ける豫言者であり、改革者であり、平民的學者であり、平民的文人である。

あり、また獨立自尊の精神を體現した大平民であつた。彼れは、新しい日本が、どう云ふ方針を執つて進むべきかを豫言すると共に、どう改革すべきかを教へた。それがために、彼れは等身の著述を世に出した、彼れは慶應義塾に於ける多くの學徒を育てあげた。教育と著書との二面を通じて、彼れは、イギリス、アメリカの新文明を鼓吹した。また峻烈な言語、文章を以て、舊道徳、舊風俗、舊習慣を破壊するに力めた。

(三) 福澤諭吉の文明觀

福澤の目的、主眼は、日本が、歐米と同じ水平線に起つを得べき文化を具へさせようとする上にあつた。即ち彼れが、其の著書のうちに於て、屢々、繰返したところの『文明』の根基を日本に植ゑ附けようとするを第一の任務だと感じた。其の『文明』は、當時の政府が、考へて居たやうな武力的乃至機構的のものばかりではなかつた。その上へ更に『文明』そのものを生み出す基調であるところの精神的文化を加へたものを意味して居た。彼れは、有形の文明を愛しないではなかつたが、より多く無形の文明を愛した、物質文化よりも、精神文化を重く見た。

福澤を解しないものは、彼れは唯物的人物と速断して、物質文化を高調したやうに思ふけれども

彼れの本心は、主として、精神文化を高調しようとする上にあつた。彼れは『文明論の概略』のうちに於て「近來我國に行はるゝ西洋流の衣食住を以て、文明の徴候と爲す可きや、斷髮の男子に逢て、これを文明の人と云ふ可きや。肉を喰ふ者を見て、之を開化の人と稱す可きや。決して然る可らず。或は日本の都府にて、石室鐵橋を模製し、或は支那人が俄に兵制を改革せんとして、西洋の風に倣ひ、巨艦を造り、大砲を買ひ、國內の始末を顧みずして、漫に財用を費すが如きは、余輩の常に悦ばざる所なり。是等の事物は、人力を以て作る可し、錢を投じて買ふべし。有形中の最も著しきものにて、易中の最も易きものなれば、之を取るの際に當ては、固より前後緩急の思慮なくして可ならんや。必ず自國の強弱貧富に問はざる可らず。即ち或人所云の人心風俗を察するとは、此事なる可し。この一段に就ては、余輩固より異論なしと雖ども、或人は唯文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨て、問はざるものゝ如し。蓋し精神とは何ぞや、人民の氣風即是なり。」と云つて、先づ精神文化に力點を附すべきを主張して居る。而して更に一步を進めて「此氣風は賣る可きものに非ず、買ふ可きものに非ず。又人力を以て、遽に造る可きものに非ず。治ねく一國人民の間に浸潤して、廣く全國の事跡に顯はるゝと雖ども、目以て其形を見る可きものに非ざれば、其存する所を知る可きこと甚だ難し(中略)文明の精神とは、或はこれを一國の人心風俗と云ふも可なり。これに由て

考れば、或人の説に西洋の文明を取らんとするも、先づ自國の人心風俗を察せざる可らずと云ひしは、其字句足らずして、分明ならざるに似たれども、よく其意味を碎て、これを解くときは、即ち文明の外形のみを取る可らず。必ず先づ文明の精神を備へて、其外形に適す可きものなる可らずとの意見を述べたるものなり。今余輩が歐羅巴の文明を目的とするに云ふも、此文明の精神を備へんがために、これを彼に求めるの趣意なれば、正しく其意見に符合するなり。唯或人は文明を求めるに當て、其形を先にし、忽ち妨碍に逢て、其妨碍を遁るゝの路を知らず、余輩は、其精神を先にして、豫め妨碍を除き、外形の文明をして入るに易からしめんとするの相違あるのみ。」と云つて居るのを見て、福澤の意のあるところがわかる。此の精神文化と云ふことは、彼れが『學問のすゝめ』に於ても亦力説した點であつた。

彼れが、尊重したところの精神文化は、智徳そのものであつた。勿論、其の唱説して居る智徳は在來のやうなものではなくて、そこにイギリス流の新解釋が施されてあつた。彼れは、それに就て『文明論之概略』に於て「徳とは、徳義と云ふことにて、西洋の語にて「モラル」と云ふ。「モラル」は心の行惠と云ふことなり。一人の心の内に懐くして、屋漏に愧ざるものなり。智とは智慧と云ふことにて、西洋の語にて「インテレクト」と云ふ、事物を考へ、事物を解し、事物を合點する働なり。

又此徳義にも、智恵にも、各二様の別ありて、第一貞實、潔白、謙遜、律義等の如き一心の内に屬するを私徳と云ひ、第二廉恥、公平、正中、勇強等の如き外物に接して、人間の交際上に見はるゝ所の働を、公德と名く。又第三に物の理を究めて、之に應ずるの働を利智と名け、第四に人事の輕重大小を分別し、輕小を後にして、重大を先にし、其時節と場所とを察するの働を公智と云ふ。」と説いて居る。公德と私徳、公智と私智とを區別したのは、當時に於て、新しい、進んだ考へだつた。而して彼れは、近代主義の傾向を追うて、特に公智を第一に尊重した。知識的と云ふことは近代主義の一大要素である。

それで、彼れは、公智を尊重する理由に就て「徳義は一人の行ひにて、其功能の及ぶ所は、先づ一家内に在り(中略)智恵は則ち然らず。一度び物理を發明して、これを人に告ぐれば、忽ち一國の人心を動かし、或は其發明の大なるに至ては、一人の力よく全世界の面を一變することあり。「ゼー・ムスワット」蒸汽機關を工夫して、世界中の工業これがために其趣を一變し、「アダム・スミス」經濟の定則を發明して、世界中の商賣これがために面目を改めり、其これを人に傳るや、或は言を以てし、或は書を以てす可し。一度び其言を聞き、其書を見て、之を實に施す人あれば、其人は正しく「ワット」スミスを生ず可し。其傳習の速にして、其行はるゝ所の領分の廣きは、彼の一人の徳義

を以て、家族、朋友に忠告するの類に非ず。」と云つて居る。勿論、彼れは「私徳は地金の如く、聰明の智慧は細工の如し。」と云つて居る通り、徳義を輕視したのではなくて、日本の文明を速進する上から、一層、智慧を重んじたのである。そこに知識的な近代主義者としての彼れの面目が出て居た。だか、彼れの求めたところの智慧は、實用的な智慧であつて、哲學的な智慧ではなかつた。應用的な科學であつて、超應用的な科學ではなかつた。約言すれば、何處迄も、功利的色彩を帯びて居た。主として、イギリス思想、アメリカ思想の感化を受けた彼れが、こゝに赴いたのは、當然の歸結であつた。

(四) 福澤の啓蒙的、改造的運動

福澤が抱いて居た文明思想の大意は、以上の通りであるが、それを實現するには、第一に實學を尊重して、國家に獨立の氣象があり、人民にも獨立の精神がなければならぬとした。それで、彼れは『學問のすゝめ』に於て「一科一學も、實事を押へ、其事に就き、其物に従ひ、近く物事の道理を求めて、今日の用に達すべきなり。右は人間普通の實學にて、人たる者は、貴賤上下の區別なく、皆悉くたしなむべき心得なれば、此心得ありて後に、士農工商其分を盡し、銘々の家業を營み、身

も獨立し、天下國家も獨立すべきなり。」と説いた。更らにそれを強調し、擴充して「道のためには英吉利、亞米利加の軍艦をも恐れず、國の恥辱とありては、日本國中の人民、一人も残らず、命を棄て、國の威光を落さざることを、一國の自由獨立と申すべきなり。」と云つた。斯うした自由獨立の思想は、アメリカに於て、福澤が深い感銘を受けた點から胚胎して居た。彼れの獨立自尊主義とても、畢竟は、アメリカやイギリスの紳士生活から、體得したものであつた。

福澤は、其の文明思想を基調として出發した實學の普及と獨立自由の精神を土臺とした國家、人民の品性向上を促すがために、いろいろの著述を續刊した。其の態度は、啓蒙的、破壊的、改造的、懷疑的であつた。彼れは舊文化、舊制度、舊風習に對しては、破壊的で、懷疑的であつた。彼れは、新文化、新制度、新風習を作るためには、改造的、啓蒙的であつた。此の態度は、彼れの著述全般の上に能く現はれて居た。

彼れの舊文化、舊精神に對する懷疑的、破壊的態度は、夙に彼れが、武士生活をして居た頃に現はれて居た。彼れは、封建制度に纏ひ附いて居るところの格式、制度の窮屈なことを咀つた。彼れは、また舊習に囚はれて居た迷信や、不合理な信仰を排した。而して自己の個性を抑へ付けないで、獨立的な態度を以て、其の出身した藩に對し、世間に對した。それであるから、彼れが、英米文化

の洗禮を受けて、日本の舊文化、舊制度を破壊するに當つては、少しも、容赦しなかつた。例せば楠公の忠死を權兵衛が無意義に首を縊つたと同様であると云ひ、忠臣が二君に仕へ、寡婦が二度目の夫に嫁するのは當然だと主張した。時には、逆説的に『私の利替む可きの説』などを唱へて「私慾の深遠にして、一國の事實に顯はれたる成跡を見れば、暗に公共報國の旨に適するのみ。是即ち余が敢て人に勸るに、公平無慾を以てせずして、私慾の甚しきを祈る由縁なり。」と叫んだこともあつた。

彼れの新文明を建設するために執つた啓蒙的、改造的の著書は、主として、新知識を普及する上に努力された、彼れは明治二年『世界國盡』『西洋事情』を出し、五年には『學問のすゝめ』を出し、六年には『文學の教へ』を出すと云ふ風に各種の著書を出した。『福澤全集』が、原本五十部、百五冊に達して居るのを見ても、どんなに彼れが著述に全力を傾倒したかが思はれる。『學問のすゝめ』は七十萬冊、『西洋事情』は二十五萬冊を賣つたと傳へられるから、どんなに彼れの著書が博く行はれたかを知ることが出来る。彼れは、それ等の書に於て、西洋の地理や、歴史や、倫理や、風俗や、算數など、あらゆる百科全書的新知識を最も平民的に、最もわかりよく述べた。

(五) 福澤の文學方面に於ける功績

彼れの業績が、文學方面に關係して居る點は、其の内容よりも、寧ろ文章の上にあつた。彼れの思想は、全然、文學に寄與しなかつたとは云ひ切れないけれども、大體に於て、縁の薄いものであつた。ところが、其の文章は平民的で、福澤流の一體を開いたのみならず、明治時代に於ける最初の Criticism 若くは Essay を創始したものと云へる。

福澤が評論を書く迄、嚴密な意義に於ける評論若くは、批評と云ふものが、我國になかつた。勿論、少數の政治經濟論、史論、文章論と云つたやうなものがないではなかつたけれども、多くは、固定して概念に囚はれたり、善惡の標準によつて、是非を判断したりして、殆ど見るに足るべきものが乏しかつた。ところが、福澤は始めて新しい文明思想を基調とした近代的意義に於ける評論を書いて、正しい理論 筋道を、成るべく究明することに力めた。近代生活を開明してゆくべき評論乃至批評は、彼れの手によつて、始めて創始された。この一事を以てしても、彼れが文學上に於ける形式についての貢獻を無視することが出来ないのである。

のみならず、彼れは、其の思想を普及するために、彼れ独自の平民的な新しい文章を書き始めた。

當時、評論を書くものは、大抵、拮据な漢字を多く使用して、殆ど漢文直譯體の文章で押通して居た。またそれを以て、大に誇るべきことのやうに思惟して居た。ところが、彼れは、斯うした囚はれから脱出して、俗語や、平易な漢字を驅使して、極めて巧妙に其の思想を表現しようとした。彼れは、此の點から、漢字の數を制限すべきことを夙に主張した。彼れが『文字の教へ』に於て、述べたところによると、漢字の數は、二千か三千で、十分、事足るのだ。それで彼れは「此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らざれども、一通りの用便に差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとてさまで學者の骨折に非ず。」と斷言した。

斯うした流儀から出立して、俗語と漢字とを混融的に用ゐて、翻譯體の文章を創造すると共に、文體の改造をも計つた。彼れの文章は、彼れの談話その儘のやうなところがあつて、少しも虚飾がない。警句や、譬喩や、波瀾曲折はあつても、それが、極めて適切で、自然である。平明に暢達に其の表現しようとするところが、すら／＼と云ひ盡されてある。思ふに、彼れは、親鸞上人の文章などを見て、多少、啓發するところがあつて、斯うした文體を創始したものであらう。だが、畢竟文は人である。彼れのやうな人格があつて、始めて彼れのやうな文體が生み出されるのである。今、左に其の一節を引用して見よう。

學問とは、廣き言葉にて、無形の學問もあり、有形の學問もあり。心學、神學、理學等は形なき學問なり。天文地理窮理化學等は形ある學問なり。何れにても、皆知識見聞の領分を廣くして、物事の道理を辨へ、人たる者の職分を知ることなり。知識、見聞を開くためには、或は人の言を聞き、或は自から工夫を運らし、或は書物をも讀ざる可らず。故に學問には文字を知ること必要なれども、古來世の人の思ふ如く、唯文字を讀むのみを以て學問とするは、大なる心得違なり。文字は學問をするための道具にて、譬へば家を建るに槌鋸の用なるが如し。槌鋸は普請に缺く可らざる道具なれども、其道具の名を知るのみにて、家を建ることを知らざる者は、これを大工と云ふ可らず。正しく此の譯にて、文字を讀むことのみを知て、物事の道理を辨へざる者は、これを學者と云ふ可らず。所謂論語讀みの論語知らずとは即是なり。我邦の古事紀は誦誦すれども、今日の米の相場を知らざる者は、これを世帯の學問に暗き男と云ふ可し。經書史類の奥義には達したれども、商賣の法を心得て、正しく取引を爲すこと能はざる者は、これを帳合の學問に拙なき人と云ふ可し。數年の辛苦を嘗め、數百の執行金を費して、洋學は成業したれども、尙ほ一個獨立の活計を爲し得ざる者は、時勢の學問に疎き人なり。是等の人物は、唯これを文字の間屋と云ふべきのみ。其功能は飯を喰ふ字引に異ならず。國のためには、無用の長物、經濟を妨る食客と云うて可なり。故に世帯も學問なり、帳合も學問なり、時勢を察するも亦學問なり。何分必ずしも、和漢洋の書を讀むのみを以て、學問と云ふの理あらんや。

其の言説は、功利的に淺近なものであるけれども、文章は、達意的で、今日、讀んでも、現代の口語文、言文一致體などと餘り遠くない程度の親みを感じるのである。此の點に於て、彼れの文章

は、確かに文壇に貢献したところが少くないのである。彼れが平明な文字のうち、卑近で而も適切な譬喩、新しい警句を用ひたのは、讀者を引き付ける最上の秘訣で、右に引用した文中にも「文字は學問をするための道具にて、譬へば、家を建るに槌鋸の入用なるが如し。」と云ふやうな譬喩を用ひて、讀者にわかり易いやうに力めて居る。而して途中、退屈を感じさせないために「文字の間屋」とか「飯を喰ふ字引」とか「經濟を妨る食客」とか云ふやうな警句を巧みに用ひて居る。福澤流の文體は、概して、斯う云ふ風であつた。

第二に彼れは、近代文學の一要素であるところの告白文學に先鞭を附けた人であつた。彼れの『福翁自傳』は、一種のヒューマンドキューメントである。此の種の物として、最も偉大なのは、ルソ一の『懺悔錄』で、古今を通じて、最優れた懺悔文學、自己告白文學である。そこには、全體を通じて、ルソーイズムが鮮かに流れて居る。福澤の自傳は、素より『懺悔錄』などのやうに、藝術的價値は乏しいけれども、此の種の形式を以て、其の半生を懺悔し、告白したのは、興味ある現象である。第三に彼れは『世界國盡し』に於て後に興起した新體詩の先鞭を附けたのみならず、寓意小説『かたわ娘』を書いて、新味ある書き方を示し、英文和譯の模範を『童蒙教草』に於て示した。『童蒙教草』は、イギリスに行はれて居た通俗的な『モーラル・クラス・ブック』を譯したもので、少年にわかるや

うに書いたものであつた。文學的に幼稚な明治初年の時代にあつては、彼れが此の種の試みも、多少、文學的に貢献したであらうと思はれる。

要するに、彼れが、明治初期の文學に寄與した點は、主として、評論の形式を創始して、平民的な達意の文章を組成したところにある。新しい時代に於ける新しい思想を表現するものゝために、新しい批評をするものゝために、彼れは、其の指導者として起つたのである。そこに、彼れの一特色があつた。

(六) 中村敬宇の『西國立志編』

福澤論吉に比較すると、中村敬宇は、遙かに輪廓が小さくて、其の感化力も廣くはなかつた。けれども彼れは、ある一部に深い印銘を與へるべき力を持つて居た。彼れは、福澤のやうに、百科全書的知識を持つて居なかつたのみならず、評論の形式を創造すると云つたやうなところもなかつた。彼れの目的は主として、イギリス風の自助自立の品性ある清い紳士を養成しようとするにあつた。

中村敬宇は、名を正直と云つた。天保三年五月、東京に生れて、其の青年時代には、昌平黉に入つて、漢學を修めた。彼れの長所は、主として、儒者たる點にあつた。其の後、慶應二年、イギリスに留學して、約一年

半、滞在して、其の文化を親しく研究した。イギリス思想の感化を受けたのは、それがためだった。

敬字の著書として、世に普及したのは『西國立志編』である。これは、スマイルスの『自助論』を譯したもので、力めて、原文の一字一句をも、損しないで、嚴正に和譯しようとしたところが見えて居る。文體は、福澤の平民的なのに對して、寧ろ貴族的で、漢文直譯風のあとが残つて居た。だが、典雅莊重と云つたやうな趣は、福澤に無くて、敬字の文章にあつた。

天は自ら助くるものを助くと云へる諺は、確然經驗したる格言なり、僅に一句の中に、歴々人事成敗の實驗を包藏せり、自ら助くと云ふことは、能く自主自立して、他人の力に倚らざることなり、自ら助くるの精神は、凡そ人たるもの、才智の由て生ずるところの根原なり、推してこれを言へば、自ら助くる人民多ければ、その邦國必ず元氣充實し、精神強盛なることなり。他人より助けを受けて成就せるものは、その後、必ず衰ふることあり、然るに内自ら助けて爲すところの事は、必ず生長して禦ぐべからざるの勢あり、蓋し我もし他人の爲に助けを多く爲さんには、必ずその人をして自己勵み勉むるの心を減せしむることなり。是故に師傳の過嚴なるものは、その子弟の自立の志を妨ぐることにして、政法の群下を壓抑するものは、人民をして扶助を失ひ、勢力に乏しからしむることなり。

翻譯としては、忠實ではあるが、どうしても、片苦しいところがある。だが、翻譯文としての一體を創始したもので、時人は、喜んで『西國立志編』を一讀して、其の自助的精神を振起した。其の

賣高は、福澤の『西洋事情』に譲らなかつた。思ふに、後の翻譯文は福澤と中村とに教へられたところが多いやうである。漢文體の翻譯をした森田思軒の如きは、敬字の翻譯振を見て、自然、一體を發明したとは云へない迄も、敬字の脈を追ふたものと見られよう。

(七) 當時の教育と新學術

當時、福澤と中村の啓蒙運動と呼應して、文化開發に資したのは、民間の私塾や、文部當局の教育施設や、新聞雜誌などであつた。私塾として、最大なのは、福澤の慶應義塾であつた。明治四年の調査によると、三百二十三人の塾生が居た。その他福地源一郎の塾には七十八人、箕作秋坪の塾には百六人、尺振八の塾には百十一人、鳴門義民の塾には、百四十一人居た。

慶應義塾が創立されたのは、安政五年であつた。最初は、オランダ語を教へて居たが、後には英語を教へることになつた。福澤の功利的文明思想は、こゝで宣傳された。彼れが、慶應四年、幕軍と官軍とが上野で砲火を交へて、市民が狼狽しつゝある間に、悠然と砲火を窓外に望みながら、ウエーランドの經濟書を講じたこと云ふことは、當時の有名な逸話であつた。學者としての本分を自覺した彼れの門から、多くの秀才を出したのは、當然である。

尺振八の共立學舎は、正則英語を主として教へたが、こゝからは、田口卯吉、島田三郎、小池靖一らの人材が出た。中江篤介の佛學塾、江原素六の集成社、中村敬字の同人社なども有爲な若い人々を出した。當時の私塾は、大抵、英語またはフランス語を教へて、新知識を有する新人を養成するのを目的とした。其の新興の勢は官學を凌駕する有様だつた。

以上述べた私塾のほか近藤眞琴の攻玉塾(文久三年創立)福田理軒の順天求合社(天保五年大阪に創立、明治四年東京に移る)村上彦俊の達理堂(明治元年創立)などがあつた。攻玉塾は海軍士官養成を目的として英語、數學、航海學などを教へた。順天求合社は、數學を教へ、達理堂は、フランス語を授けた。

官學の方面を見ると、高等教育を授ける機關として、大學南校と大學東校とがあつた。大學南校は、以前、開成所と稱せられたのであるが、慶應三年、學制を改めてから、オランダ語よりも、英語、フランス語、ドイツ語の教授を主眼とするやうになつて、外國教師を招聘して、親しく教鞭を執らせた。明治四年には、其の規模が擴大されて、雇外人教師は英人五名、アメリカ人四名、フランス人三名、ドイツ人三名を數へるやうになつた。生徒も千百九十五名に上つた。また各藩の貢進生と稱する秀才を集めて、其のうちの最優者をイギリス、フランスに留學させた。大學東校は昌平費を改稱して、醫學を専修するところで、専門教育の先驅だつた。畢竟、明治十年に出來た東京帝

國大學は、以上を基礎として生れたのである。

文部省は、斯うして、高等教育の端緒を開くと共に、一方では、明治二年に府縣に小學校を設け三年には、大、中、小學校規則を定め、五年には、小學教則及び中學教則略を發布した。而してすべての教育を通じて、實用知識を教授することを主眼とした。それは、福澤が卒先して唱へた功利主義的な思想が、一般を動かしただからでもあつた。

斯うした風潮の下にあつた當時の人々は、渴するやうに新知識を要求した。それに應じて出た通俗的な學術書は相當に多かつた。明治初年から、西南戦争前後の時代までに出たのを挙げると、文部省が出版したチャンパーの『百科全書』を始め、福澤、中村の著述を中心若くは先縦として、理學、修身倫理、歴史、地理に關するものが二十數種出た。其のうちで、一番、流行したのは、理學に關するものであつた。川本幸民の『氣海觀瀾廣義』福澤諭吉の『窮理圖解』吉田賢輔の『物理訓蒙』後藤達三の『窮理問答』石黒忠憲の『化學訓蒙』小幡篤次郎の『天變地異』加藤宗甫の『化學入門』などは、其の主要なものだつた。それ等の書を通して、新知識が民衆の間に流布された。

(八) 新聞雜誌の啓蒙的勢力

新聞雑誌の發行は、文化開發に資すると同時に、一面、文學的にも、多少貢獻するところがあつた。新聞紙の嚆矢は、文久年間に出た『バタビヤ新聞』『中外新報』などであるが、毎月數回、定期に發行するやうになつたのは、元治元年、イギリス人ウエーランドが岸田吟香を主筆として出した『新聞紙』であつた。其の編輯助手には、本間潜藏、ジョン彦造の二人が居た。『新聞紙』は、單に世上の出來事を簡單に報道するだけで、時事を論評しなかつた。それに續いて外人宣教師ベリーの『萬國新聞』柳川春三の『中外新聞』などが横濱に發行された。その他『江城日誌』『遠近新聞』『新聞事略』などが出たが、何れも月刊または週間で、編輯法も幼稚であり、印刷も木版に依つたから、不鮮明を極めて居た。現在發行されて居る日刊新聞のやうなものは一つもなかつた。

其の後、稍新聞紙らしいものが出たのは、明治元年、政府が、其の施政方針を知らせるために發行した『太政官日誌』の生誕後からであつた。それは、今日の官報の初めで、新聞熱を起させる上に幾分力があつた。それに對して、福地源一郎(櫻痴)が、條野傳平(採菊)と提携して『江湖新聞』を發行し、岸田吟香が、横濱で『藻鹽草』を出した。

福地源一郎は、長崎の儒者福地荷安の子で、天保十二年三月、郷里で生れた。最初、オランダ語を少年時代に學んだが、後、江戸へ出て研學を續けた。萬延元年、外國人支配役となつたのが、彼れの後來、立身すべき

端緒となつて、前後二回、歐米を巡遊して、新智識を修得した。歸朝後、彼れは、幕吏をやめて、私塾を開いて、生徒を教へ、次いで『江湖新聞』を出した。其の後、彼れは再度、アメリカへ行き、また官吏となり、新聞社長となり、東京府會議長となり、後一轉して、劇作者小説家となつて、其の晩年を終へた。

福地が『新聞紙實歴』に於て、告白して居るやうに、慶應二年、幕府の使者に隨行して、イギリスフランスに十ヶ月ばかり、滞在して居る間に、諸名士を歴訪して、新聞紙の性質及び勢力を知つたので、それに刺戟されて『江湖新聞』を出したのである。此の新聞は、木版刷で、每號半紙二切を十枚乃至十二枚綴つた冊子風のもので、今日の雑誌の體裁に酷似して居た。内容は、雜報、寄書、時評などを收めたが、大抵、福地一人の筆になつたものだつた。彼れは、其の上、版下まで書いて、熱心に薩長政府攻撃の鋒先をゆるめなかつた爲め、政府の忌諱に觸れて、發行を停止された。

だが『江湖新聞』の活動は、漸く時人の注意を惹いて、新聞紙の讀者も、少しづつ、増加したので其の潮勢に乗つて『横濱毎日新聞』(今の『東京毎日』)『江湖新聞』の後身であるところの『東京日々新聞』、木戸孝允の保護を受けて居た『新聞雜誌』などが出た。續いて、明治六年には『郵便報知』(今の『報知新聞』)七年には『朝野』『讀賣』八年には『曙新聞』『東京繪入新聞』などが出た。此のうち『曙新聞』は『新聞雜誌』の改題したものであつた。その他、大阪、大和、京都、山梨、茨城などにも、地

方新聞が出るやうになつた。

當時、福地は、少壯氣鋭の時代で、無冠王の意氣を以て、明治六年、官吏を罷めて『東京日々』に入つて、其の婉曲流麗な筆を揮つて、社説の原型を示すに及んで、彼れの筆みに倣うて、記者生活に入る名士が續々、現はれた。それで『朝野』には成島柳北『日々』には末松青萍、岸田吟香、『曙』には末廣鐵腸、岡本武雄、『報知』には、藤田鳴鶴、矢野龍溪、栗本鋤雲、『横濱毎日』には沼間守一などが居て、旺んに雄を争ふた。けれども最初、卓越して居たのは、福地櫻痴と成島柳北との二人であつた。櫻痴は其の社説に於て當時の青年を動かし、柳北は、輕妙な記叙の筆で、讀者を喜ばせた。

彼等は、概して、當時に於ける新人で、進歩主義者で、歐米文化を多少、理解したものでばかりであつた。勿論、例外もないとは云へないが、大體、時代の先覺者として、歐米の新文化を鼓吹し、普及しようと力めた。従つて、其の思想も粗雑だが比較的新しく、文章にも潑刺たる生氣があつたが、福澤流のやうな平民的な文體は、未だそれに手を付けるものが少くて、概して堅苦しい文章殊に漢文風の文章が多かつた。

(九) 新文化開拓に貢献した『明六雜誌』

雜誌は、明治七年に出た『明六雜誌』が其の嚆矢であつた。それは、月二回の發行だが、體裁は極めて整はなかつた。けれども其の同人には、其の前年、明六社を組織した有力な學者、文士が多いので、新文化開拓に資した點が少くなかつた。其の人々には、森有禮、福澤諭吉、津田眞道、西周中村敬宇、加藤弘之、箕作麟祥、同秋坪、杉享二、津由仙、大槻文彦、九鬼隆一、辻新次、西村茂樹などが居た。而して其の主腦は、福澤、森の二人であつた。森は、十九歳で、イギリスに留學して、三年の研學を積んで歸朝した若い人物で、其の思想は、大體、福澤と一致して居た、而して福澤よりも、急進的な、直截なところがあつた。また清教徒的なキリスト教信者の風があつた。それで彼れは『廢刀論』や『男女同權論』『禁蓄妾論』などを『明六雜誌』に掲げて、論壇に一波瀾を捲起したことがあつた。其の他、西周の『羅馬字論』、神田孝平の『演劇改良論』、坂谷素の『萬國共通語の必要』の如き有益な論文が出たことがあつた。

『明六雜誌』のほかに『近時評論』同人社文學雜誌『草莽雜誌』『評論新聞』『柳橋新誌』『東京新誌』『花月新誌』『團々珍聞』『穎才新誌』などが、前後して、明治十年までに出た。其のうち、文學趣味を有した青年に最も喜ばれたのは、柳北の『花月新誌』『團々珍聞』などであつた。それに就て、島村抱月は當時を回想して、斯う云つて居る。

一方には『慘風悲雨世路日記』といふやうな小説や、人から貰つた成島柳北の『花月新誌』の合本やか、種々の意味で、當時の田舎青年の夢をそよる『花月新誌』の小西湖佳話に、

盃盪盪洗了東有響。酒到有排。頃刻一妓上來。徐開隔障。跪拜一拜道。今夕各位萬福。銀燭光下照映視來。妙齡可二十七八。晚後更衣。極是淡裝。藍楊間倭縞紗衣。裾史余踵。舶齋黑八絲帶。纏余下垂二尺。透明玳瑁。淡紅珊瑚。櫛影釵光與銀燭相映燦煥。

などある所は、天下の妙文として讀誦したものである。

今日の青年が見たら、支那人の文章と思ふやうなスタイルで、藝妓のことなどに書いたのが、當時の青年の眼に何等奇異に感じられないで、甘美な菓子やうに喜んで讀まれたのである。それから考へても、漢文風の文章が、明治十年頃までは、殊に勢力があつたことを推測し得るのである。

第二章 舊套を離れざる文學

(一) 假名垣魯文の戯作と新聞小説

明治初年から西南戦争前後の頃に至るまでの文學は、創作方面の收穫上、見るべきものが乏しかつた。當時の小説は概して、前代に於ける一九、三馬、春水、馬琴らの餘唾を嘗めて居るに過ぎなかつた。脚本も、江戸演劇の諸要素を取り入れて、それを補綴したものが多かつた。蓋し江戸末期の頽廢時代には、脚本も、淨瑠璃も、俳句も、短歌も、全くデカダン風のものになつてしまつて、頗る生氣を失つたところへ、維新大改革から、西南戦争前後の大混亂のために、純文學方面には、人材が集らなかつたのである。また新しい芽を吹き出すだけの機運も、熟しなかつたのである。當時の小説のうちで、稍見るに足るべきものは、假名垣魯文の『假名讀八犬傳』、『西洋道中膝栗毛』、『胡瓜扱』、『安愚樂鍋』を始めとして、二代目春水の『時代加賀萬』、『萬亭應賀の釋迦八相倭文庫』、『三世種彦の白縫物語』、『杉村春輔の復古夢物語』、『近世櫻田奇聞』などがあつた。其の他同時の作者には、鶴亭秀賀、山々亭有人(條野採菊)、柳水亭種清、笠亭仙果、梅亭金鷲などが居た。其の小説の大半は、勤

善惡主義の思想と讀本、草双紙、人情本、滑稽本などの結構を模した筋合のものばかりだった。若し強めて、其の優秀なものを擧ぐるならば、僅かに魯文の『膝栗毛』や『胡瓜扱』を推するよりほかはない。

魯文は、貧しい肴屋の家に生れて、小僧生活を送るうちに、手當り次第に小説、雜書の類を讀んで、小説家となつたやうな人物で、勿論、何等の見識も、學殖もなかつた。けれども彼れは感受性は、比較的敏活で、新しい時勢に對して、皮相的にでも、適應してゆけるだけの能を持つて居たところから、福澤の『西洋事情』などに傾倒して、飄る氣乍ら近代文明に就ての概念を得たのである。彼れが『膝栗毛』十一篇の序に於て「方今文明開化一時に進み、余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗究理の洋風に傾き、市街の兒童等に至るまで、芥子坊主の支那頭を殘截の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書をベケにして英字、佛の歐文エビシ、四百余州は何のその、萬國世界五大洲、天地の理を知る開端に至るは、めでたき御代に新玉の春を待ちたる心地になん。而して癡藩舊知事の公達子も無僕獨歩に世間を見知り、歸農の扶持は飛鳥川、水に流して商法開業、父母在せども遠く遊び、艦砲一發三千里、且に道を聽くとも、夕に死するを可なりとせず。牛を食し、ビールを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以つて、今日も報恩とす。」と云つて居るのは極めて

て皮相的ではあるが、當時の戯作者として寧ろ時代の傾向に對して敏活だと云はねばならぬ。

魯文の『膝栗毛』は、畢竟、皮相文明の概念を滑稽本風の作品に表現したものである。大體は『西洋事情』に依り、當時、パリ博覽會を見て歸つた宮田砂燕の説などを取り入れて、魯文一流の空想を混入させたもので、文明開化でなければ、夜も日もあけない時代の人心に投合しようとしたのである。

『膝栗毛』は、神田の蕩兒彌次郎兵衛、北八の二人が、横濱の豪商大腹屋に伴はれて、イギリスのロンドンに遊ぶ道中記で、勿論、一九の『膝栗毛』を模倣したところが多い。けれども、魯文が、皮相ながらも、明治初期に於ける時人の風俗、嗜好、傾向、生活などを描寫して、其の矛盾と不調和とを見せたところは、他の作家に比較して確かに一步を抜いて居た。高山樗牛は『明治の小説』に於て「明治四五年の交、魯文の滑稽物が當時の小説壇に獨歩したりし事實は、當代の粗笨な人心が如何に眞面目なる文學を味ふに堪へざりしか、又維新前後の創痕につかれたる國民が如何に鄙俚なる諧謔の中に其鬱悶を慰めしかを想見するに足る。其の西洋膝栗毛胡瓜圖解等は、西洋文明に眩倒せる當代人心を倒照するの鏡として見ることを得べし。」と批評して居る。

必竟、魯文が時勢粧に抛した低級な諧謔や滑稽は、文藝鑑賞の上に於て、尙ほ極めて幼稚だった

當時の人心にびたりと一致して、無條件に歓迎されたのである。彼れは『膝栗毛』の成功したのを見て、更に『胡瓜扱』を書いたが、これは、福澤の『窮理圖解』から思ひ付いたものである。彼れは、其の事について、「普通を假用し、實學有益の確論を無用の戲編に翻案せる」と告白して居る。それで福澤が、風の事を説明して「空氣日に照らさるれば熱して昇り、冷氣これに交代して風のもととなる。」と云つたのを模して「吹けよ川風揚れよ簾れ、中の歌妓の能さ、三弦の絲の柳橋、四時の盛りも取り別て、夏來にけらし白妙の、肌をすきの衣手に、嬋娟とすました左褌、箱屋が供に立姿。」と洒落れのめして居る。要するに、低級な模擬文學の範疇に囚はれたものである。

魯文以外の作家は、新聞に據つて、其の存在を續けて居た。當時、俗に續き物と云つた極甘い小説は、彼等の手によつて作られた。それは新聞が俗衆を引き付けようとした政策と作家が生活の資を新聞に依つて得ようとした希望とが合して、さうした作品を掲げたのである。

先づ流行兒の魯文が、明治六年『横濱毎日』につて滑稽物の筆を執ると、八年には三世種彦と稱した高島藍泉が『平假名繪入』に入り、續いて、二世春水と稱して染崎延房も亦同じ新聞に入った。十年には、梅亭金鷲が『團々』に入った。その他、新聞小説を書いた人々には、古川魁蓄、渡邊義方、伊東專藏、須藤南翠らがあつて、草双紙合巻物に代つて、當時の人氣を惹いた。其のうちで、魯文

と略ぼ同様の歓迎を受けたのは、二世春水であつた。勿論、何れも、舊套を脱しなつたけれども、今日の新聞小説の芽は、こゝから吹き出したものだとも見られる。

(二) 劇壇に於ける河竹默阿彌

小説界に比較すると、脚本方面は、江戸演劇の集大成と云はれた河竹默阿彌が居て、一大星座のやうに輝いて居た。彼れは、江戸末期から、明治の劇壇にかけて活躍した作者で、其の作品、「三百余篇の多數に上つて居る。而して彼れの傑作は、大正時代の今日も尙ほ東京大阪其の他の劇場に上演されて、看客を魅して居るのを見ると、其の劇的生命の長いことを思はせられる。

默阿彌は、江戸日本橋通の質屋吉村勘兵衛の長子で、文化十三年二月三日に生れた。彼れは、幼少の時から芝居好きで、稗史、院本の類を耽讀したが、また十四五歳の頃から茶屋酒の味を知つた早熟的な點があつた。

一時、非常に放蕩に身をやつして、父から勘當されたこともあつた。天保四年、彼れが十七歳の時、京橋尾張町の好文堂といふ貸本屋の若い衆になつて、放蕩生活から稍遠のいて居るうちに、脚本や、雜書などを讀んで不規則ながら、劇的知識を養つた。さうしたことが動機となつて、知人の紹介で、脚本作者五世鶴屋南北の弟子となつた。それば、彼れが十九歳の時で、市村座の狂言作者見習のうちに加はつて、勝蔭藏と名乗つたのが

作者生活の始めだった。爾來、努力の功が見えて、天保十四年十一月、二世河竹新七の名を襲ぎ、弘化二年には河原崎座の立作者となり、それから市川小團次に其の作劇上の手腕を認められて互ゐに提携するやうになつてから、愈々其の特色を發揮して「白浪作者」の名を得たのである。彼れが世を去つたのは、明治二十六年だった。

默阿彌の脚本は、時代、世話何れに於ても、相當に優れたものがあるけれども、其の長所は、一般の世評のやうに、矢張、世話物の上にあつた。それは、彼れ自身も、明白に意識して居たやうである。其の時代物は、能く纏つて居ると云ふだけで、彼れ独自の面目が出て居ないが、世話物は、彼れでなければ、書けない旨味が充分に現はれて居る。勿論、それは、櫻田治助、四世鶴尾南地らの長所を學ぶと共に、それを糺合し、融化したものにはちがいないけれども、さうした江戸演劇の美を一つに集大成した丈でも、默阿彌の特色は充分にある。殊に彼れは、其の上に彼れ自身が實地に觀察した江戸末期の社會及び人物を寫して、それへ彼れの純化と美化とを加へたのであるから、唯江戸演劇の集大成たるに留まらないで、それに新しい生命と新しい色彩とを加へたものと云つて宜い。永井荷風は、默阿彌の世話物を嘆美して、「自分は、常に默阿彌翁を以て、佛蘭西劇壇の Eugene Scive または去年死んだ Victorian Sardou 以上の大劇作家と信するものである。翁は我が現

代に多く見られる青年作家の如く學問や小理屈から、乃ち偏狹淺薄なる理想から藝術に這入つた人ではない。藝術に對する狂愛の情から直ちに其れに身を投じて、不知不識の間に藝術の何たるかを悟つた人である。」と云つて居る。

(三) 惡の詩人としての默阿彌

默阿彌の世話物にも、長所短所はあつた。其の短所は勸善懲惡主義に囚はれ、善玉惡玉の傀儡を驅使する弊に囚はれて居たと及び俳優の柄に依つて書くために、無理なところや、單調に流れる傾きのあることだつた。其の長所は、内容がロマンチックであると同時に描寫の上では寫實的で組織美、音楽美、色彩美に富んで居て、江戸末期から明治初年へかけての世相を巧みに表現すると同時に、すべての惡を美化する上にあつた。

彼れの世話物を讀むと、惡の詩人であることを思はせる。蓋し頼廢期の江戸の空氣や、情調は、新しい刺戟から、更に一層、新しい刺戟を追うて止まないと云つたやうな爛爛した官能を何人も持つて居たので、世話物の世界も、刺戟の弱い、平凡なものよりは、刺戟の強い、非凡なものを求めてやまなかつた。その要求に當てはまる世界は、惡の世界、色慾の世界、情死の世界、幻怪の世

界であつた。默阿彌は、さうした世界から、人物や、事件を選んだ。

默阿彌が、特に悪の世界に人物を選んだことは、彼れが白浪作者と云はれ、其の世話物を白浪物と云はれたのでもわかるのである。伊原青々園の『近世日本演劇史』によると、默阿彌は自分で「三人吉三は、最も心を盡した作で、中にも、我が村井長庵は、終生の世話物中第一の出来だと思ふ。」と云つたさうであるが、此の二篇は、何れも、盗賊を主人公としたものである。ひとり、右の二篇ばかりではない、彼れの傑作と云はれて居る『鼠小僧』『白浪五人男』『鑄掛松』『十六夜清心』『髮結新三』なども、皆悪人を中心人物とした作品である。彼れは、斯うして、悪の世界に於ける人々を描くことを長所として居た。

それは、彼れが、悪の詩人であるところの傾向、本質を有して居た爲めにちがいないが、一つは當時の廢頹的空氣に感化され、一つは白浪物を演出する上に特技を以て居た市川小團次に當てはめるためでもあつたのだ。蓋し彼れは悪を惡として見なかつた。悪のうちに美があり、善があることを洞察するだけの藝術的な官能と深い同情とを持て居た。彼れの解釋によると、悪の美化、悪の詩化を實現するところに眞の詩人の本質があるのだ。人は、悪を恐れ、悪を咀ふけれども、其の皮相を排いて、核心に徹するならば、必然的に、そこに美なり、善なりを見出し得るであらうと云ふのが

默阿彌の自信であつた。彼れは、斯うした解釋と自信と詩人的氣稟とを以て、悪の世界に於ける人物を美化し、詩化して見た。

『白浪五人男』は、何れも、恐しい賊である。けれども濱松屋の場に於ける辨天小僧は、惡でなくて美の象徴である。『三人吉三』も亦大膽不敵の曲者らであるけれども、お嬢吉三が創造した悪の華は、美そのものである。『十六夜清心』は、毒婦と惡漢との結合であるけれども、彼等の動作、風采は、美そのものを現はして居る。

以上は、悪の美化の一例であるが、更に悪の善化は『鼠小僧』『鑄掛松』などの上に現はれて居る。鼠小僧は、盗賊ではあるが、一面任侠な肌合を持つて居て、人に恵む善心の閃きを示して居る。鑄掛松も亦それと同様の傾向を持つて居る。彼等は、勿論、悪の世界のどん底に沈んで居る人物だが、左様した暗黒のうちにあつても、一片の人情味を忘れないで、表面、善を装うて居る奸人よりも、遙かに人情的に善な一面を有して居ると云ふことが、默阿彌によつて、明かにされて居る。それ等は悪の純化である。

默阿彌は、盗賊と共に、好んで毒婦を描いて居るが、それ等の女も亦美しい寶玉のやうな魅力を以て居る。山猫おきつや、まむしのお市、姐妃お百などは、默阿彌式の毒婦を代表したものである。

が、其の悪は、彼の女らが有する美によつて、淨化された趣がある。悪を悪として憎み得ない美がある。

以上のやうな意味に於て、默阿彌は悪の詩人である。彼れは、悪の世界から美と善とを見出すと共に、また美と善とを創造する。そこに、彼れの独自の世界があつた。即ち彼れは、デカダンス藝術の粹を示した詩人である、而して彼れが悪を中心として空想するところのロマンチックな世界は殺人、脅喝、姦淫、情死、幻怪と云つたやうな場面である。

(四) 默阿彌の劇的技巧と其の強味

默阿彌は、悪の世界を描く上に於ては、何處までも寫實的であつた。彼れが意識して、精細に觀察した江戸末期及び明治初期の世相を取り入れて如實に描いた。そこが、彼れの第一の強味であつた。伊原青々園も、その點について「先輩の治助、南北よりも一層寫實を尙び、其の詩材を自己の目撃し、若くは感想せる實際より採りたりき。」と云つて居る。彼れが時人を動かしたのも、斯うして堅實な寫實主義の上に起つて居た爲めだつた。時人は、そこに生きた世相の縮圖を見ることが出来て、それに共鳴したのだ。

それで、彼れの作品は、一面に於て、江戸末期若くは明治初期の時代風俗史と云つたやうな特色があつた。永井荷風は、その點を嘆賞して「其の寫實的半面は、狂言の本筋に關係のない仕出しの臺詞や、其の折々の流行の洒落、又は狂言全體の時代と類型的人物の境遇等に於て窺ひ知られるのである。維新後零落した旗本の家庭、親の爲めに身を賣る娘、新しい法律を楯にして悪事を働く代言人、暴悪な高利貸、傲慢な官吏、淫鄙な權妻、狡猾な髮結等いづれも生々とした新しい興味を以て寫し出されてある。」と云つて居る。

次ぎに默阿彌の第二の強味は、其の材料を取捨按配して、巧みに結構、筋立てをすることでその老巧な點にある。それは、彼れの世話物ばかりでなく、時代物にも共通の長所である。殊に世話物の代表作の一つである、『三人吉三』の如きは、結構の妙、配合の美を極めて居る。

彼れが『三人吉三』のうちに於て、和尚吉三、御坊吉三、お嬢吉三の三人を先づ對照させたのが、宜い思ひ付きである。江戸式の墮落坊主、放浪的な武家悪、娘姿の若衆が、兄弟の誼を結んで、悪事を働く上に、庚申丸の短刀と百兩の金とが附いてまわつて、それが悪因悪果を生じてゆく筋合を可なりに自然に、而して複雑に開展して居るところは、恐らく、默阿彌自身も得意とした點であらう。場面の變化と云ふ上に於ても、淋しい場面の次ぎには陽氣な場面、陰慘な場面の次ぎには、花

やかな、目ざめるやうな場面を配合して、それに江戸末期の社会的色彩や、情趣をからませて居るところも宜い。人物も、過去の罪業をしみじみ懺悔して居ながら、いざとなると、昔の兇暴な意氣を示す土左衛門傳吉のやうな特異の老人を挿んであつて、淋しい、やる瀬ない人生の一角を髣髴させて居るのが宜い。要するに『三人吉三』は、其の結構、配合の上に最善をつくした傑作である。

默阿彌の結構、筋立の妙は『鑄掛松』を見ても『縮屋新助』を見ても『鼠小僧』を見ても『御所の五郎藏』を見ても、すべてに共通して居て、此の點では、現代の新しい作家も企及し難いやうに思はれる。『鑄掛松』の序幕に於ける兩國橋下の遊山船の場に於て、陽氣な絃歌の聲に聞き惚れた鑄掛屋松五郎が浮世の榮華を羨んで心機一轉して、盜賊となる利那の氣持を見せたところなども奇抜だ。『御所の五郎藏』なども、獨創的ではないが、在來の江戸演劇に用ゐられた結構美を糅合してあつて、讀んだ丈でも、場面の面白味を充分に想像させる力を持つて居る。默阿彌物が長く飽かれないのは、半ば此の點から來て居るやうに思はれる程である。

默阿彌の第三の強味は、台詞の巧妙な點にある。そこには、彼れ独自の技巧が、充分に現はれて居る。其の代表的作品にある台詞には、常套的であつたり、間伸びして居る點が殆どなくて、藝術味が豊かに流れて居る。『三人吉三』のうちで、大川端庚申堂の場で、美しいお嬢吉三が、夜鷹のお

とせが持つて居た百兩を奪ひ取つて、どんと、おとせを川の中へ蹴込み乍ら、春の空を見上げて「月も朧に白魚の簪も霞む春の空、つめたい風もほろ酔に心持能く浮か〜と、浮かれ鳥の只一羽墜へ歸る川端で、棹の雫か濡手で泡、思ひがけなく手に入る百兩。ほんに今夜は節分か、西の海より川の中落ちた夜鷹は厄落し、豆澤山に一文の錢と違つて金包み、こいつあ春から延喜がいゝわえ。」と云ふ台詞は、色彩的、音樂的の味が深い。其のお嬢吉三の悪事を駕の中からそつと見て居たお坊吉三が、ぬつと現はれて、お嬢吉三の立ち去らうとするのを呼び留めて「駕にゆられてとろ〜と一はい機嫌の初夢に、金と聞いては見遁せねえ心は同じ盜賊根生、去年の暮から間が悪く五十と纏る仕事もなく、遊びの金に困つて居たが、なるほど世間は難かしい、友禪入りの振袖で人柄作りのお嬢さんが追落しとは氣が附ねえ、是から見ると己なご五分月代に著流しで小長い刀の落し差し、一寸見るから往來の人も用心する打扮、金にならねえも尤もだ。」と云ふ台詞も、緊張して居て、遅緩したところがない。

『三人吉三』にあるやうな巧妙な台詞は、彼れの作品の隨所に往々、ダイヤモンドのやうに輝いて居る。『髮結新三』の深川閻魔堂橋の場で、彌太五郎源七が、新三に復讐するところの台詞も、きびきびした味があつて凄い色合を帯びて居る。新三が源七に向つて「丁度所も寺町に娑婆と冥途の別

れ道、其の身の罪も深川に橋の名さへも閻魔堂、鬼といはれた源七が爰で命を捨るのも、餓鬼より弱い生業の地獄のかすり取つた報ひが、手前もおれも遊人、一ツ釜とはいひながら、黒闇地獄のくらやみでも亡者の中の二番役、業の秤にかけたらば貫目の遠ふ入墨新三、こんな出合もその内ですつきりあらうが淨玻璃の、鏡にかけて懐に隠しておいた此の匕首、刃物があれば鬼に鐵棒、どれ血塗れ仕事にかゝらうか。」と悪口を吐くと、源七も屹となつて「如何に所が寺町とて、まだ新盆の來ねえのに、聞き度くもねえ地獄の言立て、無常を告ぐる八幡の死出の山鐘三途の川端、あたりに見る口嗅ぐ鼻の人の來ぬ間にちつとも早く、冥土の魁さしてやらう。」と罵り返す臺詞にも、技巧の牙えがある。

默阿彌が第四の強味は、音楽美を以て、劇中の情味を助けたところにある。彼れの世話物には所謂心中や殺し場が多い。其の残忍な殺人を音楽の力で、美化し、緩和することについて、彼れは、細かい注意を拂つた。また心中の場に於ても音楽美を以て、其の情趣を助けた『十六夜清心』の心中場では『梅柳中宵月』と云ふ淨瑠璃を用ゐて、美しい若僧と艶な遊女との心中を美化した。「雲足早き雨空も、思ひがけなく吹き晴れて見かはす月の顔と顔」の文句が歌はれると、舞臺の上に月が出て「十六夜か」「清心さまか」と相擁する男女の情味は見物に詩的快感を興へるやうに出來て居る。『鑄

掛松』でも、兩國橋船遊びの場に絃歌の聲を聞かせ、中程にある妾宅の場にも、合方の端唄を活用したのみならず、大詰に松五郎が自害する場に淨瑠璃『新版歌祭文』野崎の出と彘据の一段を用ゐて、松五郎とお咲とが此の世の別れに臨んでの哀愁を野崎村の連弾にからませて詩的情趣を添へて居るそれから彼れの作中に於ける悽慘な殺しの場には、度々伴奏音楽として獨吟が用ゐられてあるのも詩化の一手段として、強い効果を示して居る。

(五) 默阿彌の短所

斯うして、彼れの強味のみを挙げると、彼れの作は完全で、缺陷がないやうであるけれども、必ずしも、左様ではない。人物の性格を表現する上に於ては、善玉悪玉主義に囚はれて居て、少しも生きたところがないやうなものもある。『村井長庵』は、彼れの自慢の作であるが、其のうちに出てくる手代の久八は、絶對的に完全な佛のやうな善人として表現されて居る。強慾な主人、放埒な若旦那に對して、何處までも忠義を盡して、無實の罪をも背負ふところは默阿彌の善玉の觀念の具體化で、少しも生きたところがない。長庵の性格は、また悪玉の觀念の具體化で、人間味に缺けて居て餘りに冷たく、機械化され、人形化されてある。斯うした人物の微妙な暗い心理なるものが、少し

も現はれて居ない。畢竟、默阿彌は、久八によつて善玉の權化を代表させ、長庵によつて悪玉の權化を代表させて、其のコントラストの上に妙を見せようとしたのであらうけれども、それは常套的な手段で、全く人間味が閉却されて居る。

これは、また場面や、筋を搬ぶ上の都合から、人物の性格を無視したり、虚構的、作爲的な人物を作つたりして、毫も顧みないと云つたやうなところがある。従つて、彼れが描く人物の中には、輕々しく人を信じたり、疑つたりして、無反省的に悲劇の種を作るものが多い。少し理智の眼を開けて見ると、直ぐに作者の魂膽がわかるやうな點が多い。『笠森おせん』の中に出るおきつと云ふ妾が、下僕市助の淺い虚言を信じて、主人今村丹三郎を疑つて自殺するのは、餘りに没反省的な女である。『鼠小僧』の中に出る後家お高なども、自分の家とは關係のない少年の盗みを辯護するために強めて、自分が懸想した爲めに、忍び入つたのであると云つて、全然、自己の面目を破つてしまつて、平氣で居るのは、没常識である。斯うした善人は、幕末時代にあつたらうか。如何に呑氣な昔の女でも、これほど没常識な女はあるまい。畢竟、默阿彌が、芝居をするための道具に用ゐられたに過ぎないのである。以上のやうな缺點は、默阿彌の作を通じて、往々、見受けるところである。

伊原青々園は、默阿彌の作中に以前あつた脚本を改作増補したのが少くないことを慥らないとし

て居るが、それは、當時の脚本作者の一般的な常習であつたらうから、深く咎むるに足りない。其の脚色化の巧妙さへあれば、それで宜いと思はれる。以上のやうに、默阿彌にも舊劇洵有の缺點はあるけれども、寧ろ其の長所美所の方が遙かに多いので、それ等の缺點は、彼れの價値に左程、わるく影響しないのである。

〇(六) 默阿彌の代表的作品

坪内逍遙は、彼れを嘆賞して「默阿彌は、其前に往ける及び其左右に歩めるものあらゆる長所を措據して、悉くこれをおのが藥籠中のもとなして、自在に配劑するの巧みなるは、沙翁近松の上に出でたり、前人の意匠脚色にして、或は其骨を換へられ、或はその胎を奪はれて、彼が作中に現はれ居らざるものは殆ど稀なりといはんも、甚しき誣言にはあらず。」と云つた。即ち彼れを以て「江戸演劇の最後の準大成者」とした。私はそれと共に、彼れが、江戸演劇に新しい生命と新しい色彩とを附加して、そこに彼れの獨創的な技巧を示した老練な藝術家であると云ふことを云ひ添へたい。彼れは、長い間の修養と經驗とによつて、其の藝術的傾向を完成した優れた劇詩人であつた。

彼れの作品は、寧ろ明治以前に作られたものに優秀なのが多い。殊に小園次と提携して居た時代に傑作を出して居る『鼠小僧』は安政四年一月、彼れが四十二歳の時の作で、當時、百餘日打續けて大當りを取つた出世作であつた。其の後『十六夜清心』(安政六年)を出し、『三人吉三』『縮屋新助』(萬延元年)を出し、『白浪五人男』『村井長庵』(文久二年)を出して、彼れの特色は、略ぼ遺憾なく發揮された。明治に入つてからも、彼れは六年に『髮結新三』十四年に『島衛月白浪』と云つたやうな傑作を出して居る。『霜夜鐘十字辻占』(十三年)『水天宮利生深川』(十八年)なども度々上演された佳作である。『髮結新三』は江戸情調が鮮かに出て居る素直な作で、それを彼れが五十八歳の時に書いたことを思ふと、彼れの若々しい、水々した新鮮な心が、いつ迄も、失はれなかつたことを示して居る。

以上、擧げた『鼠小僧』『十六夜清心』『三人吉三』『白浪五人男』『村井長庵』『縮屋新助』『髮結新三』などを讀めば、略ぼ彼れの作風と長所とを窺ひ得られよう。要するに、黙阿彌は、江戸末期から明治初年にかけて、劇壇に輝いて居た優れた作家で、江戸演劇の最後の一大殿將である。

(七) 『東京繁昌記』其他

小説、脚本のほかに、當時行はれて居た短歌、俳句、漢詩、漢文の類があつたけれども、それ等は、時代と多く没交渉なものであつた。さうした方面の作家には、相當知名の人々があつたけれども、彼等は、時代の潮勢を遙かに離れて見て居るに過ぎなかつた。唯成島柳北と脈を同うして居た服部誠一の『東京繁昌記』は、稍時代に接觸した傾向を持つて居た。『東京繁昌記』の漢文は、日本化した變體のもので、「牛肉の人に於けるは開化の藥舗にして而して文明の良劑也」と云つたやうな調子であつた。『妾宅』と題した文章の始めに「方今女學の行るゝや専ら女子の道を明かにし、稍男女同權の説あり。然り而して別品の流行未だ會て今日より盛んなる者あらざる也。妻に正權あり、妾に内外あり。一男にして能く一婦を守る者甚だ鮮し。」と論述してあるのも、眞面目なうちに滑稽味を帯びて居る。一種の東京印象記として、當時の風習、傾向の一面が、略ぼわかるところに『東京繁昌記』の價值がある。

要するに、明治初年から十年迄の文學は、僅かに黙阿彌と魯文とによつて、面目を維持した丈で他は云ふに足りなかつた。時代の動搖、實利思想の跋扈に加へて、讀者の鑑賞眼の幼稚、作家に凡庸の徒が多かつたことなどが錯綜しての結果である。美術、演劇なども、矢張、文學同様に振はなかつたのも當然である。

演劇は、不振ではあつたが、俳優には、坂東彦三郎、中村芝翫、尾上菊五郎(何れも五代目)河原崎權之助(九代目團十郎)澤村訥升(二代目)岩井半四郎(八代目)などが居て、實力の上では、決して前代に劣らなかつた。美術は、不振のうちに、一脈の新生氣が、かすかにほの見えぬではなかつたそれは、明治七年から九年へかけて、フランス人アベルグリーを初め、イタリー人キヨソネ、フォンタネチー、カルベルチー、ラグーザらが、わが政府の招聘に應じて日本へ來て、明治に於ける洋畫界の先覺者川上冬崖や、國澤新九郎らの努力に呼應して、西洋畫の趣味を注入する先驅となつたのであつた。國澤は、二年間、イギリスに留學して、洋畫を研究した新人で、明治七年歸朝すると、彰技堂と云ふ畫塾を開いたり、銀座に家を借りて、小さな洋畫展覽會を開いたりした。國澤と共に洋畫教授に熱心だつたのは、フォンタネチーで、裸體の活人モデルを用ゐて、寫生すると云ふ具合で、その門下から、小山正太郎、淺井忠などが出た。

別に在來の舊生命を維持した有力な畫家には、歴史畫の菊池容齋、江戸氣分を代表した河鍋曉齋柴田是眞らが居た。他に文人畫家として、中西耕石、村田香谷、田能村直人、谷口靄山、安田老山奥原晴湖などが居た。また華山、椿山の系統を繼承した瀧和亭、野口幽谷らが居た。而して文人畫の流行は、明治十五六年の頃まで續いたのであるが、美術上から見て、時代の進運と何等關係した

點がなかつた。要するに、演劇も、美術も、文學とひとしく、舊套撲守の時代だつた。

さうした沈滞と萎靡の上に一道の靈活な火を點じたのは、西南戦争であつた。

新人と舊人、保守と進歩、士族と平民との闘争が、西南戦争によつて、大きく破裂してからは、時代の動搖も、一寸靜まつて、新人の時代、平民が伸びる時代、進歩主義の旺んな時代が來て、文學美術、演劇の上に新しい光彩を發生すべき機縁を與へることになつた。

第三章 翻譯文學と政治小説の流行

(一) 政治思想の勃興と英佛獨の思想

西南戦後、急に猛烈な勢で、勃興したのは、新しい政治思想である。其の勃興の遠因近因について言ふと、遠因は、福澤の『西洋事情』などに刺戟された事、福地の『東京日々』に於ける社説などに啓發された事、一般的に歐米文化に心酔し初めた事などを教へる事が出来るが、殊に板垣退助が明治七年一月、副島、後藤、江藤らと共に、政府に對して、民選議院建立の建白を提出し、翌八年二月、愛國社を組織したことが、餘程有力な遠因となつて居た。

板垣らの民選議院設立の趣旨のうちには「方今政權の歸する所を察するに、上帝室に非ず、下人民に非ず、而して獨有司に歸す。夫れ有司、上、上帝室を尊ぶと云はざるに非ず。而して帝室漸く其尊榮を失ふ。下人民を保つと云はざるに非ず。而して政令百端、朝出暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ、言語塗蔽、困苦告ぐるなし。」と記してある。また板垣らが組織した愛國社の『本誓』のうち「我輩の斯の政府を視ること、斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做するより外なかるべ

し。而して吾黨の目的は、唯々斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして自主獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ。」と述べてある。畢竟、板垣らの思想は、ルソーの民約説を其のまゝ鵜呑みとしたものであることがわかる。今日から見ると、幼稚で粗笨であると云はねばならぬ。

けれども當時にあつては、新しい卓越した意見であるとされて居た。この事はやがてフランス思想が、イギリス、アメリカの思想と併立するやうになつたのを意味して居る。イギリス、アメリカの思想は、全然、功利的で、社會の實利を計ることを主眼として、政體に關する問題については、比較的冷靜な方であつたが。フランス思想は、ルソーの自由平等説を中心として、社會の根本的改革を實現するには、先づ政體の變革を第一義とすることを提示して居るところから、社會の實利と云ふ方よりも、寧ろ政治運動の方面に熱中する傾向を招致した。

フランス思想に共鳴した學者、青年らは、板垣らの主張に賛成したが、ひとり、ドイツ思想に傾倒して居た加藤弘之らは、それに對して、議院尙早論を唱へた。即ちイギリス、アメリカ、フランスの思想に對して、更にドイツ思想が併立することになつたのである。加藤らは、近世ドイツの國家學者ビーデルマン、スタインらの説に共鳴して、あく迄、君主の無上權を尊重して、萬民平等の

權利を否定し去らうとした。フランス思想には、恰度直反對で、彼れが進歩的、積極的であるとすれば、これは、保守的、消極的の傾向を持つて居た。ところで、一般社會は、ドイツ思想よりも、フランス思想を歓迎すると云ふ風があつた。ドイツ思想は、官僚中の有力者や、官學の徒のみが共鳴したに過ぎなかつたのである。

斯うして、政治上の運動が、次第に目立つて來たところへ、西南戦争が曝裂して、一時沈黙したが、戦争が鎮まると、自由民權説が急に非常の勢を以て、流行し初めた。それは、今まで腕力を以て、一氣に政府を倒さうとした士族が、却て政府のために抑へ付けられて、大抵滅落してしまつたので、残存した士族の群は、腕力の無効を悟つて、平和手段を以て、政府に肉迫しようと思つた結果、政治上に於ける新運動の合言葉として、自由民權説を唱説し、高調し出したのである。而して其の唱首は、土佐の板垣退助であつた。

板垣の自由民權説に油を注いで、其の勢を強めたのは、新聞紙であつた。それは、福澤の國會開設論が、一週間ばかり續けて『報知新聞』に載せられたことで、それに對して、諸方の新聞は、各自旺んに論議をしたのである。此の氣勢に煽られて、新しい政治思想は、到所に勃興した。而して明治十三年の國會期成同盟となり、自由黨の結黨準備となり、其の盟約書中に(一)日本人民の自由を

擴充し權利を伸す(二)國の進歩を圖り、人民の幸福を増益す(三)國民の同權(四)立憲政體の樹立を主張するに至つた。斯うした氣運は、やがて熟して、明治十四年十月には、板垣を首領として自由黨が生れた、其の翌年には、イギリス風の政治思想を抱いて居た大隈重信を首領とした改進黨が生れた。以上は、政治思想の旺盛になつた近因と趨勢との大要である。

それ等の時代思想を背景として、文學、美術、演劇などの方面を見ると、矢張、相互に一脈の連絡を有することを見出すのである。此の書の主眼とするところの文學方面を見ると、強い歐化熱及び新政治熱の勃興に伴うて、翻譯文學、政治文學が、勃然として流行し始めて來た新趨勢を第一に擧げねばならぬ。

(二) 翻譯文學の種類及び文體

當時、流行した翻譯文學は(一)政治的(二)純文學的(三)科學的の三類に分つことが出来る。政治的なものには、中江兆民がルソーの民約論を譯した『民約譯解』を始め、宮崎夢柳、小室案外堂らの『夢戀々』『鬼歌々』『西洋血潮の荒波』『自由の凱歌』などがある。純文學的なものは、政治趣味乃至歴史趣味を加へたものと雜種との二種に分つことが出来る。前者は、リットン、スコット、チズレリ

「などの小説を譯したもので、織田純一郎の『花柳春話』關直彦の『春鶯轉』尾崎行雄の『經世偉勳』牛山鶴堂の『梅蕾余薫』坪内逍遙の『慨世士傳』藤田鳴鶴の『繁思談』などを數へられよう。後者は兆民の『維氏美學』外山、山、矢田部尙今、井上巽軒の集作『新體詩抄』坪内逍遙の『該撤奇譚』井上勤の『全世界一大奇書』『狐の裁判』片上平三郎の『鸞環道回島紀』末松青萍の『谷間の姫百合』などを擧げることが出来る。科學的なものには、フランスの科學小説家ジュールベルヌの作品が多く譯出された。其の最初に出たのは、川島忠之助の『新説八十日間世界一周』で、それに續いて井上勤の『六萬英里海底旅行』紅芍園主人の『鐵世界』福田直彦の『萬里絕城北極旅行』などが出た。その他『學術妙用造物者驚愕試驗』『亞非利加內地三十五日間空中旅行』『月世界旅行』なども出た。斯うした翻譯が、二十年頃まで、續々出たのである。

以上に就て、細説すると、兆民の『民約譯解』(明治十五年)は、漢文體ではあるが、政治思想勃興の勢に乗じて、非常に歡迎された。板垣らによつて、漫然と鼓吹されたルソーの思想が、具體的に傳へられたのは、此の譯書のためであつた。宮崎夢柳の『自由の凱歌』は、ヂュマの作を譯したのであるが、『鬼歌々』その他のものと同様に、自由民權思想を寓したもので、其の舞臺を、フランス革命に取つたものであつた。高山樗牛は、これ等の翻譯を見て、「當時の政治界の時澹たる風潮を窺

ふことが出来る。」と云つて居るが、要するに、文學鑑賞の眼を以て、見るべき程のものではない。『自由の凱歌』の文章は、極めて舊式なもので、馬琴調を摸したやうに思はれる。

ザルバートと云へる街衢の中央より思ひも寄らず、忽然と鼓の聲天地に響き現はれ出し一彪の軍馬、スワ敵の我れに先たち寄せ來りしこそ健氣なれ、花々しき手始めの戦ひなし、革命黨が手並の程を見せ呉れんと急に隊伍を立直し、今や遲しと控へし所ろ、是は全く敵にあらず、巴里の護衛兵の政府に負き、人民を援けん爲め、此邊まで來りしものなるにぞ、革命黨は愈々之れに勇氣を増し、ドット揚げたる鯨波の聲。

と云つたやうな調子である。ところが、其れはひとり『自由の凱歌』ばかりに留まらなかつた。純文學的な作品で、政治趣味乃至歴史趣味を帯びたものを譯した物にも、矢張、馬琴調が附いて廻つて居た。でなければ、漢文調に囚はれたもので、明治二十一年、二葉亭四迷の『あひびき』が出るまでは、すべて舊套を脱しなかつた。

それは、純文學的な範疇にあつた織田純一郎の『花柳春話』(リットン)の如きも、明治十二年に出て、非常に歡迎されたのであるが、而して其の序文のうち、「舊文を一變して、苟も四十八字を讀み得るの徒は、之を讀むで解せざるの感なからしめ、以て啓蒙英史の風俗圖に充んとす。」と云つては居るが、矢張舊式に墮して居た。其の一節に「花は散り、霞がくれを行く雁の影に春暮て、か

たみに残すものとは、青葉かくれに宿かりて、昨日を語る鶯兒の聲より外に跡もなし、然れども人情熱を去り、冷に歸するの理とて、春の後なる夏景色は亦一層の詠なり。」とあるのを見ても、舊文を一變すると云ふ譯者の意氣込を全く裏切つて居ることがわかる。

同じく、リットンリットンの作を譯した藤田鳴鶴の『繫思談』は、實際、尾崎庸夫が譯述者であつた。これも「世の譯家、其構案のみを取りて、之を表發するの文辭に於て、總て心を用ゐる事なし……譯者竊に茲に慨するところあり、相謀つて、一種の譯文體を創意し、語格の許さん限りは務めて原文の形貌面目を存せん事を期し、これが爲めに瑣末に涉れる邦文の法度の如きは、寧ろ之を破るも、肯て顧みる所に非ず。」と告白して居るが、譯文を見ると「ケネルムは、累代培養せし樹林の下蔭に傍ふて、我家へと返りたるが、其路は一面青草にて潺々たる溪流其側を通過し、今しも別れし吟客がたどり行ける塵埃滿眼の大路に比すれば、瀟洒清瀟、同日の談に非ず。」と云つたやうな生硬なもので、頗る讀みづらく出來て居る。これは、當時の譯文に共通して居た弊害だつた。

蓋しそれ等の譯者は、主として政界の志士で、文學上の専門的な素養がないのみならず、譯文の上に微妙な味を出す丈の卓越した手腕もなかつたのであるから、優れた譯文を生み出すことが出來なかつたのだ。彼等は、序文に於て、大言壯語して、譯文の模範を示すやうな事を云つたけれども

それは常套的な誇張した御座なりの言葉に過ぎなかつた。而も専門家でなかつた彼等が、純文學的な作品を譯した動機は、何處にあつたかと云へば(一)彼等が歐米文化の一半を理解して居た眼には在來の小説が餘りに平凡無味に見えた爲め(二)政治趣味を鼓吹しようとか、乃至は新しい文學趣味を普及させようとか云ふ目的を以て居た爲めであらうと思はれる。

それ等の釋譯小説が、讀者に歡迎されたのは、讀者のうちにも、歐化熱や、政治熱に感染したものが多くて、在來の舊小説よりも、新しい歐米の小説を見たいと云ふ烈しい慾望を有して居た爲めだつた。而して彼等の文學的鑑賞眼の程度は、依然、進歩して居なかつた爲めに、粗雑な、生硬な譯文さへも、清新な文字のやうに思つて、愛誦したのである。

以上のやうな趨勢の中で、稍例外とすべきは、坪内逍遙が譯したリットンの『慨世士傳』である、それは流石に後來、文壇第一流の地位を占めた人の手になつたものであるから、譯文はたとひ、馬琴調の色彩を帯びて居ても、流麗で、婉曲で、一異彩を放つて居た。

(三) 翻譯文學の功果

雜種の方には、文學上から、相當の價值があるものが比較的にかつた。井上勤が譯した『全世

『界一大奇書』の原本は『アラビアンナイト』で、片山平三郎の『鸞環暗回島記』は『ガリブリス、ツラベル』を譯したのであつた。また『狐の裁判』は、ゲーテ作品を譯したものだつた。それ等のなかに、特に見るべきものは、坪内逍遙の『該撒奇談』で、これは、シエークスピヤの『シーザー』を譯したものだつた。

その他、兆民の『維氏美學』は、鷗外の『審美綱領』の出る前に於ける唯一の美學書で、原著者は、ユー、ジェーヌ、エロンであつた。此の書は、外山、山等の『新體詩抄』と共に、後の新文學興隆の上に資したところが少くなかつた。

科學小説は、單に當時の讀者の好奇心を挑撥し、満足させたに過ぎなかつたであらうけれども、一面、暗々のうちに科學思想を養成する機縁となつたにちがいない。それと同時にロマンチックな空想を湧起せしむる力もあつたやうに思はれる。

要するに、翻譯文學の流行は、西歐の新趣味、新知識を民衆の一部に與へて、新しい小説の興起を促すべき一原因となつた。斯うした機運に應じて起つたのは、末廣鐵腸、矢野龍溪、藤田鳴鶴、柴東海散史、須藤南翠などで、南翠一人を除くと、他は何れも政論家であつた。斯うして逍遙、鷗外、紅葉、露伴、二葉亭などが出るまでに、素人の手によつて、過渡時代を作られたことは、興味

ある現象であつた。

(四) 政治小説の作者と技巧

當時の政治小説は、嚴密に文學上から見ると、政治小説とは云ひ難いものであつた。少くとも、藝術的な政治小説ではなかつた。單に著者の政治思想を小説の形式を假りて、露骨に發表した低級なものに過ぎなかつた。畢竟、此の種の作家は、在來の舊套に囚はれた小説の缺陷を補はうとする意志を臆氣ながらも、持つて居たのであらう。だが、それよりも尾崎行雄が云つたやうに「身を小説家に現して、錦心繡腸を鏡花水月の幻境に發露し、以て大聲をして俗耳に入り易からしむるが如きは今日我國の政治家たる者の最急方便なりとす。」との方針で小説を政治上の方便に利用したのみならず、其の文學的な素養や、藝術的氣稟にも缺乏して居た爲めに、今日から見ると、極めて幼稚なものとなつたのである。

政治小説として、最も早く出たのは、明治十六年に發表された矢野龍溪の『經國美談』であつた。次に十七年には、藤田鳴鶴の『文明東漸史』、十九年には、末廣鐵腸の『雪中梅』、二十年には南翠の『新裝の佳人』鐵腸の『花間鶯』東海散士の『佳人の奇遇』などが出た。此のうちに『文明東漸史』だけは、

一種の史論で、小説ではなかつた。高野長英、渡邊華山の生涯を描いたところが、幾分か小説らしいと云ふ丈のものだつた。

他の五篇は、先づ政治小説と云つて差支へはないが、其のうち『経國美談』と『佳人の奇遇』とは、史的ロマンスの風味が際立つて居た。『経國美談』はギリシヤの歴史を敷衍して、稗史的に作りあげたもので、『佳人の奇遇』は、近代歐米に於ける史上の出事事を網羅して、亡國の志士に同情を寄せたものであつた。

『経國美談』が規つたヤマは、新興の日本にふさわしいと思はれるところのギリシヤの齊武の名士エパミノンドスとペロピダスとが力を合せて、國威の隆祥を計つた勇しさにあつた。『佳人の奇遇』が規つたヤマは、當時の自由獨立の思想に當てはまるべきアメリカの繁昌を叙して、時人の共鳴を得ようとしたところにあつた。『経國美談』は、事實そのものが、ロマンチックである。『佳人の奇遇』は著者の空想から、アイルランドの一佳人幽蘭女史を點綴して、それに各亡國に於ける志士を配合して、ロマンチックな空氣を作り出して居た。

『経國美談』の文章は、片假名交りの穩雅なもので、今日、見ても、左程、讀みづらくはない。『佳人の奇遇』は、漢文直譯體で美辭佳句を無暗に排列した誇張的氣臭の多いもので、今日、見ると、

隔世の感がある。この書は、表面、東海散士の手になつたとあるけれども、事實は、高橋太華の筆だと傳へられて居る。

以上の二書は、其の頃の青年に心から歡迎されて、洛陽の紙價を高からしめたものである。政治熱が強くて、漢文脈の誇張した文章を愛する風があつた當時の青年が『佳人の奇遇』を見て、どんなに驚喜したかは、今日の青年には、推測し得られないほどである。經國の志士を氣取つて居た昔の青年が、初かにエパミノンドスや、ペロピダスに私淑して『経國美談』を始終、手から離さなかつた光景も、一寸、今から想像しかねるほどである。左に『佳人の奇遇』の一節を引用して見よう。

時に金鳥既に西岳に沈み新月樹にあり。夜道朦朧なり。少焉ありて、皓彩庭を照し、清光戸に入る。幽蘭靜に起ち、窓を開て曰く、光景畫くが如し、郎君幸臨す、欄外風清花香人を襲ふ。良夜空く度り難く、盛會再び期すべからず。徒に相對泣する亦何の益かあらむや。氣を鼓し勇を奮ひ、歌舞吟咏自ら寛にすべしと。

當時は、斯うした文章が「巧妙だ、爽快だ。」と云つて、『旺んに愛誦されたのである。それに比較すると『雪中梅』『花間鶯』『新装の佳人』などは、其の後に出了た硯友社一派の小説などに稍近い文章となつて居た氣味があつた。換言すれば、寫實的傾向が、少しばかり出て居た。どうかして、新しい文章を作らうとした心持が、仄かに浮かんで居た。

けれども今日から見ると、『雪中梅』『花間鶯』などは、矢張、漢文脈が餘りに勝ちすぎて居て、俗語との調和が、うまく行つて居なかつた。『雪中梅』の主人公國野基が大演説をやる有名な章の發端にある一節を見ると「鐵道馬車ゴウ／＼と輾り去つて、和合社の乗合馬車ガラ／＼と馳せ來る、路狭く人多く往來雜沓す。忽ち見る横巷の入口に高く數帳の表榜を掲ぐ。曰はく—來る二十八日不論晴雨書畫雅集、席上諸先生揮毫、會主蛭字園再拜。曰く—今日二十日(日曜日)午後一時より井生村樓に於いて正義社政談演説會、出席辯士某々。」とあるのを見ると、殊に漢語と俗語との不調和が目立つやうである。だが、左の一節などは、稍柔か味が加はつて居る。

少女は枕元にて悄然と物思はしげの顔付なるが、色は白雪を敷き、鼻筋通り、眉秀で、眼中も冷かにして何處となく愛嬌あり。數日前に結びしと思はるゝ島田鬚は少し亂れて黒髮面に垂れ、母の寝顔を窺ひて、バラバラと涙を落し、手巾にて之を拭ふ様は梨花一枝春帶雨の風情なり。姑くあつて老母は、コンコンと咳をして目を開き「オやお春はまだ其處に居るかい、ツイウトウトと睡つた……」

だが、地の文と會話とが、また調和し得ないあとを歴然と示して居る。島村抱月が『雪中梅』の文章を評して「武骨漢がことさらに俗に碎けた事を言つたり、ことさらに細かい事に氣を付けたりするやうな所に、在來のいかめしい一週の漢文から、一步新しい方へ脱出しやうとして居る所とはあ

るが、それが十分に物になつて居ない。」と云つたのは正當である。けれども鐵腸らを始め、當時の政治小説の作者は、却て其の不調和を以て、長所だと信じ切つて、得意になつて居たやうな氣味があつた。漢文直譯的な地の文から、平坦なやさしい會話に移つてゆく變化を一つの獨立的なやり方だとして居た。

『雪中梅』が『經國美談』などに次いで、相當な喝采を得たのは、主として、二十三年の國會開設と云ふ點にヤマを置いて居るからであつた。描寫が粗大であつても、事柄そのものが當時の人々を動かしたのだ。南翠の『新粧之佳人』は、『歐化熱の有様を描くと云ふ上にヤマを置いた爲め、これも相當に讀書界を風靡した。それには、當時最も目新しく時人の眼に映つた舞踏會や、若い政治家や、美しい令嬢などが描かれてあつて、一々、モデルさへあつたと傳へられたところから、誰も好奇的な心持で『新粧之佳人』を見たのであらう。

(五) 當時の青年と文學

田山花袋は、『東京の三十年』のうちで、其の時分の新知識ある青年が、どんな心持で、當時の文學に對して居たかを叙述して居る。其の青年と云ふのは、花袋の友人で政治家志望で、文學好きだ

つたと云ふから、一部の青年の心持を代表して居るやうに思はれる。

「僕も、もう少し文章が書けると、文學をやるんだがな、文學者、藝術家が何と言つても、一番すぐれた高尚な事業なんだからな」何處からさういふ智識をかれは得たらうかと思はれるほど、文學者、小説家に就いての新しい知識を持つてゐた。或はかれも紅葉や思案や眉山が養はれたその同じ空氣の中に住んでゐたためであるかも知れなかつた。かれは紅葉が豫備門で三馬研究をやつてゐる批評などをした。『でもな、君。今の奴等のやうに、三馬なんか研究してゐちや駄目だよ。西洋にはいくらでもえらい文學者がゐる。すぐれた小説がある。これからの文學をやる奴は、何でも外國のものを讀まなければ駄目だ。』かう言つては、かれは「デッケンス、サツカレエ、ユウゴオ、ヂユマ、ゲエテなどと言つて、昂然として、指を折つてその大文豪の名を擧げた。かれはまた政治と文學との一致に就いてはなやかな空想を抱いてゐた。かれはよくビーコンスフィールド侯（ヂスレリー）の語を持ち出した。『議會に出てゝは議長、内閣に入つては總理大臣、そしてあゝいふ、小説を書く、實に理想的だ』などと言つた。ビーコンスフィールド卿の作もかれは澤山に持つてゐた。"Venetia" "Vivian Gray" などの話を私によくして呉れた。『佳人の奇遇』や『雪中梅』などといふ新刊書をもかれは常に讀んだ。丁度須藤南翠が改進黨新聞にその『新粧之佳人』を連載してゐる頃で、その中には多少井上侯爵の舞踏熱の時分の空氣や人物が書いてあるので、かれは頗るそれを愛讀した。

今日から見て文學的價値の極めて貧しかつた政治小説が、殆ど政治熱、歐化熱そのものゝ爲めに

廣く讀まれた具合が、花袋の筆によつて察することが出来る。

結局、いつも、才子佳人を主人公として、露骨な政見を托した當時の政治小説は、單に其の時分の文壇に喝采された丈で、一時的生命を有したに過ぎなかつた。後の文學に對しては、殆ど交渉がないと云つても宜い位であつた。けれども間接の影響が少しはないでもなかつた。それは、翻譯文學と共に、舊文學の殘影を次第に驅逐し、葬り去つて、眞に文學的に幾分の價値ある新文學の興起すべき地ならしをやつたことであつた。畢竟、それ等は舊文學から新文學へ推し移つてゆく過渡期の産物だつた。

尙ほこゝに一言したいのは、當時の文壇が三田派によつて、一時、光彩を加へたことであつた。

三田派の機關『時事新報』は、西南戦後に於ける新聞紙發展の機運に乗つて、明治十五年に創刊されて、福澤諭吉が、社説の筆を執ると共に、門下の人材を新聞界に入れた。藤田鳴鶴、矢野龍溪、末廣鐵腸、尾崎學堂らは、何れも、福澤の訓陶を受けた三田派の秀才で、政治家と新聞記者とを兼ねて居た。それ等の人たちが云ひ合はせたやうに、政治小説の方に手を付けて、一時、文壇を風靡したのであつた。當時未だ若かつた彼等は、恐らく、ヂスレリーのやうに、大きい政治家と文學者とを兼ねて、議會でならば議長、内閣へ入るならば總理大臣、而して傍ら、小説を書いて、才子佳人

の喝采を得たいと夢想したのであらう。それを幾分か、後日に實現し得たのは、唯尾崎學堂一人であつた。

(六) 劇界革新の微光

序に述べたいのは、當時の演劇と美術とのことである。それ等も、矢張、文學と同様、歐化的風潮の外に起つことは出来なかつた。其の氣運を眞先に感知したのは、劇界の策士と云はれた守田勘彌(先代)であつた。彼れは、十一年六月に新しく出来上つた新富座に始めて瓦斯を點じたり、有力な高官を開場式に招待したりなどした。而して當時の士で觀劇眼の優れた人たちの意見を入れて、リットンの原作を默阿彌が翻譯したところの『人間萬事金世中』と云ふ新狂言を上演した。

『默阿彌脚本集』のうちには『金の世の中』について「一種の喜劇味を伴つて居る社會劇として見ても、默阿彌の作中別の味ひを持つてゐる特色あるものである。」と云つて居る。此の作中には、魯文や、『東京繁昌記』の服部誠一のやうに、矢張、文明開化熱に浮かされて、夢中になつて居た當時の社會狀態を巧みに採り入れてある。序幕に小僧の野毛松が、番頭蒙八に「これ／＼野毛松、ふさけるな、小僧のくせに利いた風に、茶など呑むには及ばぬことだ。」と叱ると、直ぐに反抗して「いや小

僧だつて番頭だつて、開化の世界は同じ權だ、さう安くして貰ひますまい。」と云ふところや、毛織の家に寄食して居る惠府林之助が「當時は開けて居る故、金さへあれば蒸汽にて早速行かれぬ事もないが、蒸汽どころか電信を掛ける錢さへ自由にならぬ。」と嘆息するあたりは、當時の見物に喜ばれたであらうと思はれる。

此の狂言が上演されると、横濱在留のオランダ人三十餘名が、驚喜の眼を睜つて萌葱地テレンプの引幕を送つたりして、景氣を添へた。勘彌は、非常にそれを喜んで、鄭重に彼等を招待したと云ふやうな挿話さへあつた。

斯うして、新富座は、眞先に時代の新氣運に乗じて、働いたので、ドイツの皇孫ハインリヒ親王や、アメリカの大統領グラントが來朝された時は、第一に觀覽に供すると云つた風で、續いて十二年九月には、英米の俳優ダギットソン、ウキルソン、マカラン、ハノゲマン、レオン及びフランスの音楽家マダム・ハリマンらを加へて、四十郎一座と共に内外人合同劇を催ほした。

けれども當時の觀衆は默阿彌が翻譯した『金の世の中』に共鳴し得たであらうけれども、内外人合同劇に共鳴するほどの表養も、理解も持つて居なかつたので彼等の多くは、それを冷笑したり、諷つたりして、眞面目に外人の演技を見ようとしなかつた。其の結果、勘彌の新しい企ても、非常な失

敗に歸して、財政上に大きな打撃を受けた爲め、今まで執つて來た進歩主義に對して、懷疑的になつた。

爾來、勘彌は、保守主義に逆戻りして、劇界改革の意氣を頓に抑へてしまつたが、十三年一月には彼れの發意で、始めて新富座へ當時の新聞社の劇評擔當記者を招待して、今日のやうに、どの新聞も、劇評を載せるやうになつた例を開いた。

其の後、劇界革新のために設立されたのは明治十九年八月に發表された演劇改良會であつた。其の發起人のうちには、井上馨、森有禮、福地源一郎、外山正一、矢野文雄、依田百川、末松謙澄、澁澤榮一、藤田茂吉、和田垣謙三らが居た。賛成人のうちには、西園寺公望、田口卯吉、伊藤博文、大隈重信、陸奥宗光、大倉喜八郎、千葉勝五郎らが居た。斯うして、當時の有力な名士を多數に網羅してあつたところから、一時は、社會の耳目を聳てさせる丈の力があつた。

それで、外山正一は『演劇改良私考』を出版して、新時代の演劇についての感想、要求を披瀝し、末松謙澄は、十九年十月、一つ橋の講堂で、劇界革新について演説を試みると云つたやうな風で、築地に於ける大椿樓の改良朗讀會には、伊藤博文も出て、依田學海、川尻寶峯合作の、『吉野拾遺名歌』の朗讀に耳を傾けた。

當時の改良意見のうちには、女形を廢して女優を用ひ、花道や、廻り舞臺や、チヨボを全廢したいと云つたやうな歐化した要求があつた。だが、それは、未だ俳優そのものが、みな其處迄進んで居ない上に、劇場當事者も、左程、改良について熱心でなかつた爲め、いつの間にか、改良會も立消えとなつて了つた。

斯うした新風潮のうちにあつた市川團十郎は、未だ其の活歴風の技藝を完成する迄には至らなかつた。其の鷹揚な氣品ある藝風は、看客の一部から高尚ぶるとのみ誤解されて「活惚を踊れ」と云はれたことさへもあつた。菊五郎は、先代の藝風を守つて、巧緻なところが鮮かに觀衆の眼に映つて居たので、一般の見物には、團十郎よりも、より多く喝采されると云つたやうな有様だつた。

(七) 美術界と歐化的風潮

美術方面を見ると、こゝにも、歐化的な色彩が相應に著しあつた。それは、二つの方向を執つて現はれた。其の一つは、洋畫の勃興運動、今一つは、米人フェノロサの提唱によつて、維新以來、全く閑却されて居た日本畫を復興させようとするに至つたことであつた。尙ほ他に浮世繪の復興もあつた。

純日本畫の復興は、極めて、重大な意義を以て居た。當時の顯官は、概して田舎武士の出身で、美術上の鑑識眼が殆どなかつた爲め、洋畫や、石版畫を新文化の象徴のやうに思つて、日本畫を輕視したので、古來有名な畫家の手になつた傑作さへも、顧みられないやうな有様になつた。而も時人は、概してそれに雷同して、少しも、日本畫本來の價値を自覺しなかつた。斯うして、日本畫の命脈が殆ど稀薄になつた時、其の眞價を認めて、賞揚に力めたのは、米人フェノロサであつた。

日本畫の眞價を發見した人は、必ずしも、フェノロサのみではなかつた。フランスの文學者ゾラ、ゴッタル兄弟及びモネー、デガー、ホキツスラー、マネーらの美術家も亦日本畫の讚美者で、ゴッタルには『歌麿傳』『北齋傳』の著述がある。けれども、それ等の事は、遙かに後になつて知られた事實で、明治初期にあつては、先づフェノロサを以て、最初の日本畫の嘆美者としなければならぬ。

アーネスト・フェノロサは、北米ボストンの人で、明治十二年、日本に招聘されて、政治經濟の教授に當つた。彼れは、日本美術に對して、深い興味を抱いて、狩野永應について、鑑畫法を學んだ。その結果、日本畫が却て洋畫に優つて居ることを發見して、明治十四年、其の旨を世間に發表した。

フェノロサは、再三、日本畫を賞揚して措かなかつたのみならず、進んで、岡倉覺三、河瀬秀治

らと共に、明治十八年、鑑畫會を組織して、時人が、日本畫に冷淡なのを警醒するに力めた。それと同時に、開成所教師であつたドイツ人ワグネルや、イタリヤ人キヨソネや、アメリカ人ピゲロウも、口を極めて日本美術の尊いことを力説した。

若しそれが、日本人のうちから出た叫びであつたならば、誰も耳を假さなかつたであらう。けれども歐化熱の烈しい時代で、歐米人の云ふとは、無條件で共鳴した傾向のある場合なので、智識階級のうちに、漸く反省して、靜かに日本畫のことを考へて、其の再興を計らうとする者が出て來た。明治十五年及び十七年に、政府が繪畫共進會を再度開いたのも、日本美術協會の前身である龍池會によつて、數度、觀古美術會を開いたのも、皆フェノロサ等の刺戟に基づいたのであつた。それが一步を進めて、日本美術協會の新古美術の展覽會を生み、東京美術學校の設立が、明治二十年十月に勅令を以て、公布されるころまでいつたのである。

洋畫は、西南戦後、頓に勃興して、明治十一年には、淺井忠、小山正太郎らが、洋畫研究所十一會を神田に開いた。洋畫家のすべてが一致して、共同畫談會をも催ほした。それ等の形勢は順潮に推し進んだのであるが、十四五年頃から、日本畫復興の氣勢が急に昂ると同時に、衰微の兆候を帯び始めた。明治十五年に開かれた政府主催の繪畫共進會で、洋畫の出品を許さなかつたのは、それ

がためであつた。

斯うした不振状態を見て、洋畫家の一團は、發奮して、明治十六年、兩國井生村樓に集つて、振興の方策を議した。而して其の翌年には、淺井忠、小山正太郎らが、十一會を發展させて、頻りに頽勢を盛り返さうと力めたけれども、一向、手答へがなかつた。此の不振は、日清戦争前後まで續いた。

浮世繪は、一時、不振だつたが、此の期に入つて、世の中が、大分、落ち付いてくると同時に、其の需要を増して、復興の時代に入つた。それに、一方には、新聞紙が發展し始めて、其の方にも浮世繪畫家の需要があつたので、新しい壇場を得た形となつた。

當時、浮世繪の大家として知られたのは、豊原國周、月岡芳年、小林清親、小林永濯、落合芳幾らであつた。國周は俳優の似顔繪に於て、芳年は、洋風を加味した人物畫殊に美人風俗畫に於て、清親は新しい滑稽畫に於て、永濯は小兒などを描くことに於て、芳幾は江戸狹斜の風俗を寫すことに於て、各自、傑出して居た。其の後繼者としては、富岡永洗、尾形月耕、武内桂舟、右田年英、水野年方らがあつた。

尙ほ日本畫壇に於ける此の期の大家として、フエノロサと共に、邦畫復興に盡した狩野芳崖、橋

本雅邦の二人あることを忘れてはならぬ。彼等の事業は、第二期に入つてから、改めて略述した
5。

第貳期
新文學發生時代

第壹章 當時の思潮及び文學の概勢

(一) 歐米文學思潮と國粹的思潮

第二期に入つて、文學界は、始めて、正しい道を歩み始めた。其の現象を観察すると、第一に擧げなければならぬのは、坪内逍遙が『小説神髓』及び『當世書生氣質』を著はして、明治に於ける新文學の黎明が近付いたのを知らせる曉鐘をつき鳴らしたることである。在來、江戸文學の余唾を嘗めて居た文學界は、翻譯文學や、政治小説の刺戟によつて、昏睡のうちから、僅かに半眼を開きかけて居たのが『小説神髓』によつて、愈々兩眼を開いて、眠りから醒め始めたのである。それに續いて、長谷川二葉亭の處女作『浮雲』や、翻譯『あひゞき』が出るに及んで、黎明の光りが、鮮明になつて來たのである。

第二に擧げねばならぬのは、『小説神髓』の公刊と前後して、尾崎紅葉や、山田美妙、石橋思案らが硯友社を組織して、江戸文學の研究に熱中する傍ら、幾分か新しい英米の文學にも接觸して居たのが『小説神髓』や『當世書生氣質』などから強い刺戟を受けて、先づ美妙の主宰する女學雜誌『以良

都女』の發刊となり、硯友社同人の機關雜誌『我樂多文庫』の創刊となつたことである。

斯うして、一方に於て、小説界の黎明が來ると共に、一方に於て、評論界の黎明が近付いたことは、第三に擧げねばならぬ重要現象である。それは、徳富蘇峯が、九州熊本から『將來の日本』を携へて上京して、忽ち世間に歓迎せられ、續いて二十年二月『國民之友』を發刊し、『新日本の青年』と題する有名な論文を公にして、一躍、評論界に於ける新しい重鎮となつたことであつた。蘇峯を中心として、民友社が組織されて、そこから徳富蘆花、竹越三又、山路愛山、國木田獨歩らを出した。

以上三つの重要現象のほかに、歐化主義の反動から、三宅雪嶺、志賀重昂らが、明治二十一年、政教社を組織して、國粹主義を宣傳すべき機關雜誌『日本人』を創刊したことや、落合直文らが新しい國文、短歌を始めたことなども、注目に値した出來事であつた。

右に擧げた四つの現象に於ける思想的、社會的背景について、こゝに一瞥を與へると、思想的には歐米に於ける文學及びキリスト教思想が、大きい主潮となつて、小説界の革新と勃興とを促がしたことを見逃すことが出來ない。それに對峙したのは、江戸文學の余脈及び儒教的、佛教的な思潮であつた。歐米文學の一部は、玉石混淆ではあるが、既に第一期の後半に入つて、續々翻譯されたのみならず、英米文學に精通して、そこから深い印象と感銘とを得た坪内逍遙が、小説革新に志し

て『小説神髓』を書いたのであつた。蘇峯の『將來の日本』も亦英米文學及びキリスト教に傾倒して居た彼れの腦裡に醗酵した産物で、それによつて、評論界の革新を促がさうと企てたのである。小説も、評論も、斯うして、英米文學の感化からして、革新を企てられたのだとすれば、それを以て、大きい主潮の一つと見做して、差支えないわけである。

蘇峯によつて組織された民友社は、一體にキリスト教的な傾向を持つて居たものが多かつた。蘇峯兄弟は勿論、獨歩や、湖處子を始め、社中には、さうした色合を帯びたものが相當に居た。而して宗教雜誌ではあるが、文學趣味を多分に有して居た『女學雜誌』(二十一年十月創刊)なども、キリスト教思想を旺んに鼓吹して、新しい文學の搖籃となつた。

斯うして、歐米文學及びキリスト教思潮が文學界の新しい時代を色付ける主流となつて居た時、國粹主義の提唱によつて、新たに國文學や、漢文學の勢力が、幾分か復活した氣味合になつた。佛教なども稍勢を得て來た。而して雜誌『日本人』のほかに神儒佛の思想を宣傳すべき『大道叢誌』『日本弘道會の機關』『弘道會雜誌』『陸羯南の儒教的思想と國家主義とを唱説する』『日本新聞』などが出て、歐化主義、キリスト教などに對抗した。勿論、其の勢力は、歐米文化思潮に及ばなかつたけれども、文學界の一部分に影響した。佛教思想に根源を有して居た露伴が『風流佛』と共に、其の頭角を擡げ

たことや、紅葉と共に西鶴の文章に傾倒したことなどは、其の一例である。

(一) 當時の社會思潮と文化

更らに社會方面を見ると、歐米文化の勢力は、依然として強かつた。少くとも、二十三年、教育勅語が發布されるまでは、全盛を極めて居た。殊に其の最高頂に達したのは、明治十七年から二十年頃迄であつた。伊藤、井上らが、條約改正を早くするために、其の一方法として唱へ出した歐化政策によつて、鹿鳴館の夜會や、假裝舞踏會などが、旺んに催はされて、はては日本人種改良を名として、日本の家屋、飲食、衣服をも、歐化して了はうとすることを唱へるものが出た。斯うして、歐化主義が極端まで推し進められると、愛國心を有する日本人の一部は、もう我慢し切れなくなつて、國粹主義を唱へ出したのである。

其の文學方面に於ける現象は、既に略述したが、政治方面に於ては、鳥尾小彌太の保守中正派、教育方面では、川合清丸の日本國教大道社、西村茂樹の弘道會などの活動を見るに至つた。そのため、歐化主義は、社會に於て、幾分の打撃を受けて其の勢は、少しづつ衰へて來た。拙著『明治大正五十二年史論』に於て、私は歐化主義と國粹主義との戦ひについて、斯う述べたことがある。

今左に引用しよう。

當時の歐化的傾向に對して、最も有力に國粹保存主義を提唱したのは、三宅雪嶺を中心とする『日本人』と陸羯南を中心とする『日本新聞』の一派であつた。彼等は、盲目的歐化主義を打撃すると同時に、日本特有の傳統的長所と精華とを保持しなければならぬことを雄健な力ある文章を以て力説した。此の叫聲は歐化熱に對して起つた反動的潮流と合して、強く民心を動かし、一部の識者をも動かし得たのである。これと前後して、同じく國粹保存の運動に参加した人には西村茂樹、川合清丸、鳥尾小彌太、谷干城等があつた。西村は日本弘道會に據つて、日本固有の道徳を説いた。川合は、大道社に據つて、日本固有の宗教を高調した。谷は勝海舟、副島種臣等と時弊を痛論し、鳥居は『王法論』を著して保守的政法論を鼓吹した。斯うした思想界の動力は、やがて政治上にも、同一色彩を呈せしむべき潮流を導き出した。當時政府に壓迫されて居た自由黨の殘類と改進黨の人々は、今迄嫉視し反目したことを忘れて、一致して政府攻撃を始め、歐化政策の缺點を非難し、條約改正に對する政府の軟弱な態度を罵り、言論、出版、結社の自由を主張して、烈しく政府に挑戦した。

此の時、國家の危機を叫んで、大同團結を呼號したのは、政界の策士後藤象次郎であつた。彼れの大風呂敷は見事に多くの政客を魅して一時的成功を收めて、政府を脅かした。鳥尾小彌太の保守中正派も亦政府攻撃を續けたので、政府は大隈を引入れて、外相の椅子を與へ、後藤を誘惑して、選相の地位に据えたけれども、民間黨は素より其の鋭鋒を柔げなかつた。而して其の鋒先は、最も鋭く、條約改正問題に對する反抗運動と共に、

大隈外相の身邊に差向けられた。其の結果、福岡玄洋社員來島恒喜が、大隈の車中に爆弾を投じた一個の悲壯劇となつて、一段落を告げたのである。何れにしても、歐化的大勢に對する反動は、保守的勢力の勃興となつて、政界も概して、保守主義者乃至國粹主義者の横行調歩するところとなつた。

此の間に於て、特に記念すべきことは、黒田内閣の下に、憲法發布の大典が舉行されたことである。

政界に於ける國粹的、保守的大勢は、右に述べた通りであるが、此の現象は、教育、宗教、美術、文學の方面にも鮮明に示された。教育界に於ては、明治二十三年十月、教育勅語の煥發を見たが、それに對して、教育家も學者も、宗教家も、我田引水のな解嘲を下して、少しも進歩的な解嘲を下すものがなかつた。此の際、井上哲次郎は『宗教と教育について』と題して、キリスト教の趣旨は教育勅語の内容に背いて居ると斷言して、キリスト教徒と大論戰を開いたが、之は國家主義と歐化主義との葛藤的反射であつた。

其の他國粹發揮の現象は、井上圓了の東洋哲學研究の開始、幸田露伴の小説に於ける佛敎思想の發揮、文部當局者の國家的教育の實施と國漢文及び日本の德育の獎勵などに現はれ、美術界に於ける雜誌『國華』の發行、日本畫復興を主眼とした東京美術學校の設立、寶物取調局の設置、帝室技藝員の制定などにも亦同じ潮流を見ることが出來た。

私は、略ぼ以上の概論によつて、歐化主義と國粹主義とが、戦ひ合つた状態が、わかるであらうと思ふ。ところが、こゝに注意しなければならぬことは、當時の小説界では、矢張、歐化的風潮が、

社會に於けるよりも、強いと同時に、國粹主義の提唱によつても、中々衰へなかつたことである。田山花袋も其の點に言及して「歐化主義の反動として起つた政教社の國粹保存主義は、延いて落合直文等の國文學復興となつたが、文壇に對する感化影響は勿論民友社とは較べものにならない。その民友社の背後には、京都同志社のキリスト敎思想なども大分働いてゐた。」と云つて居る。所詮、文藝の大勢は、社會的傾向と趣を異にして、歐米文學及びキリスト敎思想が、比較的長く勢力を保持して居たと見ねばならぬ。

(三) 歐米文學とキリスト敎思潮の勢力

文壇に於て、ひとり、歐化的傾向が、長く續いて、容易に衰退しなかつた理由の一つは、新しい生氣あり、内容ある文學の模型を歐米文學のうちに求むるよりほかに、行くべき道がなかつたからである。勿論、西鶴、近松、芭蕉なども、明治文壇の一部に影響したにはちがいないが、大體の本筋は、歐米文學のあとを辿らねばならなかつた。小説でも、評論でも、今迄、日本文壇になかつた新しい考へ方、新しい見方、新しい表現法が、歐米文學のうちにある以上、文壇の先覺者は、どうしても、其の方に共鳴して、そこからいろ／＼の暗示を得來ることにならざるを得なかつた。それで

坪内逍遙、森鷗外、長谷川二葉亭、内田不知庵、森田思軒及び民友社の人々は、歐米文學の紹介に力めることを以て、文學的進歩を計るべき第一の要件と信じたのである。

逍遙は、つとにシェークスピアの戯曲を翻譯したが、鷗外は、明治二十四年頃に、ドーデー、ツルゲーネフ、トルストイ、ホフマン、レルモントフ、シユピンらの作物を翻譯した。二葉亭は、ツルゲーネフの『獵人日記』の一節を『あひゞき』と題して譯出した。思軒は、ユーゴー、エツヂウオー、ポー、ホーソン、ジュール・ヴェルヌ、ツエツケなどの作品を譯した。不知庵は、二十六年にドストエフスキの『罪と罰』を譯した。それから、民友社が企てた『十二文豪』に於ける『マコーレー』（竹越三又）『トルストイ』（徳富蘆花）『エマーソン』（北村透谷）『ワーズワース』（宮崎湖處子）なども出た。その他、黒岩涙香の譯したボベスコヤ、カポリウの探偵小説、博文館から發行した『世界文庫』なども、歐米文學の一半をわが文壇に傳へた。若い人々は、何れも、それに共鳴した。

それから、キリスト教思潮が、文壇の一部に強い感化を與へたわけは、當時の儒佛兩教が、其の傳道上に於て、全く保守的で、惰眠的で、新代の青年を動かすべき力が、極めて稀薄になつて居たにもよるが、今一つは、キリスト教の經典であるところの『聖書』が、新しい文學味、新しい詩的色彩を帯びて居て、青年の心眼にフレツシュな感じを與へたにもよるのであらうと思はれる。藤村の

自傳小説『春』や『櫻の實の熟する時』を見ると、さうした心持が、能く出て居る。

（四） 新島襄のキリスト教宣傳

明治に於けるキリスト教思潮の宣傳者として、第一に記憶すべきは、京都に同志社を創立した新島襄である。彼れは、徳富蘇峯が嘆稱したやうに、一面、國民的自覺を有する下に、徳育の基本として、キリスト教を日本に弘布しようと決心した人物である。蘇峯は、彼れの人物について「彼は宗教の神聖なることを教へ、深く之を信仰せんことを論じたりと雖も、然も之が爲めに國家を忘れ國體の精華を傷くるが如き人物を養成せざらんことに努力せり。是を以て彼は宗教家としては、常に祈禱讚美を爲す宗教家たるのみならず、併せて上帝の眼中に於て、正義、人道とせらるゝ所を堅持する宗教家たらしめんと欲し、之を政治家としては、獨り惻巧なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し、國を愛するの政治家たらしめんと欲し、之を文學者としては、獨り能文雄筆なる文學者たるに止まらず、併せて正義を愛し、眞理を敬する誠實眞摯なる文學者たらしめんと欲し、之を事業家としては、獨り經營勞作の事業家たるのみならず、併せて公共の福祉を増進する事業家たらしめんと欲し、之を人民としては、獨り其衣食住に汲々たるのみならず、併せて其思想、精神品行

に於て、最も文明化せられたる高尚醇美の生活を得せしめんことを欲したり。」と云つたのは、穩健な見方である。

新島襄は、上州安中の藩士で、元治元年六月、二十一歳の時、國禁を破つて、アメリカに渡航し、約十年間、彼の地に留まつて居た。彼れはウイリヤムス大學、アムハルスト大學などで、神學を研究して、明治七年、日本へ歸り、京都に同志社を創立した。彼れの門から出た人材には、徳富蘇峯、浮田和民、海老名彈正、小崎弘道その他、有力な人々が多い。

新島が日本へ歸つた時分は、福澤、中村らが、英米の功利思想を鼓吹して、時人も亦それに共鳴して、内的教養を閑却して居た。新島は、その點に對して、頗る憐らなかつたのである。其の缺點を補充して、正義を愛する人、眞理を敬する人を作るため、神の福音を宣傳しようと決心した。同志社を立てた目的は、そこにあつた。

彼れの高潔な人格と熱誠をこめた努力とは、彼れの事業を次第に擴張せしめた。彼れの感化を受けた人物は、彼れの主義、精神を尊重して、宗教界、教育界に活動した。それが動機となり、下地となつて、キリスト教が、日本に於て、旺んに傳へられるべき時代が來たのである。此の意味に於て、彼れは、明治時代に於けるキリスト教界の先覺者であつた。彼れが歸朝する以前に、クラーク

や、チエンスなどの人々が居て、キリスト教宣布の上に於て、相當の功果を残したが、新島襄が出て、始めて、キリスト教的教育が、擴張され、廣布さるゝ芽を吹き出したのである。

彼れは、比較的短命で、明治二十三年、四十七歳で歿したけれども、彼れの感化は、長く後まで残つて居た。而して其の遺風を繼承した海老名、小崎、浮田、徳富らを始め、新渡戸稻造、内村鑑三、本多庸一、押川方義、井深梶之助、宮川經輝らが、キリスト教の宣傳や、キリスト主義の教育に力を入れたのみならず、新島の同志社が出来る間もなく、それに刺戟されて、青山學院、明治學院、東北學院、關西學院、鎮西學院を始め、明治女學校、英和女學校などが、キリスト教の精神を基調とした教育を弘めた。それは、主として明治十二年頃から二十一、二年頃までに出來たのである。

それ等の影響は、やがて文學上にも波及して、其の反映の一つとして現はれた民友社は、即ちキリスト教的思想を背景とした文學的結社とも云ふべき風を帯びて居た。民友社一派よりも、大分遅れて現はれた『文學界』の一派のうちにも、キリスト教的思想を有したものがあつた。二十一年に出た『女學雜誌』は、殆どキリスト教の色彩を以て滿されて居た。斯うした有様で、文學をやらうとする若い人々は、一度、キリスト教の門を潜つて、其の洗禮を受けたと云つたやうなのが多くなつて

來た。少くとも、日清戦争前後の時分までは、さうした風があつた。私は、斯うした點から、キリスト教的思想が、文學の上に可なりに影響を與へたことを認めたい。第二期時代の文學を理解するには、以上の社會的思想の傾向を背景として觀照しなければならぬのである。

第二章 新文學の黎明

(一) 坪内逍遙の小説神髓

坪内逍遙が『小説神髓』及び『當世書生氣質』を出したのは、明治十八年の春から初夏へかけてであつた。即ち四月に『小説神髓』を出すと直ぐ其の翌月、逍遙の持論、主張を裏書するために、新しい小説の模型として『書生氣質』を出したのである。

逍遙は明治十六年、東京大學文學部を卒業したのであるが、平生、好んで英米の小説や、脚本を見て、在來日本に行はれて居る小説と對照して、眞面目に考へた結果、そこに新しい世界を發見した。即ち勸懲主義、皮相的寫實の傾向を一排して、外的よりも、內的に人情の機微、心理の活動を描寫するのが、小説の本務だと信じた。此の所信を披瀝したのが『小説神髓』である。

『小説神髓』は、畢竟「小説とは何ぞや。」と云ふ問題に對する新解釋である。小説の意義、描寫の原理、方法を平明に教へた新しい文學論である。其の内容は、二卷十章から成立つて、上卷には、小説の本質及び起源、變遷を述べ、小説の主要目的が人情の描寫にあつて、勸善懲惡にない旨を明

示し、小説の種類及び効能を列挙してある。下巻には、先づ小説の方則を説いて、日本在來の小説を批判し、作家の規準とすべきところを教へて、文體、脚色、性格から描寫の事に及んで、最も親切を極めて居る。

當時、文學に志した人々は、逍遙の『小説神髓』を読んで、始めて小説の意義、目的の那邊にあるかを意識したと思はれる。勿論、多少、心あるものは『小説神髓』に先立つて出た中江兆民の『維氏美學』や、外山、矢田部の『新體詩抄』や、菊池大麓の修辭學の譯書などで、幾分か臆氣ながら、文學の定義乃至小説の概念を知得したであらうけれども、それが具體的にも、理論的にも、明確になつて居なかつた。それを明確にすべき必要が迫つて居たところへ、『小説神髓』が出たのである。

『小説神髓』のうちに於ける主要點として、何人も能く引用するのは「小説の主腦は人情なり、世態風俗之に次ぐ。此人情の奥を穿ち、心の中の内幕をば漏す所なく描き出して、周密精到なるを小説家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らん事を力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとす。憾むべき事ならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其人物をば作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強て人情に悖戻せる、否心理學の理に戻れる人物などを作り出さば、其人物は、既に人間世界の者にはあらで、作者が想像の人物なる

から、其脚色は巧なりとも、其譯は奇なりとも、之を小説と言ふべからず。」と云ふ一節である。

逍遙は、以上の意を更に明かにするために勸懲主義の本元である所の馬琴の小説に言及して「彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の人士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり（中略）されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて、我作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正人の情感をば作り設くる事をなさず、唯だ傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり。」と斷定した。當時にあつては、眞に空前の卓見とすべき言であつた。

されば、田山花袋は『小説神髓』について、「寫實を教へ、心理描寫を説き、主觀を没したる客觀的態度を奨め、從來の小説の悉く邪道なることを道破した點は、たしかに逍遙の偉勳である。」と賞讃した。高山樗牛も亦「逍遙一度出で、其の小説神髓と書生氣質とを著して勸懲主義の誤謬を極論し寫實小説の嚆矢を開きてより一世靡然として之に赴き、小説文壇の旗幟爲めに一變せり。是れ素より時勢のおのづから然らしめし所なりと雖も、そもく又世を擧げて舊習の夢中に昏睡し、一人の能く舊圈套を顛脱するもの無き時に當り、滔々たる時に逆ひて、一世の木鐸となりたるは、逍遙其人の識見亦た非凡倫を絶えたるものあるに因らずむばあらず。」と云ひ、『明治文學史』の著者（岩城

津太郎)も「小説神髓は、嘗に小説のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有数の著書なりき。」と推讃した。

唯樗牛は、それと同時に『小説神髓』にも聊か微癢あることを述べて「其寫實の意義の偏狹に失したる、傳奇及びノベルの並立を認めざる、心理的描寫を過重したる、又心理的描寫の通用せられ得べき小説の如何なる種類なるかを究めざる、理想小説の眞價を認むることを欲せざる、今日より見れば疑はしきふし少からずと雖も、是れは舊來の小説に對する反動として已むを得ざるの弊なりしならむ。」と云つて居る。思ふに、逍遙も、それ等の點について、相當の見解を有したであらうけれども、何よりも先づ大體の上から、革新的鐵槌を揮ふことの切要を痛感して、樗牛が擧げた點にまで、論及するに追がなかつたのであらうと思はれる。要するに『小説神髓』は、明治文學の新聲を眞先に齎らした曉鐘であつた。

(二) 新文學の模型としての『書生氣質』と寫實主義

逍遙は、嘗に小説に對する新見を披瀝したに留まならないで、其の主張を具體化したところの處女作『當世書生氣質』を續いて發表した。當時の社會は、小説家を戯作者として輕侮して、新しい教

育を受けた學士が、小説の筆を執るであらうとは夢にも思はなかつた。ところが、逍遙は、さうした社會的慣習を打破つて、自ら進んで小説家となつて、『書生氣質』を書いたと云ふことは、當時の社會に強い感動を與へたであらうと思はれる。今日の人々は、赤門を出た文學士が、小説を書いて、珍しいとも、意外だとも、思はないけれども、明治十八九年頃は、文學士の肩書を有したこと其の事が既に大家であるやうに解されて居た時代であるから、さうした大家の地位にある新人が、小説に筆を染めたと云ふ新しい現象に先づ深い興味と好奇心とを挑撥されたにちがいない。

殊に『書生氣質』は、當時にあつて、最も新しい書き方をしたものの一つで、たとひ、今日から見ても、多少、不滿なところがあるにせよ、極めてフレッシュな感じを當時の讀者に與へた。蓋し書生と云ふことは、今日の新人を意味した言葉で、其の生活も亦舊來の生活とちがつたところがあつたこの事も亦當時の社會の注意を惹いたにちがいない。殊に學生らは、自分に親みある生活が描がれて居ると云ふことに對して、先づ共鳴したであらうと考へられる。例せば、左の一節の如きは、當時の書生々活の一面が能く出で居る。

(編)そいつは我輩の願ふ所だ。親父の供給が絶えてからは我輩も實に窮したから何か金儲をしなくては。下宿の拂もできやしない。早速周旋してくれたまへ。それじゃア今朝ツからやつて居るのは。即ち其 Translation [翻譯]

か(山)さうヨ、見たまへ難と如斯體裁さ(繼)どれ／＼ト言ひながら山村譯しかけたる原稿をとつて見る(繼)ヤア随分亂暴な翻譯だな。エトなんだ……是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ蓋シ遠隔ナルサキソン時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ。決シテ疑フ可キ事ハ非ラサルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ……ハ、ハ、イヤニ冗長な曲りくねアつた變に讀悪い文章だなア。羊の腸よろしくたア如斯文體をいふんだらう就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざア實に重複極るじやアないか。ナゼこんな文を延すんだらう反語ばかりいやに重なつて讀悪くツて。解りにく／＼ツて是れじやア素人にやア解りしやアしないぜ(山)ハ、ハ、ハ、ぶつ／＼けかきだものを、文はどうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかつたり。同じ事を繰返して居りやア。骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出来るだらう。何々せずんばあるべからざるなりと歎。それ然り豈それ然らんやなりとやつて居ると。十行二十字は二十分位に一枚かけツちまふ。是之を Economy of Labour 「ほねをりの儉約」といふ(繼)ヤレ／＼斯いふ翻譯者の手に成た。翻譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかさう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ(山)ヲツト承知だ。それじやアペイジ、トエンチー(二十葉)から、かうツト。ページ、サルチー(三十葉)まで、君にやろう汗手堂へ明後日ゆくからなるべくせいでして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから(下略)斯う云ふ風に書生々活を描寫した『當世書生氣質』は、十八年五月に第一巻を出して、翌年一月に完結した。全部十七巻で、春のやおぼる戯著としてあつた。私は明治二十五年頃、田舎に居た時、

縁日の夜店で、それを見たが、妙な名があるものだと思つた。けれども「春のやおぼる」と云ふ優しい名が、未だ十四歳位の私の頭に何となく、なつかしい印象を與へたことを未だに忘れ得ない。

『書生氣質』の内容は、某英學塾に居る數名の書生の氣質を寫すことを主眼として、彼等が、各自境遇と運命との糸に操られて、いろ／＼に轉變し行く徑路を描くと同時に、彼等の有する新思想と在來、社會に行はれて來た舊思想との衝突を標示して、それを彩るに、守山父子の奇遇や、小町田榮爾と云ふ青年と田之次と云ふ藝妓とのロマンスとを挿んだものである。

逍遙が新しい描寫法によつて、其の表現しようとした人物、事件は、ある程度まで、鮮かに浮び出て居る。其の序言にある意味のやうに、全編の趣向は専ら傍觀の心得で寫眞を旨とし、勸懲主義を排して、之を訓誨の料とする之を獎誡の資とするとは、讀者の心に一任したと云ふ心持をも充分に看取することが出来るのである。

だが、此の書が出た時、いろ／＼の批評があつたやうに、後の明治文學の評論を書いた人々のうちにも、亦是非の評がある。私は、此の書に對しては、歴史的に評價するのを至當とする。何となれば、逍遙は、未だ何人も、新しい小説の模型を示さない時代に、先づ自ら率先して、模型を創造したところに人知れぬ大きい苦心と努力とが伴つて居たからである。それに全部十七巻から成立つ

て居て、約九ヶ月間追次出したのであるから、讀者を次ぎへ又次ぎへ引付けてゆく呼吸、按配をも要したであらうと思はれる。だから、逍遙も、幾分か穩健になつて、思ひ切つた試みが出来なかつた點もいくらかあるだらう。さうした點を考へて、評價するのが正しからうと考へる。

それで歴史的評價の上からすれば、在來の勸懲的、戯作的、皮相的、方便的の弊から離れて、地の文にも、會話にも、大分新味が加はつて、人情の表裏、心理の働きなども、寫し出されて、教養ある人が讀むに適した眞面目な作品であると云はねばならぬ。高山樗牛が「明治小説の新紀元を開きたる過渡時代の産物として、重大なる歴史的意義を有す。」と云つたのも、このためである。だが歴史的評價を離れて、嚴正に批判することになると勿論、多少の不滿があらう。それは、止むを得ないことで、田山花袋が「勸懲主義の戯作を排して立つた作でありながら、まだ其の根本から戯作の臭味を脱し切らないものであつた。」と云つたのも、一應の道理はある。けれども、それを以てしても、『書生氣質』が齎らした明治小説史上に於ける重大な地位は決して消滅しないのである。

(三) ロシヤ文學と『浮雲』を書いた二葉亭

逍遙が『小説神髓』と『書生氣質』によつて、文學上の新しいムーヴメントを起したのに刺戟されて、處女作『浮雲』を書いて、略ぼ『小説神髓』の説いた目的を、さながらに實現したのは、長谷川二葉亭である。

二葉亭が、明治、大正文學史上に於ける地位は、可なりに宜いところにある。だが、彼れは、どうも、眞劍になつて、文學者として終始しようとはしなかつた。ひよつくり作物や、翻譯を出したかと思ふと、直ぐにいつとなく、韜晦して、もう大方、文壇を去つたらうと思ふ時分に又ひよつくり現はれて、何か書くと言つた風であつた。斷續的な働きをしながら、彼れの創作も、翻譯も、可なり立派なものを残した。

二葉亭の生涯は『長谷川二葉亭』に詳しいから、こゝには、傳記を略するが、彼れの生涯については『予が半生の懺悔』を見ると、一番、早わかりがする。彼れは「私が文學が好きになつたかといふ問題だが、それにはロシヤ語を學んだいはれから話さねばならぬ。それはかうだ——何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件といふ奴が起つて、だいぶ世間がやかましくなつてから後、『内外交際雜誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。従つて世間の輿論は沸騰すると云ふ時代があつた。すると、私がずつと小供の時分からもつてゐた思想の傾向——維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して來て、即ち、慷慨愛國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり

合つて其の結果、將來日本の深憂大患となるのはロシアに極つてゐる。こいつ今の間にどうにか禦いで置かなきゃいかんわい——それにはロシア語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして、外國語學校の露語科に入學することゝなつた。」と先づロシア語學習の理由を述べ、次ぎに「で、文學物を見るやうになつたのは、語學校へ入つて、右のやうな一種の帝國主義に浮かされて、語學を研究してゐる内に自らその必要が起つて來たので、といふのは、當時の語學校はロシアの中學校同様の課目で、物理・化學・數學などの普通學を露語で教へる傍、修辭學や露文學史などもやる。所が、この文學史の教授が露國の代表的作家の代表的作物を讀まねばならぬやうな組織であつたからである。する中に、知らず識らず文學の影響を受けて來た。尤もそれには無論下地があつたので、いはば、子供の時からある一種の藝術上の趣味が、露文學に依つて油をさゝられて自然に發展して來たので、それと一方、志士肌の齎した慷慨熱——この二つの傾向が、當初のうちにはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでゐた。が、漸く帝國主義の熱が醒めて、文學熱のみ獨り熾んになつて來た。」と告白して居る。

彼れが志士の精神と熱情とを抱いて、文學に關係した徑路は、以上でわかるが、彼れは職業を文學に求めようとしなかつた。彼れが云つて居る通り、官報局の翻譯係、陸軍大學の語學教師、海軍

省の編輯書記、外國語學校の露語教師などといふ順序で進んで、一時は警務學堂に居たこともあつた。大體、文學とは縁の遠い方ではなかつたけれども、彼れのやうな職業的行徑を辿つたものは、文壇に少い。それに生理心理學と云つたやうな學問を十數年研究したなども、一風變つて居た。晩年『東朝』記者として、ロシアに赴いたのは、彼れが生來持つて居た二つの傾向——文學的、志士的と云つたやうなものが、併行的に現はれたのだと見て宜い。

(四) 浮雲を書くについての苦心

斯うして毛色の變つて居た二葉亭が『浮雲』を出したものは、彼れの告白したやうに、生活費の一部を得たい爲めであつたが、然し彼れが、可なりに苦心を費したことは、左の一節を見ると明かである。

「浮雲」には、モデルがあつたかと云ふのか？ それは無いぢやないが、モデルはほんの參考で、引寫しにはせん。いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなことは勿論ない。さうぢやなくて、自分の頭に、當時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具體化して行くにはどういふ風の形を取つたらよからうか。という／＼工夫する場合に、誰か余所て會つた人とか、自分の豫て知つ

てる者とかの中で、稍々自分の有つてゐる抽象的觀念に脈の通ふやうな人があるものだ。するとその人を先づ土臺にしてタイプに仕上げる。勿論その人の個性はあるが、それを捨てて了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ譯だ。

即ち二葉亭は、寫實の意義を具體化するためにモデルについて、相當に苦心したのである。而して其の思想及び形式については、逍遙が主として、イギリス文學の影響を受けて、そこから學び得たところがあるに對して、二葉亭は、主としてロシア文學の影響を受けて、そこから暗示を得た。また逍遙が、文章上、馬琴、一九、三馬などの小説から稍影響を受けて居るやうに、二葉亭も、風來、三馬、全交、筆村あたりから、少し影響を受けた。だが、大體は、二葉亭が告白したやうに思想上では、ペーリンスキーの評論などを讀んで居たところから、日本文明の裏面を描き出さうと企てたと同時に、『浮雲』の中巻から以下の文章、形式、表現は、主としてドストエフスキー、ガンチヤロフなどの書き方を學んだのである。

二葉亭が、今一つ苦心したのは『浮雲』を言文一致で書くについて、どう云ふ言葉を用ふるかと云ふ點であつた。當時は言文一致の創始時代であるから、勿論、彼れが参考とするやうなものはない

つた。彼れは、其の點に於て、逍遙、蘇峯らの説を聞いては見たが、結局、彼れ自身、一家の見識を立て、「どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花の咲き、實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を強ひてこね合せやうとするのは無駄である。」と決心して、成語、熟語などは、凡て取らないで、最初は、三馬の小説のうちにある深川言葉「べらぼうめ、南瓜畑に落こた風ちやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」と云つたやうな言葉を参考にして、幾分の便りとしたのである。この點は、二葉亭の卓見にちがひなかつた。斯うして、いろ／＼の苦心を経て『浮雲』が生れたのである。

『浮雲』は最初、無名文士だつた二葉亭の名で出すことが出来ないで、第一編は彼れが指導を受けた先輩逍遙の名を借りて出版した。第一編は、明治二十年六月に、第二編は、二十一年二月、第三編は二葉亭の名で二十二年秋『都の花』に出た。此の傑作——逍遙の『小説神髓』を略ぼ具體化した作品は、花袋が云ふ通り「當時『浮雲』の精細な心理描寫に眼を聳てたのはほんの小數の有識者に止まつて、あの作はたゞ單に妙なもの、不思議なものとして世に迎へられ、決して當時の反響を呼起したのではない。」のであつた。蓋しそれは『浮雲』の内容が、二十年ばかり餘計に進歩し過ぎて居た結果で、止むを得ない運命だつた。若し『浮雲』が當時の文壇に於て『書生氣質』のやうに歡迎され

たとしたら、恐らく、二葉亭の生涯も、どうなつたかわからぬであらう。或は純然たる作家となる決心をしたかも知れないのである。

『浮雲』の内容は、静岡の方から東京へ出て、叔父の家に寄寓した某省の判任官である内海文三と叔父の娘お勢とを中心にして、それに叔父の妻お政や、内海の友人本田などを搦ませて、戀のロマンスや、新舊思想の衝突などを描いたもので、筋は極めて単純で、在來の小説とは、全然ちがつて居た。だが、二葉亭が覗つたところの日本文明の裏面を現はすことや、乃至人物の性情心理を描寫する上では、見事に成功したのである。

『浮雲』が出た時分の日本、殊に東京などでは、文明開化と云ふことにかぶれて、其の皮相に溺れた若い男女が往々あつた。それに對して、一概に保守的な考へを以て臨む中老時代の男女も亦往々あつた。一は新時代を代表し、一は舊時代を代表するもので、それが纏れ合ふと、葛藤を惹き起して居た。二葉亭は、此の點を現はさうとして、お勢に新時代を代表させ、其の母のお政に舊時代を代表させて、家庭に於ける小さな衝突を見せた。そこに日本文明の裏面の縮圖と云つたやうなものがあつたのだ。

(五) 浮雲の新著想と新描寫

當時の作家は、二葉亭が覗つたやうなところには、勿論、眼を付けようとはしなかつた。畢竟、二葉亭が、斯うした著眼點を得たのは、ベリンスキーの評論によつて、啓發させられたからであつた。而して其の著眼點が特異であつたのみならず、在來の筋の複雑、錯綜を尙んだのに對して筋の單純、人物の多數を出し入れたに對して少數の人物、偶然や突發の出來事を構成したに對してあく迄自然に事を搬んだのは、ドストエフスキーや、ガンチャロフの作品から暗示を得た結果だつた。江戸文學の殘影を夢みつゝあるものには、到底、夢想だもし得ない境地だつた。

既に彼れの行き方が、全然、在來とちがつて居た上に、其の性格と心理との表現の上にも、自然の描寫に於ても亦全然ちがつた手觸りを持つて居た。彼れは、『浮雲』の中心人物お勢の性格を描くことと内海文三の戀の心理を描くことの上には、全力を傾倒した。お勢の輕躁な、快活な文明かぶれのした性格は、徹底的に描かれて、些の缺陷もなかつた。お勢は、何かと云ふと、漢語や、英語を用ゐたり、眞理とか、男女交際とか云ふことを口にした。母の無教育で、保守的なことを輕蔑して、下等動物の名を與へて居たほどの生意氣な女學生風のところがあつた。それと同時に

に、文三の溫和な優柔な偏人らしい性格に共鳴するかと思へば、また文三の友人本田の輕佻な才子風に共鳴して、少しも、操守がなかつた。左様した點を、二葉亭が、はつきり描寫した。左の一節は、文三とお勢とが對話して居るところであるが、お勢の文明かぶれした輕躁なところが、能く出て居る。

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから、始終可笑しな事を言つちやアからかいますのサ、其れでもね、其たんびに私が辱しめ／＼したら、あれで些とは恥ぢたと見えてね、此頃ちやア其様に言はなくなりませんでしたよ。」

「へー、からかふ。どんな事を仰しやつて。」

「アノ——なんてすつて、其様々に親しくする位なら、寧ろ貴君と……(すこしもぢもぢして言ひかねて)結婚して仕舞へつて……。」

ト聞くと等しく文三は、駭然としてお勢の顔を見守める。されど此方は平氣の體で、

「ですがネ、教育のない者ばかりを責める譯にもゆきませんよねー、私の朋友なんぞは、教育の有ると言ふ程有りやしませんがね、それでもマア普通の教育は享けてゐるんですよ。それゐて貴君、西洋主義の解るものは廿五人の内に僅四人しかないの。その四人もネ、熟にゐるうちだけで、外へ出てからはね、口

程にもなく、兩親に壓制せられて、みんなお嫁に往つたり、お婿を取つたりして仕舞ひましたの。だから今まで此様な事を言つてるものは私はツかりだとおもふと、何だか心細くツて／＼なりません。でしたかね、此頃は貴君といふ親友が出来たから、アノ——大變氣丈夫になりましたワ。」

文三はチョイと一禮して、

「お世辭にも嬉しい。」

「アラお世辭ちやア有りませんよ、眞實ですよ。」

「眞實なら尙ほ嬉しいが、しかし私にやア貴女と親友の交際は到底出来ない。」

「ヲヤ何故ですエ、何故親友の交際が出来ませんエ。」

「何故といへば、私には貴嬢が解らず、また貴嬢には私が解らないから、どうも親友の交際は……。」

「さうですか、それでも私には貴君はよく解つてゐる積りですよ。貴君は學識が有つて、品行が方正で、親に孝行で……。」

「だから貴嬢には、私が解らないといふのです。貴嬢は私を、親に孝行だと仰しやるけれども、孝行ちやア有りません。私には……親より……大切な者があります……。」

ト、吃りながら言つて、文三は差俯向いて仕舞ふ。お勢は不思議さうに文三の容子を眺めながら、
「親より大切な者……親より……大切な……者。親より大切な者は、私にも有りますワ。」

て居る。

ふと又例の妄想が働きたして、無益な事を思はせられる。時としては妙な氣になつて、總て此頃の事は皆一時の戯れて、お勢は心から文三に背いたのでは無くて、唯背いた風をして、文三を試みてゐるので、其證據には、今にお勢が上つて来て、例の華かな高笑で、今までの葛藤を笑ひ消して仕舞はう、と思はれる事が有る。が、固より永くは續かん、無慈悲な記憶が働き出して、此頃あくたれた時のお勢の顔を憶ひ出させ、瞬息の間に、其快い夢を破つて仕舞ふ。またかういふ事も有る。ふと氣が滄つて、今から零落してゐながら、其様な藥袋も無い事に拘つて、徒らに目を送るを、極めて愚のやうに思はれ、もうお勢の事を思ふまいと、少時思ひの道を絶つて、まじくとしてみるが、それではどうも、大切な用事を仕掛けて罷めたやうで、心が落居ず、狼狽へて、またお勢の事に立戻つて悶え苦しむ。人の心といふものは、同一の事を間断なく思つてゐると、遂に考へ草臥れて、思辨力の弱るもので、文三もその通り、始終お勢の事を心配してゐるうちに、何時からともなく注意が散つて一事には集らぬやうになり、をり／＼互に何の關係をも持たぬ零々碎々の事を、取締もなく思ふことも有つた。曾て兩手を頭に敷き、仰向けに臥しながら、天井を凝視めて、初は例の如くお勢の事を彼此と思つてゐたが、その中にふと天井の木目が眼に入つて、突然妙な事と思つた。「かう見たところは、水の流れた痕のやうだな。」かう思ふと同時に、お勢の事は全く忘れて仕舞つた。そして尙ほ黙々とその木目を視入つて「心の取り方に依つては、高低が有るやうに見える

な。ふん、オブチカル、イリユウジョンか。」ふと文三等に物理を教へた、外國教師の立派な髯の生えた顔を憶ひ出すと、それと同時に、また、木目の事は忘れて仕舞つた。續いて眼前に、七八人の學生が現はれて來たと視れば、皆同學の生徒等で、或は鉛筆を耳に挟んでゐる者も有れば、或は書物を抱へてゐる者も有る。又は開いて視てゐる者も有る。能く視れば、どうか文三も其中に雜つてゐるやうに思はれる、今越歴の講義が終つて、試験に掛る所て、皆エレクトリカル、マシンの周邊に集つて、何事も解らんが何か頻りに云ひ争ひながら騒いでゐる。かと思ふと、忽ちそのマシンの生徒も烟の如く痕迹もなく消え失せて、ふとまた木目が目に入った。「ふん、オブチカル、イリユウジョンか。」と云つて、何故ともなく莞爾した。「イリウジョンと云へば、今まで讀んだ書物の中で、サリーの『イリユウジョン』ほど面白く思つたものは無いな。二日一晩に讀切つて仕舞つたツけ、あれほどの頭には如何したらなれるだらう。餘程組織が緻密に違ひない……。」サリーの脳髓とお勢とは何の關係も無さうだが、此の時突然お勢のことが、噴水の迸る如くに、胸を突いて騰る。と文三は腫物にでも觸られたやうに、あつと叫びながら跳ね起きた。

斯うして、二葉亭の心理描寫は、ロシヤの小説即ちドストエフスキーあたりの俤を髣髴させて居た。だが、當時、此の味を理解したのは、少數の讀者殊に文學上に相當の識見あるものに

限られて居た有様で、二葉亭の苦心も、遙かに後でなければ、一般に認識されなかつた。

(六) 「浮雲」の欠點と特長

『浮雲』は、以上のやうに成功した作品であるが、勿論、多少の缺點は免れなかつた。その第五回にお勢母子の争ひを叙して「此を親子喧嘩と思ふと、女丈夫の本意に背く。どうして／＼親子喧嘩……其様な不道德な者でない。是れはこれ辱なくも、難有くも日本文明の一原素ともなるべき新主義と、時代遅れの舊義と。衝突する處。よくお眼を止めて御覽あられませう。」と云つたのは、無用の説明で、此の種の語氣が、所々に散在して居た。時には、洒落味を帯びて、註釋なども挿入してあつたが、それ等は、當時の文學界では、止むを得ない缺點であつたらう。左様した點を除けば、今日、見ても、相當な藝術的作品として、推讃し得るのである。

それに文體、形式の上から見ると、破天荒と云つて宜いほどだつた。彼等は、言文一致で、地の文と會話とを繋ぐと共に、會話と地の文とは行を改めて書き、はつきり双方を區別させて、會話の頭に話す者の名を附けることを全廢した。また其の言文一致は、山田美妙らのよりも、遙かに自然で、ずつと進んで居たところがあつた。言文一致の試練時代にあつて、山田美妙が、第一にそれを唱説したに對して、事實の上はその規つたところを體現したのは、二葉亭だつた。即ち逍遙が唱へた内容の革新、美妙が唱へた文章の革新、此の二つを『浮雲』の上に略ぼ具體化したのである。

第三章 徳富蘇峯を中心とした民友社

(一) 「國民之友」の文學的勢力

『小説神髓』『書生氣質』『浮雲』によつて、小説界に黎明の色が動いたとするならば、民友社の創立によつて、評論界——一種の文明批評——の黎明が來たと云つて宜い。民友社の中心人物は、徳富蘇峯である。蘇峯ほど早く文名を成したものは、誠に少かつた。蘇峯は、熊本出身で、郷里の英學校と同志社とに學んで、キリスト教の感化を受けると同時に、英文學、漢文學の素養を積んだ。彼れが『將來の日本』と題する一書を携へて、上京した時は、白面の一書生に過ぎなかつたのであるが、田口卯吉、島田三郎らに認められて、忽ち文名を馳せて、評論壇の勇將となつた。それは『將來の日本』に於ける彼れの新思想、新文體が、歐化的傾向に投合して、青年の間に多くの共鳴者を得たからであつた。

蘇峯は、此の機に乗じて、其の新鋭の氣と潑刺とした新精神とを以て、民友社を組織して、明治二十年二月『國民之友』第一號を發行した。當時の青年が、それに對して、どんなに強い感銘を得た

かは、抱月、花袋らの回想を見れば、明かである。

其時分の青年の愛讀書が Marquay の『英國史』や『ピット傳』であつたのでも、その當時の状態を彷彿することが出来る。又一方政治法律に心をそぐ青年の多かつたことも事實である。丁度この時分だ、徳富蘇峯氏が『將來の日本』といふ本を掲げて田舎から出て來て、あゝ國民の友生れたりと言つて、平民主義を提唱したのは……國民の友……あの女神のペンを持つて立つてゐる黄かゝつた表紙、殊に忘れられないのは、その最初の春季附録に出た山田美妙齋の裸體の繪を口繪にした小説であつた。(花袋『東京の三十年』)其の冒頭に『嗟呼國民の友生れたり、何が故に生れたるか、現今日本の時勢其の必要を感じればなり』と云ふ文句があつて、維新の大變革『其の運動は火の如く、花の如く、雷の如く、電の如く』といふ風に今日では何でもない句を列べられても、當時の我々は、恍惚として面ほてりを覺える程の、幼稚にして鋭敏な感納を得たものである。(抱月『新文章論』)

蓋し蘇峯の文章は、全然、歐文脈を中心として、漢文學から得た豊富な文字を巧みに驅使して、マコーレー張りのところを持つた居たのであるが、斯うした文體は、當時、未だ誰も試みなかつたのである。此の點が、既に獨創的であつた上に、平民階級が漸く擡頭した機運と一致して、多數民衆の幸福と進歩とを計るべき平民主義を高調したことが、また深く青年の心を動かした。即ち内容

の上にも、形式の上にも、民友社風と云ふ一つの新しいスタイルを作つた。

嗟呼改革の健兒たる諸氏は、或は煩惱の夢に驚かされざる幽靜なる寶泉に於て安眠し、或は禁殿に於て顧問官となり、元老院に於て評議官となり、或は世襲の爵を給ひて貴族に列し、皆天恩の隆渥なるに浴し、優游殘年を樂み、以て安息なることを得たり。然らば則ち改革彼れ自身も亦た安息することを得べき乎、曰はく否、改革よ、改革よ、汝は決して安息なることを得ざるなり。

斯う云ふ。『國民の友』の文章は、忽ち流行し始めた。蘇峯の隨喜者は、到るところに出來た。而して其の第二の著書『新日本の青年』が、前後して出ると、誰も彼れも争うて眞先にそれを讀んだ。

(一) 評論家としての先驅者櫻痴と兆民

蘇峯が、雑誌主筆として、立身したについては、文章上、マコーレーに私淑したことは、誰も知つて居るところであるが、別に福地櫻痴の論文に傾倒したことを知るものは少いのである。櫻痴は其の後半生を脚本作者として送つたが、前半生殊に明治初年から、十九年頃までは、政論家としての第一人者を以て目されて居た。彼れが「私は」と云ふべきを「吾曹は」と云つて「吾曹子」と稱された

時代は、政治上、彼れの反對に起つて居たもの迄が、櫻痴の莊重な氣品の高い、情理共に盡した文章を愛讀した。蘇峯も亦其の一人であつたことは、『蘇峯文選』に於て、「眞に予を啓發し、予をして半夜屢々衾を蹴りて起たしめたるものは、福地櫻痴の主筆たる『東京日々』たりし也。予は當時の新聞を耽讀したるのみならず、學校の科程を休みて、私かに自から京都書藉館に赴き、明治七、八年以降の『東京日々』を繰り返し、其の重なる社説中、最も予をして興味を感ぜしめたるものを謄寫したり。」と告白したのを見てわかる。櫻痴の論文中、最も見るべきは『幕府衰亡論』であるが、これには、彼れの長所がよく出て居るのである。

徳川幕府が諸侯伯を制御せしは、一に幕府の武威に由れり。而して其武威は寛文延寶以來已に衰弱に赴きて復當初の實力あるに似ず。漸く元祿享保寛政の政を以て、時々是を更張して其外面を裝飾したるに過ぎざりしのみ。而して諸侯伯が之を窺知るも、尙幕府に抵抗する事を敢てせざりしものは、一は法令格式に牽制せられたると、一には各自の武威も亦幕府と同じき度數を以て衰弱したるが故なりしのみ。然るに癸丑甲寅亞國使節の渡來以後は盛に武備を修め士氣を養ひたるに由り、諸藩には幕府の上に出るの實力を蓄へたるが故に之に抵抗するの状況を喚起せるを更に怪しとするに足らざりしなり。況や夫れ開鎖の國論の如き、原來鎖國を唱へ初たるも幕府なり、開國を議し初めたるも幕府なり。其二者の衝突は幕府内に於

て初め自ら之を起し、遂に鎖國説を以て開國説を天保年間に壓伏して、其國是の模範を天下に示したるに係らず、癸丑甲寅に至りて俄然自からはに反對して開國の方向を執り、尙これを粉粧するに銷攘の假面を以てし開にして開にあらず、鎖にして鎖に非ざるの迷路に彷彿したり。之を奈何ぞ人心の乖離なきを得んや。

櫻痴の論文は、今日見ても、相當の價值を有して居るやうに思はれる。殊に當時にあつては新聞社會を風靡して、蘇峯が現はれる前までは、青年間にも持て囃された。櫻痴が文章上蘇峯に刺戟と暗示とを與へたことは少々でなかつたやうだ。

櫻痴と共に今一人、蘇峯が新しい文章を創始する迄に活躍して居たのは、『民約譯解』の筆者中江兆民である。彼れは、西園寺公望、松田正久、光妙寺三郎、酒井雄三郎らと共に、フランスの自由民權説をも高調した先驅者で、彼れが晩年『一年有半』を出す迄に世に公にした著書には『維氏美學』『三醉人經論問答』『泰西理學小史』『理學鈞玄』『佛蘭西革命前二世紀事』などがあつた。

彼れは『自由新聞』『東雲新聞』『日刊政論』『立憲自由新聞』『民權新聞』などの主筆をした時代に其の雄勁な論文を書いた。彼れは、フランス語に堪能であると同時に、漢文學や、佛學にも通じて居たので、一字一句、引締つて居て、而も時々、奇警な語が見出された。

民權是れ至理也、自由平等是れ大義也、此等理義に反する者は竟に之れが罰を受けざる能はず。百の帝國主義有りとも雖も、此の理義を滅却することは終に得可からず。帝王尊しと雖も、此の理義を敬重して茲に以て其尊を保ち得可し。此理や漢土に在ても孟軻柳宗元早く之を觀破せり、歐米の專有に非ざる也。

兆民の文章は、斯うした風であつた。兆民のほか『日本開化の性質』を書いた田口鼎軒がある。鼎軒も亦垢抜けのした論文を書いた。要するに、明治の新しい評論文は、福澤によつて始められて櫻痴、兆民、鼎軒らを経て、蘇峯に及んだのである。而して其の歐化的色彩に於ては、蘇峯の新時代に入つて、最も顯著となつたのである。

民友社の蘇峯に對して、別に國粹的思想から出發した一團の政治文學的結社を組織したのは、三宅雪嶺志賀矧川らの政教社であつた。雪嶺は蘇峯と對立した論評界の一勢力で其の雄健な奇聳な文を以て『眞善美日本人』『偽醜惡日本人』などを發表した。此の一派は、思想的には、稍強い影響を社會の一部に與へたけれども、文學的には、唯漢文學、佛教、國文學の復興に資したところがあつた丈だつた。而して哲人的風格ある雪嶺が、新聞雜誌の上に於て、其の光彩を放つたのは、それより少し後の事であつた。

(三) 當時續出した雑誌

民友社は、一時、キリスト教思想を背景とした平民主義の思想を以て、多くの青年に強い影響を與へたばかりでなく、文學的にも、新人を社會に紹介したり、海外文學思潮の流入を計つたりして可なりに有力な印象を文壇に刻み込んだ。

當時、蘇峯の下に集つた人々は、山路愛山、竹越三又、徳富蘆花、宮崎湖處子、塚越停春、人見一太郎、矢崎嵯峨の家、角田浩々歌客、松原二十三階堂らで、國木田獨歩は、遙かに遅れて、二十七年頃に、『國民新聞』へ入社したのである。また民友社の客員には、森鷗外、山田美妙、二葉亭四迷、内田不知庵、森田思軒、依田學海、石橋忍月、中西梅花らの人々が居た。

それ等の才人たちによつて『國民の友』の内容は、今日の『中央公論』『改造』『太陽』『解放』などのやうに、政治、文學、宗教、社會の各方面に向つて、新しい評論を加へたのであるが、それと共に文學欄を設けたり、春夏二期に文學附録へ添へたりしたので、文壇で名を爲さうとする人々の登龍門となつて居た。其の文學附録に出た作品には、明治初期の文壇を飾つたものが少くなかつた。鷗外の『舞姫』逍遙の『細君』露伴の『一口劍』一葉の『わかれ道』透谷の『宿魂鏡』鏡花の『琵琶傳』を初め、文

學的翻譯の試みだつた森田思軒の『探偵エーベル』も、二葉亭四迷の『あひどき』も、二十一年頃の文學附録に出たのである。

斯うして『國民の友』は、雑誌界に新興の氣運をも與へた。『國民の友』以前には、今日の『中央公論』の前身であるところの『反省雑誌』が、十九年一月に出たのであるが、其の影響は、未だ著大でなかつた。『國民の友』が出ると共に、其のハイカラな體裁や内容が、何人にも、フレッシュな感じを與へて、それと前後して『哲學雜誌』『以良都女』『出版月評』『日本人』『我樂多文庫』『文』『都の花』『新著百種』『女學雜誌』『少年園』『小説萃錦』『大和錦』『新小説』『史海』などが續出した。二十二年十月には、鷗外の主宰した『柵草紙』二十四年十月には、逍遙が主宰した『早稻田文學』などが出て、文學界は色めいて來た。

以上のうちで、文學的に最も密接な關係があつたのは『都の花』『柵草紙』『早稻田文學』『新著百種』『我樂多文庫』などであつた。『都の花』には、二葉亭の『浮雲』第三編を始め、矢崎嵯峨の屋の『初戀』幸田露伴の『露園々』山田美妙の『いちご姫』尾崎紅葉の『二人女房』などが載せられた。『新著百種』には紅葉の『色懺悔』露伴の『風流佛』柳浪の『殘菊』などが出た。

『柵草紙』と『早稻田文學』とは、當時に於ける文藝評論を主として載せた點に於て、文壇の思想を

導くことに盡した上に於て、好いコンツラストとなつて居た。勿論、此の二雑誌が出るまでも、文學評論の筆を執つた人たちはあつた。私は、森田思軒や、石橋忍月や、高瀬文淵や、正直正太夫（齋藤綠雨）や八面樓主人（宮崎湖處子）などの人々が、夙に評論を書いたことを知つて居るけれども眞に文藝上に於ける嚴密な正しい意味の批評を最初に書いたのは、どうしても、逍遙と鷗外の二人であつたと云ひたい。

（四）文學評論の創始時代

在來の明治文學史には、小説を主として、それに併行すべき文藝評論のことを閑却して居るけれども、それは、大なる誤りである。

『柵草紙』と『早稻田文學』が出るまでは、矢張『國民の友』などに於ける文學評論が、一番、有力であつた。蘇峯は、嘗に政治に對して興味を有して居たのみならず、哲學、歴史、文學、美術の方面に於ても、相當の興味を有して居たので、どの方面にも、評論を試みた。文藝評論の専門化は逍遙鷗外が、文壇に相角逐するまでは、未だ實現されて居なかつた。それで蘇峯の評論は、文學方面にも及んで、其の最初の時代にシリーズとして出した『國民叢書』には『進歩乎退歩乎』『人物管見』『青年と教育』『靜思餘錄』『文學斷片』『天然と人』などがあつて、到る處、蘇峯が文學に對する一家見を洩らしたところがある。さうした方面には、創見はないが、セント・ブウウや、マシユ・アーノルドなどの文學論などを讀んで得た文學上の新知識を普及した効果は、慥かにあつた。湖處子の『歸省』のやうに、蘇峯の紹介や、批評によつて、文壇に認められた作品や、翻譯なども往々あつた。

政治記事の新しい書き方、新しい人物評、さうしたものは、蘇峯の趣味眼に映じて、始めて、文學化され、生彩を帯びて來た。それは、イギリスなどの新聞から暗示を得て、彼れが、何人よりも早く試みて成功したのであつた。人物論も、勿論、昔からあつたにはちがいないが、其の新しい見方、精細な性格の解剖法などは矢張、蘇峯によつて、始めて模型を示されたのである。

蘇峯は、また一種の新書翰體を以て、其の意見を發表する様式を發明した。『國民新聞』の『東京だより』は、その結果の一つであるが、『熱海だより』に於て、頼山陽の歴史及び文章を論じたなどは、其の一例であつた。明治十九年頃から、日清戦争前後迄は、蘇峯が文學的に、最も油の乗つた時代で、才思が泉のやうに湧いて出て、抑へることが出来なかつた有様を想像し得る。

今日から見ると、蘇峯の文學批評は、新聞記者の文學觀を披瀝したもので、素より専門家の批評と同一視することは出来ないけれども、未だ文學批評の振はなかつた當時にあつては、文學の進歩

に裨補するところがあつた。其の著『文學斷片』に於て、「著者文學者にあらず、又た文學者たるを願はず。然れども文學を愛する、若し人間の通有性ならしめば、著者に於ても亦た之れなくんばあらず。」と云ひ「非文學者の文學談、固より粗枝大葉なり。」と告白して居るのは、必ずしも、表面の謙遜のみとは思はれない。遠慮なく言へば、粗枝大葉の觀なきを得ない。けれども、蘇峯が明治二十年七月『國民之友』に於て、政治小説の弊を論じ、次いで文學の目的、愛の特質に論及して、文學者に眞面目な態度を執るべきことを説いたのは、決して無益の言ではなかつた。たとひ、粗枝大葉でも、意義ある教訓であつた。

殊に『基督教の文學』を論じて、聖書の詩的價値に論及したことは、當時の文學界にキリスト教思想を流入して、清新な風趣を添へるべき一つの力となつた。蘇峯は、其の論文の一節に於て「試に新約聖書を繙け、主の祈禱文、山上の教訓、保羅の手簡等、何れ其れ質素なるや。野の百合花、空飛ぶ鳥、葡萄蔓、子羊の譬喩、何ぞ其れ優美にして趣味多きや。」と述べたのは、今日に於ては珍しくないけれども、明治二十年代にあつては、新しい考へであり、新しい刺戟であつたにちがいないのである。

(五) 蘇峯が創始した人物評論と政治記事の文學化

蘇峯が、人物評論の新しい模型を示したのは、明治二十一年三月發表した『新日本の二先生』であつた。それは、福澤と新島との二人物を對照して、評論したものである。其の書き方は、當時に於て、最も新しく、且つ情理を盡したものに庶幾かつた。

蓋し福澤君の教育上に於ける事業は、既に芽を發し花を開き實を結べり、新島君の事業に至つては、纔かに芽を發したる迄なり。故に福澤君の事業を論ずる時には、吾人は歴史家の資格となり、新島君の事業を論ずる時には、吾人は預言者の位地に立たざる可からず。斯の如く二君の事業は、其前後する所あれども吾人は二君を以て我邦教育世界の重なる感化力と謂はすんはあらず。何となれば、二君は實に明治年間教育の二大主義を代表する人なればなり。即ち物質的知識の教育は、福澤君に依つて代表せられ、精神的道徳の教育は、新島君に依つて代表せらる。

(前略)福澤君は鐵道の技術師にも非ず、電氣學者にも非ず、而して君が常に鐵道電信を云々して、口に絶たざる所以の者は、鐵道電信を愛するに非ず、鐵道電信を成就したる物質上の文明を愛するものなり。新島君は純乎たる僧侶に非ず、而して其の基督教を主張して止まざる者は、實に基督教の傳播を欲するに非

す、基督教の主義を人事に適用せんと欲すればなり。(下略)

斯うして、新しい人物論は、蘇峯によつて、開始されたと云つて差支えない。それと共に、政治論や、政治記事の新しい書き方も亦彼れによつて、始められた點があつた。二十年代に書いた『外交の憂は外に在らずして内にあり』『支那を改革する難きにあらす』『隠密なる政治上の變遷』の如きは、蘇峯独自の新しい政治論であつた。『隠密なる政治上の變遷』は、可なりに長論文で、第一から第五に亘つて居る。其のうちに於て、中流社會の新勢力の勃興に論及して「我邦に於て從來中等民族無し、而して是れあるは實に今日に始まる。吾人は實に此の民族の社會に生ぜんとするを見て我邦の爲めに祝せざるを得ず。何となれば、此の民族の生ずるは、我邦が漸く平民社會に入るの兆候にして、此の民族が愈々勢力を得るは、我邦に於て平民主義が愈上勝を制するの兆候なればなり夫れ中等民族とは何物ぞや、獨立自治の平民なり、故に彼等は自治自活の社會に非されは、決して生長する能はず。若し社會の制度にして、唯た主人と奴隸との二階級を以て組織するの時に於ては中等民族なる者は、決して存在すること能はず。何となれば、一は他を役し、一は他に役せられ、二者共に與に自活自立の人民たる能はされはなり。我邦從來の制度實に斯くの如くありしなり、焉ぞ之れに向つて、中等民族の生ずるを望まんや。而して現今に於て中等民族の生長せんとするは、

即ち新日本の生長する所以にして、吾人は實に此の民族の生長を以て、我日本の新らたに蘇生したるを認む。」と論定したのは當時の卓見であつた。

新しい政事記事は、第六議會の傍聴傍觀を書いた『解散！ 嘆呼解散！』などに徴することが出来る。其の冒頭に於て、

詔勅！ 詔勅！ 伊藤總理大臣の演説！ 來れ！ 直ちに、直ちに！

余は倉皇車を飛ばして衆議院に赴く。例に仍りて傍聴滿員の謝絶札は掛られぬ。但た余は院内通行の特許券を有したれば、直ちに議長室に徑して、議場に沿うたる廊下に出づ。

青鞞を隔て、議場を瞥見すれば、異形の人は、議長席を占めたり。果然整脱矜嚴なる楠木は參内し、豊顔平骨なる片岡は之に代れり。議場人少なく天下人多し。議員三三五五寓語するを見る。

と記した一節なども、歐文的で、當時の光景を簡約に、而も印象的に表現してある。乾燥な政治記事を文學化したのは、蘇峯の功であつた。

彼れは、斯くして、隨所に新聞文學の新領土を開いた。而して一方に於て、極力、平民主義の鼓吹に力めた。日清戦争頃迄は、彼れの感化の下にあつた青年が少くなかつた。民友社の同人も亦多く、蘇峯の感化の下にあつた。すべての新機軸、新流風は、蘇峯が先づ作つて、他人に及ぼすと云